

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(96)

— 新種子島空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集 —

SAN KAKU YAMA

三角山遺跡群(3)

(三角山 I 遺跡)

第 2 分冊

縄文時代早期以降 編

2006年1月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
(96)

三角山遺跡群(3)
(三角山 I 遺跡)

第 2 分冊

二〇〇六年一月 鹿児島県立埋蔵文化財センター

目次

本文目次

(第2分冊)

第5節 縄文時代早期(Ⅲ層)	
(1) 遺構	3
(2) 遺物	
① 土器	41
② 石器・石製品	72
第6節 縄文時代前期(Ⅱa層)	
(1) 遺構	147
(2) 遺物	
① 土器・土製品	160
② 石器	171
第7節 古墳時代以降(Ⅰ・Ⅱa層)	
(1) 遺構	206
(2) 遺物	210
① 土器	210
第4章 発掘調査のまとめ	211
付録 科学分析・同定の結果	241
あとがき	

挿図目次

(第2分冊)

第1図 土坑1	3
第2図 縄文時代早期遺構配置図(A地区)	4
第3図 縄文時代早期遺構配置図(B地区-1)	5
第4図 縄文時代早期遺構配置図(B地区-2)	6
第5図 縄文時代早期遺構配置図(C地区)	7
第6図 集石(1)	8
第7図 集石(2)	9
第8図 集石(3)	10
第9図 集石(4)	11
第10図 集石(5)	12
第11図 集石(6)	13
第12図 集石(7)	14
第13図 集石(8)	15
第14図 集石(9)	16
第15図 集石(10)	17
第16図 集石(11)	18
第17図 集石(12)	19
第18図 集石(13)	20
第19図 集石(14)	21
第20図 集石(15)	22
第21図 集石(16)	23
第22図 集石(17)	24
第23図 集石(18)	25
第24図 集石(19)	26
第25図 集石(20)	27
第26図 石版式土器集中遺構	28
第27図 石版式土器	29
第28図 縄文時代早期(Ⅲ・Ⅳ層)遺物出土状況全体図	31
第29図 縄文時代早期(Ⅲ・Ⅳ層)遺物出土状況図(1)-1	32
第29図 縄文時代早期(Ⅲ・Ⅳ層)遺物出土状況図(1)-2	33
第30図 縄文時代早期(Ⅲ層)遺物出土状況図(2)	34
第31図 縄文時代早期(Ⅲ層)遺物出土状況図(3)	34
第32図 縄文時代早期(Ⅲ層)遺物出土状況図(4)	35
第33図 縄文時代早期(Ⅲ層)遺物出土状況図(5)	36
第34図 縄文時代早期(Ⅲ層)遺物出土状況図(6)	37
第35図 縄文時代早期(Ⅲ層)遺物出土状況図(7)	38
第36図 縄文時代早期(Ⅲ層)遺物出土状況図(8)	39
第37図 遺物分布立面図	40
第38図 縄文時代早期の土器(1)	43
第39図 縄文時代早期の土器(2)	44
第40図 縄文時代早期の土器(3)	45
第41図 縄文時代早期の土器(4)	46

第42図 縄文時代早期の土器(5)	47
第43図 縄文時代早期の土器(6)	48
第44図 縄文時代早期の土器(7)	49
第45図 縄文時代早期の土器(8)	50
第46図 縄文時代早期の土器(9)	51
第47図 縄文時代早期の土器(10)	52
第48図 縄文時代早期の土器(11)	53
第49図 縄文時代早期の土器(12)	54
第50図 縄文時代早期の土器(13)	55
第51図 縄文時代早期の土器(14)	56
第52図 縄文時代早期の土器(15)	57
第53図 縄文時代早期の土器(16)	58
第54図 縄文時代早期の土器(17)	59
第55図 縄文時代早期の土器(18)	60
第56図 縄文時代早期の土器(19)	61
第57図 縄文時代早期の土器(20)	62
第58図 縄文時代早期の土器(21)	63
第59図 縄文時代早期の土器(22)	65
第60図 縄文時代早期の土器(23)	66
第61図 縄文時代早期の土器(24)	67
第62図 縄文時代早期の土器(25)	68
第63図 縄文時代早期の土器(26)	69
第64図 縄文時代早期の土器(27)	70
第65図 縄文時代早期の土器(28)	71
第66図 縄文時代早期の土器(1)	73
第67図 縄文時代早期の土器(2)	74
第68図 縄文時代早期の土器(3)	75
第69図 縄文時代早期の土器(4)	76
第70図 縄文時代早期の土器(5)	77
第71図 縄文時代早期の土器(6)	78
第72図 縄文時代早期の土器(7)	79
第73図 縄文時代早期の土器(8)	80
第74図 縄文時代早期の土器(9)	81
第75図 縄文時代早期の土器(10)	82
第76図 縄文時代早期の土器(11)	83
第77図 縄文時代早期の土器(12)	84
第78図 縄文時代早期の土器(13)	85
第79図 縄文時代早期の土器(14)	86
第80図 縄文時代早期の土器(15)	87
第81図 縄文時代早期の土器(16)	88
第82図 縄文時代早期の土器(17)	89
第83図 縄文時代早期の土器(18)	90
第84図 縄文時代早期の土器(19)	91
第85図 縄文時代早期の土器(20)	92
第86図 縄文時代早期の土器(21)	93
第87図 縄文時代早期の土器(22)	94
第88図 縄文時代早期の土器(23)	95
第89図 縄文時代早期の土器(24)	96
第90図 縄文時代早期の土器(25)	97
第91図 縄文時代早期の土器(26)	98
第92図 縄文時代早期の土器(27)	99
第93図 縄文時代早期の土器(28)	100
第94図 縄文時代早期の土器(29)	101
第95図 縄文時代早期の土器(30)	102
第96図 縄文時代早期の土器(31)	103
第97図 縄文時代早期の土器(32)	104
第98図 縄文時代早期の土器(33)	105
第99図 縄文時代早期の土器(34)	106
第100図 縄文時代早期の土器(35)	107
第101図 縄文時代早期の土器(36)	108
第102図 縄文時代早期の土器(37)	109
第103図 縄文時代早期の土器(38)	110
第104図 縄文時代早期の土器(39)	111
第105図 縄文時代早期の土器(40)	112
第106図 縄文時代早期の土器(41)	113
第107図 縄文時代早期の土器(42)	114

第108図	縄文時代早期の石器 (43)	115	第174図	縄文時代前期の石器 (16)	187
第109図	縄文時代早期の石器 (44)	116	第175図	縄文時代前期の石器 (17)	188
第110図	縄文時代早期の石器 (45)	117	第176図	縄文時代前期の石器 (18)	189
第111図	縄文時代早期の石器 (46)	118	第177図	縄文時代前期の石器 (19)	190
第112図	縄文時代早期の石器 (47)	119	第178図	縄文時代前期の石器 (20)	191
第113図	縄文時代早期の石器 (48)	120	第179図	縄文時代前期の石器 (21)	192
第114図	縄文時代早期の石器 (49)	121	第180図	縄文時代前期の石器 (22)	193
第115図	縄文時代早期の石器 (50)	122	第181図	縄文時代前期の石器 (23)	194
第116図	縄文時代早期の石器 (51)	123	第182図	縄文時代前期の石器 (24)	195
第117図	縄文時代早期の石器 (52)	124	第183図	縄文時代前期の石器 (25)	196
第118図	縄文時代早期の石器 (53)	125	第184図	縄文時代前期の石器 (26)	197
第119図	縄文時代早期の石器 (54)	126	第185図	縄文時代前期の石器 (27)	198
第120図	縄文時代早期の石器 (55)	129	第186図	縄文時代前期の石器 (28)	199
第121図	縄文時代早期の石器 (56)	130	第187図	縄文時代前期の石器 (29)	200
第122図	縄文時代早期の石器 (57)	131	第188図	縄文時代前期の石器 (30)	201
第123図	縄文時代早期の石器 (58)	132	第189図	縄文時代前期の石器 (31)	202
第124図	縄文時代早期の石器 (59)	133	第190図	表採資料 (1)	203
第125図	縄文時代早期の石器 (60)	134	第191図	表採資料 (2)	204
第126図	縄文時代早期の石器 (61)	135	第192図	表採資料 (3)	205
第127図	縄文時代早期の石器 (62)	136	第193図	古墳時代以降の遺構配置図	207
第128図	縄文時代早期の石器 (63)	137	第194図	土坑 (1)	208
第129図	縄文時代早期の石器 (64)	138	第195図	土坑 (2)	209
第130図	縄文時代早期の石器 (65)	139	第196図	古墳時代と古代の土器	210
第131図	縄文時代早期の石器 (66)	140			
第132図	縄文時代早期の石器 (67)	141			
第133図	縄文時代早期の石器 (68)	142			
第134図	縄文時代早期の石器 (69)	143			
第135図	縄文時代早期の石器 (70)	144			
第136図	縄文時代早期の石器 (71)	145			
第137図	縄文時代早期の石器 (72)	146			
第138図	縄文時代前期遺構配置図	147			
第139図	土坑1・マンヒル?	148			
第140図	土坑1の遺構内遺物	149			
第141図	土坑2	150			
第142図	集石 (1)	151			
第143図	集石 (2) 遺構内遺物	152			
第144図	集石 (3) 遺構内遺物	153			
第145図	集石 (4)	154			
第146図	縄文時代前期 (IIa層) 遺物出土状況全体図	155			
第147図	縄文時代前期 (IIa層) 遺物出土状況図 (1)	156			
第148図	縄文時代前期 (IIa層) 遺物出土状況図 (2)	157			
第149図	縄文時代前期 (IIa層) 遺物出土状況図 (3)	158			
第150図	縄文時代前期 (IIa層) 遺物出土状況図 (4)	159			
第151図	縄文時代前期の土器 (1)	161			
第152図	縄文時代前期の土器 (2)	162			
第153図	縄文時代前期の土器 (3)	165			
第154図	縄文時代前期の土器 (4)	166			
第155図	縄文時代前期の土器 (5)	167			
第156図	縄文時代前期の土器 (6)	168			
第157図	縄文時代前期の土器 (7)	169			
第158図	縄文時代前期以降の土器・土製品	170			
第159図	縄文時代前期の石器 (1)	172			
第160図	縄文時代前期の石器 (2)	173			
第161図	縄文時代前期の石器 (3)	174			
第162図	縄文時代前期の石器 (4)	175			
第163図	縄文時代前期の石器 (5)	176			
第164図	縄文時代前期の石器 (6)	177			
第165図	縄文時代前期の石器 (7)	178			
第166図	縄文時代前期の石器 (8)	179			
第167図	縄文時代前期の石器 (9)	180			
第168図	縄文時代前期の石器 (10)	181			
第169図	縄文時代前期の石器 (11)	182			
第170図	縄文時代前期の石器 (12)	183			
第171図	縄文時代前期の石器 (13)	184			
第172図	縄文時代前期の石器 (14)	185			
第173図	縄文時代前期の石器 (15)	186			

表 目 次

(第2分冊)

第9表	縄文時代早期の土坑観察表	27
第10表	縄文時代早期の遺構内土器観察表	28
第11表	縄文時代早期の遺構内石器観察表	28
第12表	縄文時代前期の集石観察表	30
第13表	縄文時代前期の土坑観察表	148
第14表	縄文時代前期の集石観察表	150
第15表	縄文時代前期の遺構内石器観察表	150
第16表	石器組成詳細 (破片数)	217
第17表	グリッド・石材別製作破片等の数	220
第18表	土器観察表 (縄文時代早期以降)	223
第19表	石器観察表 (縄文時代早期以降)	233

第5節 縄文早期

三角山1遺跡ではⅢ層に該当し、縄文時代早期の遺構が42基、遺物は土器や石器が多量に出土している。地形や遺物出土状況等から、おおむね3つの地区に分けられる。

A地区はもともと東に位置する。グリッドではA～G-3～8区の範囲である。当該地は遺跡内において舌状に張り出した部分にあたる。西から東にかけてゆるやかに傾斜し、最高地の標高が242.6m、最低値の標高が240.5mの値を示す。遺構は、集石4基である。遺物の集中は稜線上を中心にある程度の広がりを持って分布していた。

B地区は北西に位置する。グリッドではA～J-9～14区の範囲である。A地区とB地区をつなぐ稜線上と東西分水嶺の稜線上に位置する。北東側から入り込んだ谷の下り口にもあたる。最高地の標高が244.0m、最低値の標高が241.4mの値を示す。遺構は、集石25基と土器集中1基である。遺物の集中は稜線上と谷口にみられた。なお、遺構については、分布状況に応じてさらに2地区に分けた。

C地区は南西に位置する。グリッドではL～Q-9～14区の範囲である。C地区はB地区につながる東西分水嶺の稜線上と西に舌状に張り出した部分にあたる。最高地の標高が244.33m、最低値の標高が242.0mの値を示す。遺構は、土坑1基と集石11基である。遺物の集中は稜線上とほぼ中央部にみられた。なお、遺構については、分布状況に応じてさらに2地区に分けた。

(1) 遺構

① 土坑

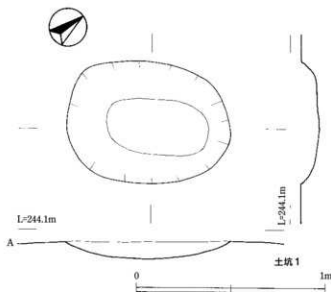
C地区のV層上面で1基検出された。

土坑1 (N-10区)

県道の表土直下のV層上面で検出された。埋土はV層が黒っぽく濁った感じで、微細な炭化物を含む。長径87cm・短径64cm・検出面からの深さ9.3cmで平面形は楕円形をしている。床近くで方形の角礫が出土したが自然礫であった。遺構の用途は不明であるが、県道建設によって削平された集石の痕跡の可能性はある。

② 集石

集石は40基検出された。石材は砂岩が主である。タイプは集中密度の高いものから散在しているもの、掘り込みの有無などさまざまである。



第1図 土坑1

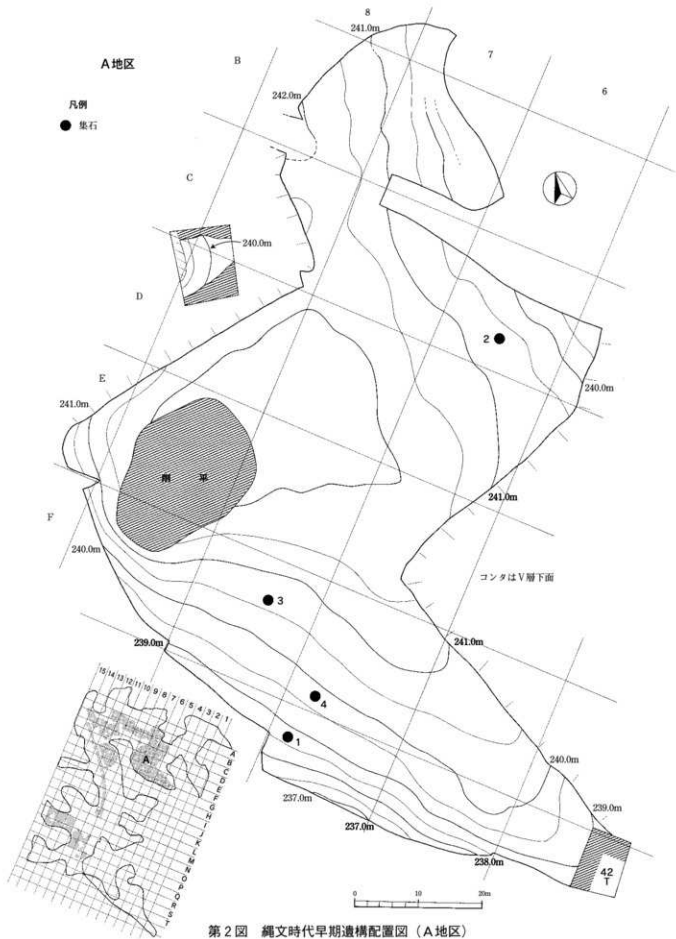
A地区

1号集石 (G-6区) 1類

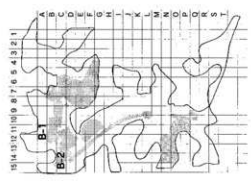
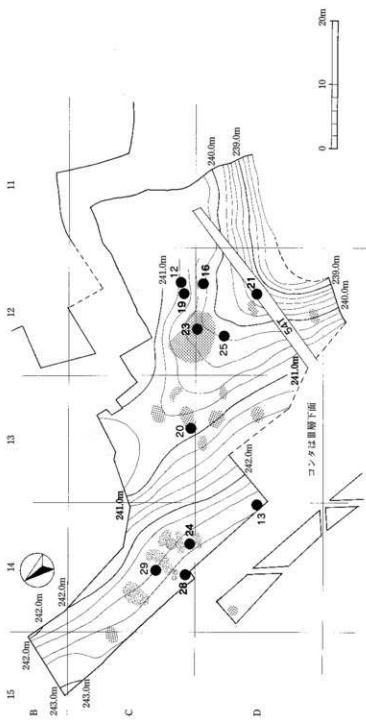
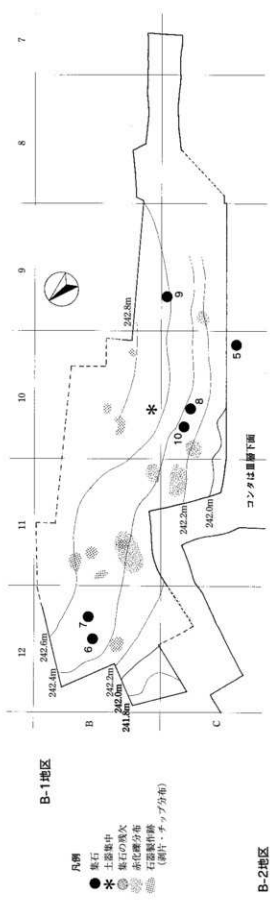
傾斜面に設置されており、傾斜に沿って礫がばらけた感じである。かなり散在した状態で、傾斜の低い方に小さな礫が多い。直径3～18cmの赤化した角礫で構成されているが、炭化材も含まれていた。なお、周辺はIV層が無く、Ⅲ層とV層の判別も微妙であった。そのため、この集石は周辺の遺物出土状況から、縄文草創期のものではないかと思われた。しかしながら、炭化材は¹⁴C年代測定の結果6890±60年BP(補正¹⁴C年代)の値を示した。これは、縄文早期に該当する。

2号集石 (C-6区) 3類

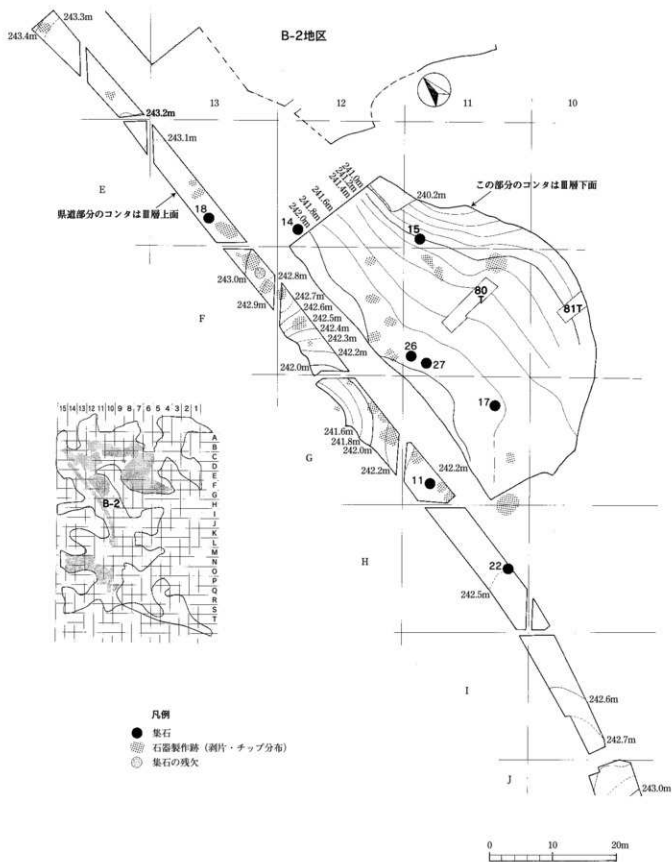
ほぼ平らな面を円形に広く掘り込んで設置している。直径2～18cmの赤化し熟破砕した角礫で構成されている。掘り込みの中に礫が詰め込まれており、周囲に若干の礫が散在している状況である。



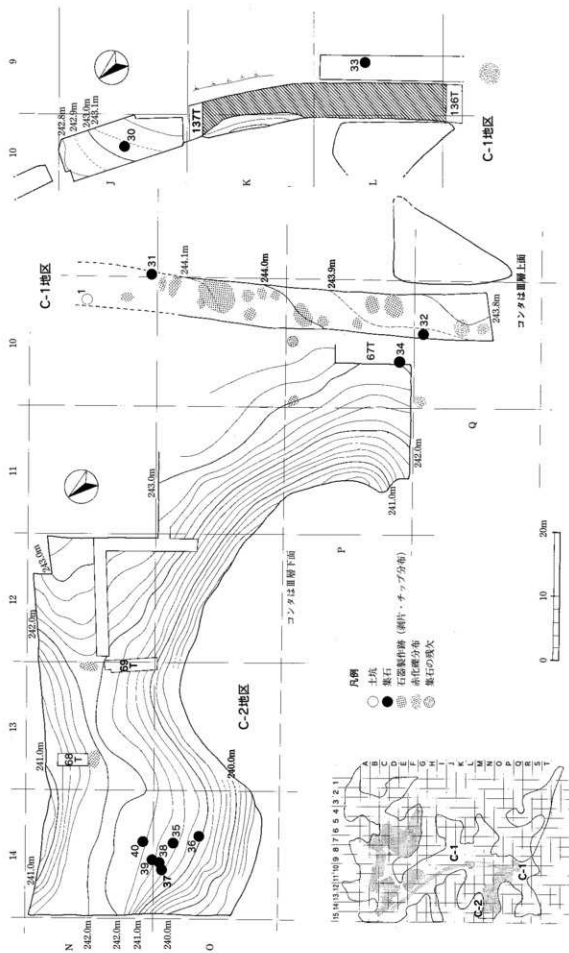
第2図 縄文時代早期遺構配置図 (A地区)



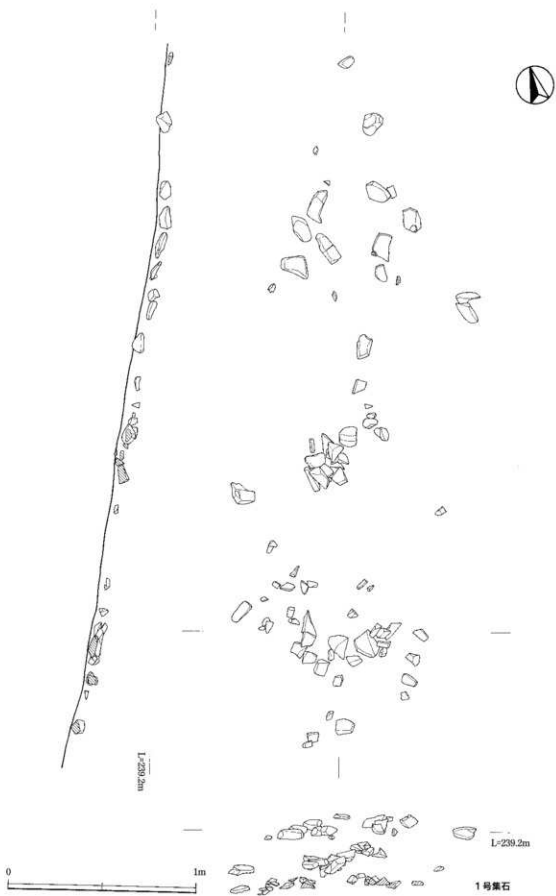
第3図 縄文時代早期遺構配置図 (B地区-1)



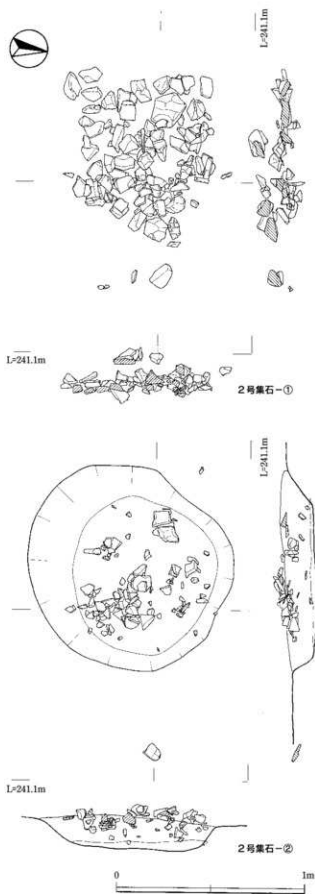
第4図 縄文時代早期遺構配置図 (B地区-2)



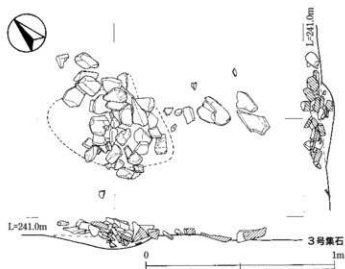
第5図 縄文時代早期遺構配置図 (C地区)



第6図 集石(1)



第7図 集石(2)



第8図 集石(3)

3号集石 (F-7区) 5類

ほぼ平らな面を浅く掘り込んで設置している。直径2~18cmの赤化し熱破砕した角礫で構成されている。掘り込みの中に礫が詰め込まれており、南東側に礫が散在している状況である。周辺には薩摩火山灰が点在しており、集石の埋土からは炭化材も採取できた。なお、炭化材は ^{14}C 年代測定の結果、8830±70年BP(補正 ^{14}C 年代)ということが判明している。

4号集石 (F-6区) 5類

傾斜面を浅い皿状に掘り込んで設置しているが、礫はかなり散在した状態である。炭化物がまばらに入っているが、埋土は特に変色していない。直径3~20cmの赤化し熱破砕した角礫で構成されている。なお、周辺は26号集石と同様にⅣ層が無く、Ⅲ層とⅤ層の判別が微妙であった。そのため、この集石も周辺の遺物出土状況から、縄文草創期のものではないかと思われる。しかしながら、炭化材は ^{14}C 年代測定の結果6800±60年BP(補正 ^{14}C 年代)、暦年代交点はBC5635の値を示している。これもまた、縄文早期に該当する。

B-1地区

5号集石 (C-10区) 1類

ほぼ平らな面に設置しているが、掘り込みは見られず、土も変色していない。ほとんどが直径3~12cmのもろく赤化した角礫で構成されているが、熱破砕した円礫も2点含まれる。やや拡散した状態である。

6号集石 (B-12区) 1類 (7号とセットなら4類)

ほぼ平らな面に設置している。直径2~15cmの赤化した角礫で構成されているが、全体に7号集石と比べて礫が小さい。7号集石の礫を掻き出したものと考えられ、それとセットの可能性が高い。

7号集石 (B-12区) 4類

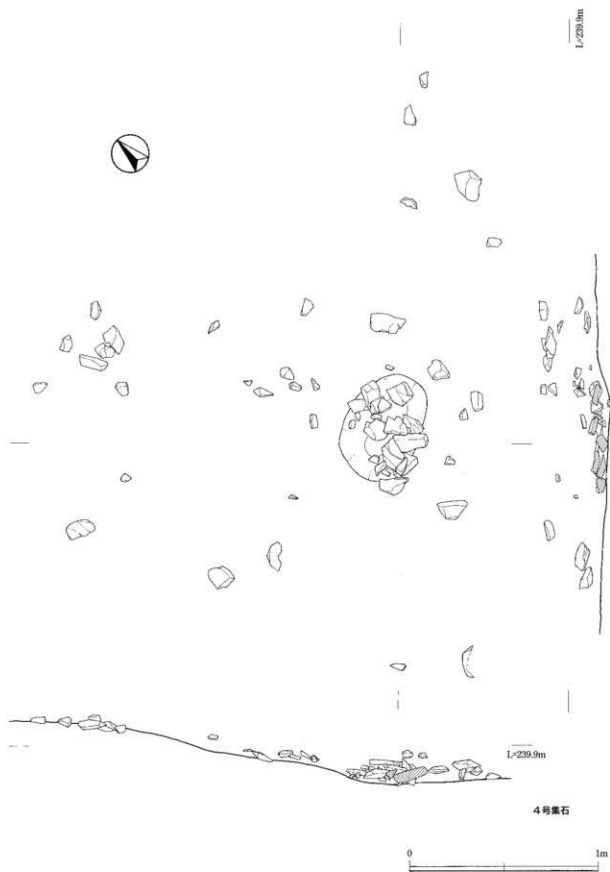
ほぼ平らな面に設置している。土の変色が観察されるが、被熱による硬化と炭や灰がしみこんだことによるものと考えられ、掘り込みではないと判断した。中心付近の下部には炭化材もあった。他の集石のものよりやや大きめの直径5~25cmのもろく赤化した角礫で構成されているが、中心近くに軽石が1点含まれる。また、北側に少し離れて、赤化していない緑色を帯びた軟質砂岩が散在する。なお、炭化材は ^{14}C 年代測定の結果、8820±80年BP(補正 ^{14}C 年代)ということが判明している。また、暦年代交点はBC7950の値を示している。さらに、すぐ近くに6号集石があるが、それとセットの可能性はある。

8号集石 (C-10区) 3類

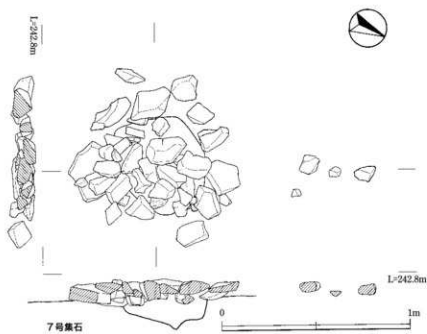
ほぼ平らな面を掘り込んで設置している。直径3~16cmの赤化し熱破砕した角礫で構成されている。掘り込みの中に礫が詰め込まれており、周囲に少数の礫が散在している状況である。中心部は礫が少ないため、ここから食材が取り出されたものと思われる。

9号集石 (B・C-9区) 3類

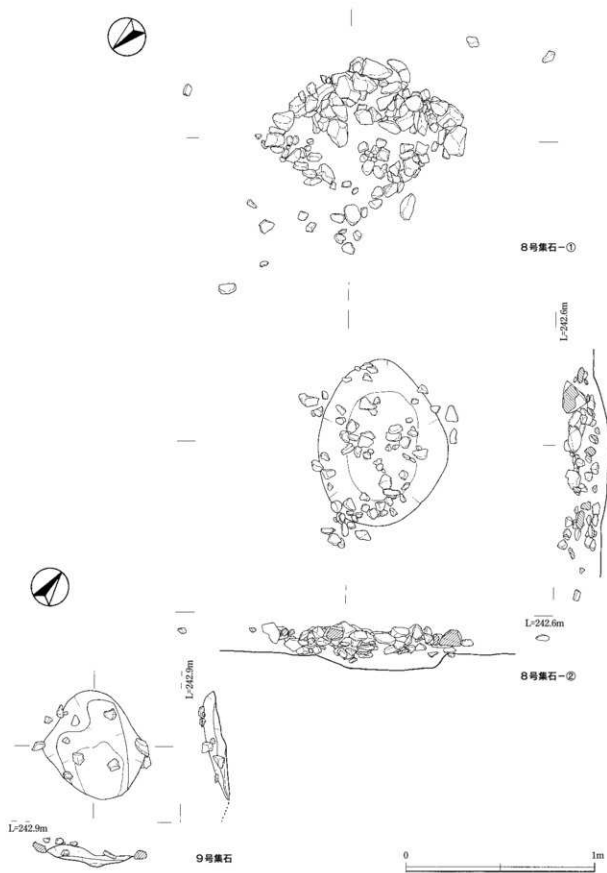
ほぼ平らな面を掘り込んで設置しているが、大きな割に礫はまばらである。直径3~10cmの赤化した角礫が掘り込みの中に散在している。



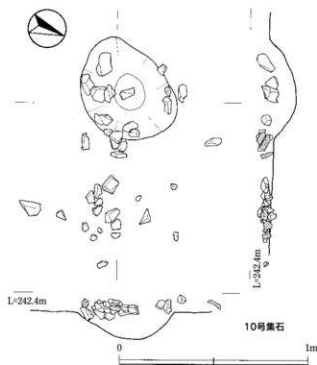
第9図 集石（4）



第10図 集石 (5)



第11図 集石 (6)



第12図 集石 (7)

10号集石 (C-10区) 5類

ほぼ平らな面を掘り込んで設置している。埋土は周辺の土より暗い暗茶褐色で、熱破砕した礫の小片や炭化物が含まれる。ほとんどが直径3~12cmの赤化し熱破砕した角礫で構成されているが、赤化していないものもある。なお、この集石の上に重なるようにして、白色砂岩の礫が自然に割れたような状態で散在していた。関連については不明である。

B-2地区

11号集石 (G-11区) 1類

ほぼ平らな面に設置しているが、掘り込みもなく散在している。ただし、長方形に近い礫が2個並べてあるように見える部分もあった。直径5~15cmの赤化した角礫で構成されているが、熱破砕した小片は少ない。1は剥片である。

12号集石 (C-12区) 1類

傾斜面に設置されており、北側に礫が集中し南側は散在した状態である。傾斜に沿って流れたような印象を受ける。直径5~15cmの赤化した角礫で構成されている。また、固化していないが、西側に赤変した砂岩礫が多数散在していた。なお、本集石は周囲の遺物出土状況から、苦浜式土器の時期に伴うものであると考えられる。

13号集石 (D-14区) 1類

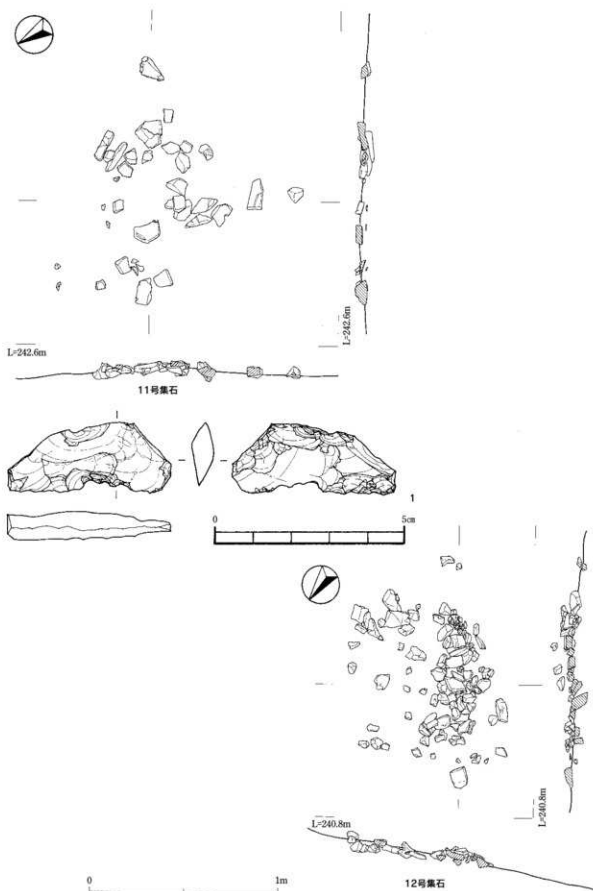
傾斜面に設置されており、本遺跡では比較的規模の小さいものである。直径5~12cmの赤化した角礫で構成されている。

14号集石 (E-12区) 1類

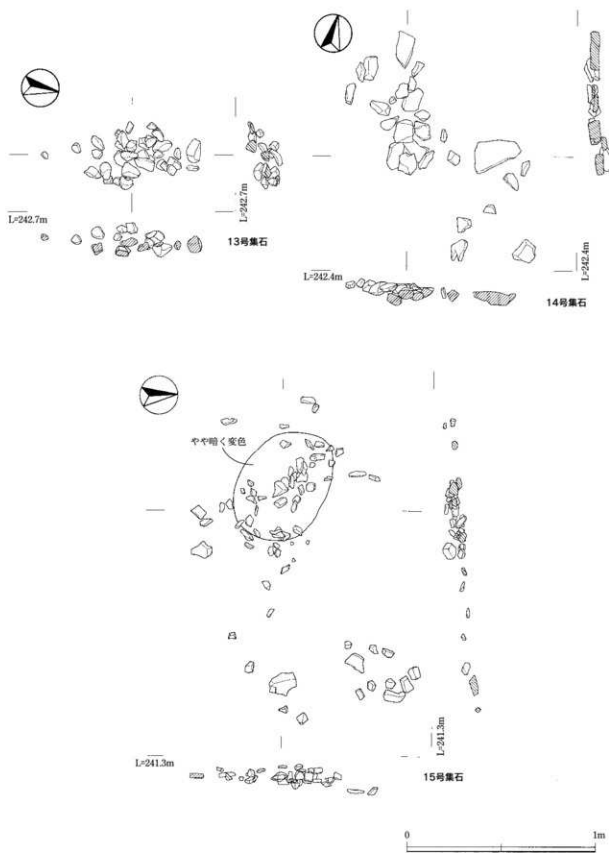
ゆるやかな傾斜面に設置されており、やや散在した状態だが、北西側に礫が集中している。埋土にはまばらに炭化物が含まれる。直径5~25cmの赤化した角礫で構成されているが、比較的大きな礫が目立つ。

15号集石 (E-11区) 1類

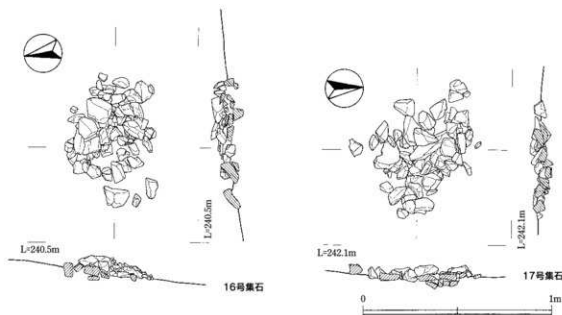
ゆるやかな傾斜面に設置されている。かなり散在した状態だが、北東側の礫が集中している所は土が周囲よりやや暗い赤褐色に変色し、熱破砕片が多くあるため、こちらが本体と考えられる。直径5~13cmの赤化した角礫で構成されているが、固化できない小片も多く含まれていた。



第13図 集石 (8)



第14図 集石 (9)



第15図 集石 (10)

16号集石 (D-12区) 2類

やや傾斜した面に設置している。直径5～15cmの赤化した角礫で構成されており、熱破砕したものも見られる。

17号集石 (G-11区) 2類

ほぼ平らな面に設置している。埋土には炭化物が含まれる。直径5～20cmの赤化した円礫や角礫で構成されているが、熱破砕したものは少ない。炭化物は¹⁴C年代測定の結果、8770±70年BP (補正¹⁴C年代) ということが判明している。

18号集石 (E-13区) 2類

県道の表土直下のⅢ層上面で検出された。県道建設によって上部の礫10点ほどは削り取られている。ほぼ平らな面に設置しているが、掘り込みは見られない。直径5～20cmのもろく赤化した円礫や角礫で構成されているが、熱破砕したものは少ない。

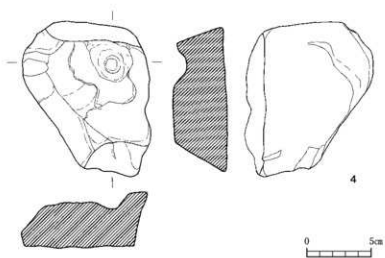
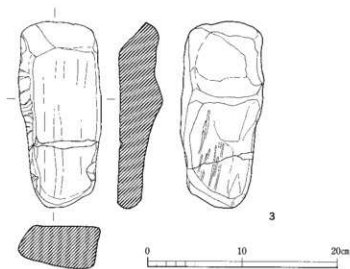
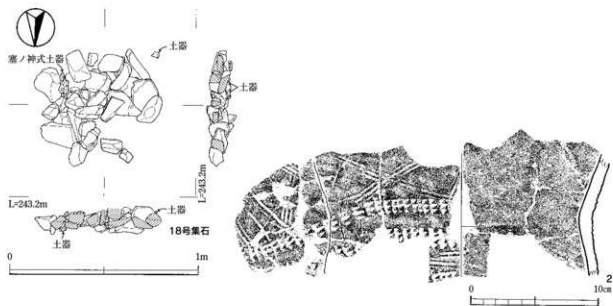
2は塞ノ神B式土器である。この集石の中に口縁部を下に直立した形で出土した。外面はナデに沈線および貝殻口縁押し引きがあり、内面はナデによって整形されている。また3は砥石で、4は凹石である。いずれも砂岩製で片面を利用している。

19号集石 (C-12区) 3類

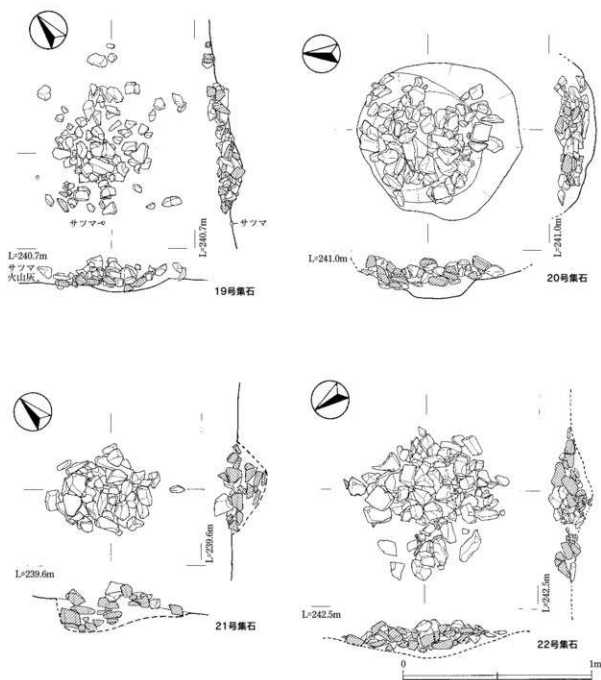
ゆるやかな傾斜面を浅く掘り込んで設置している。5号集石とその周辺の散在する礫を取り上げた後、土を一剥ぎしたらこの集石が検出された。直径5～15cmの赤化した角礫で構成されており、熱破砕したものも見られる。埋土には炭化物が含まれ、周囲には薩摩火山灰も認められる。炭化物は¹⁴C年代測定の結果、8720±80年BP (補正¹⁴C年代) ということが判明している。また、暦年代交点はBC7910の値を示している。

20号集石 (C-13区) 3類

ほぼ平らな面を掘り込んで設置している。掘り込みは二段になっているが、礫は最深部に達していない。直径5～15cmの赤化した角礫で構成されているが、中心部に礫が無く、掘り込み内にほぼ収まっている状態であった。



第16図 集石 (11)



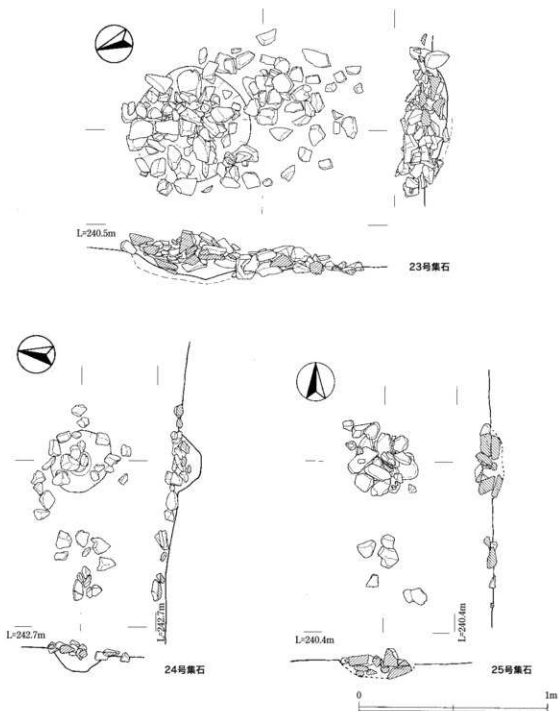
第17図 集石 (12)

21号集石 (D-12区) 3類

ゆるやかな傾斜面を掘り込んで設置している。直径5～20cmの赤化した角礫で構成されており、熱破砕したものも多い。

22号集石 (H-11区) 3類

ほぼ平らな面を浅く掘り込んで設置している。埋土は周辺の土より暗い灰褐色で、炭化物が含まれる。直径3～18cmのもろく赤化した円礫や角礫で構成されているが、熱破砕したものも多い。底辺部は、固化できないほど熱破砕した小礫を敷き詰めたようになっていた。前期の集石にも同じような例が見られるが、意図的なものかどうかは不明である。



第18図 集石 (13)

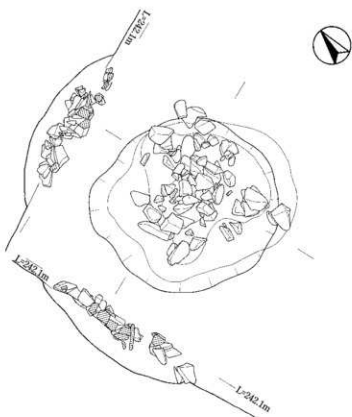
23号集石 (D-12区) 5類

ゆるやかな傾斜面を掘り込んで設置している。直径3～17cmの赤化したり破碎した礫が130～80cmの範囲に分布している。特に掘り込みのある北側に集中しており、こちら側が中心で、南側に掻き出された礫が散在している状況と思われる。周囲は茶褐色土であるが、掘り込みの部分の下は4～6cm厚で土が変色しており、暗茶褐色土で炭化物も含んでいた。炭化物は¹⁴C年代測定の結果、8790±80年BP (補正¹⁴C年代)

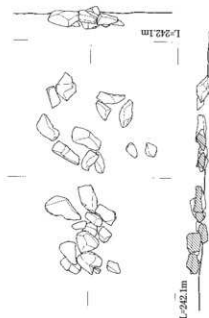
ということが判明している。また、暦年代交点はBC7910の値を示している。

24号集石 (C-14区) 5類

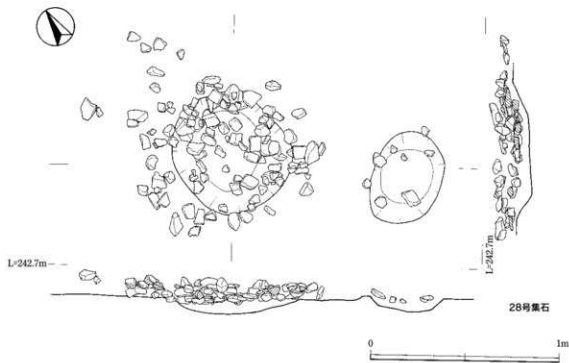
ゆるやかな傾斜面を掘り込んで設置している。直径4～10cmの赤化した角礫で構成されているが、掘り込みの底までは達していない。掘り込みのある側が中心で、少し離れた側に掻き出された礫が集められている状況と思われる。



26号集石

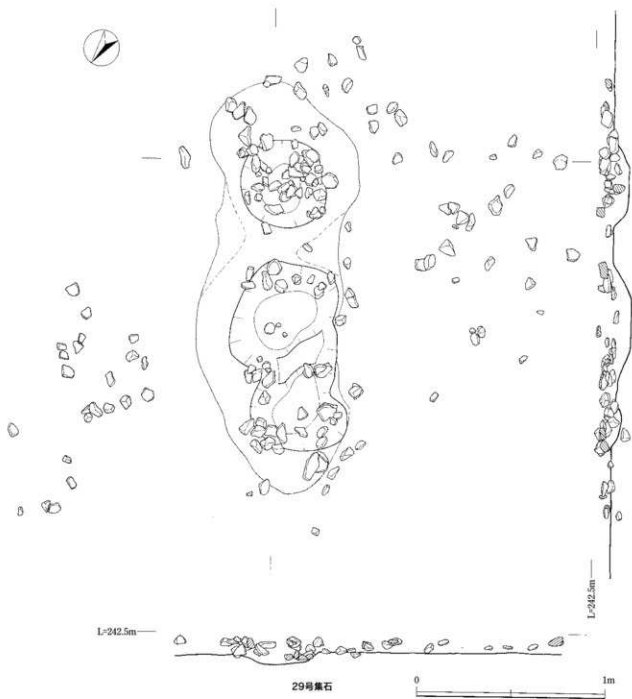


27号集石



28号集石

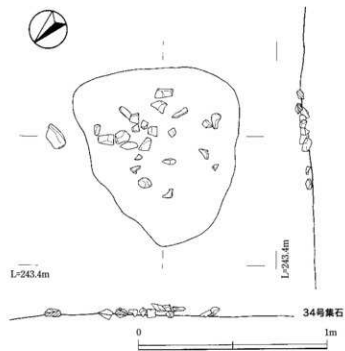
第19図 集石 (14)



第20図 集石 (15)



第21図 集石 (16)



第22図 集石 (17)

25号集石 (D-12区) 5類

ほぼ平らな面を掘り込んで設置しているが、掘り込みの境界は不明瞭である。直径5～15cmの赤化し熱破砕した角礫で構成されている。掘り込みのある側に礫が詰め込まれており、少し離れた側に少数の礫が散在している状況である。

26号集石 (F-11区) 3類 (27号とセットなら5類)

ほぼ平らな面を広く掘り込んで設置している。埋土は周辺の土より徐々に色調が暗くなり、中心部は暗灰褐色で、炭化物が多量に含まれる。直径2～18cmのもろく赤化した角礫で構成されている。すぐ近くに27号集石があり、それとセットの可能性がある。炭化物は¹⁴C年代測定の結果、8740±80年BP (補正¹⁴C年代) ということが判明している。また、暦年代交点はBC7760の値を示している。

27号集石 (F-11区) 1類 (26号とセットなら5類)

ほぼ平らな面に設置している。こぶし大よりやや大きめの直径5～20cmの赤化した角礫で構成されている。北東側はやや粗で南西側は詰まった感じである。掘り込みや炭化物は見られず、すぐ横に掘り込みのある26号集石があることから、それとセットの可能性はある。

28号集石 (C-14区) 6類

ほぼ平らな面を掘り込んで設置しているが、掘り込みは2か所で、40cmの間隔を置く。掘り込みは大小があり、大きい方により多く礫の集中が見られる。直径3～12cmの赤化した角礫で構成されている。

29号集石 (C-14区) 7類

ほぼ平らな面を掘り込んで設置しているが、掘り込みは3か所もあり、本遺跡中最大の集石である。掘り込みの間隔は近接し、炭化物集中範囲内に全体が収まる上に検出面も同レベルと見られるため、同時に形成された可能性が高い。直径3～15cmの赤化した角礫で構成されているが、掘り込みの周囲にも散在している状態である。また、土器片も出土したが、小片で類を特定することはできなかった。

C-1地区

30号集石 (J-10区) 1類

ほぼ平らな面に設置しているが、礫数10個の小規模な集石である。直径3～20cmの赤化した円礫で構成されている。検出はIV層上層だが、縄文早期 (III層) の遺物しか見られないので、縄文早期とした。

31号集石 (N-9・10区) 1類

ほぼ平らな面に設置している。おおむね直径3～10cmのもろく赤化した角礫で構成されており、炭化物が付着しているものもある。やや拡散した状態である。

32号集石 (Q-10区) 1類

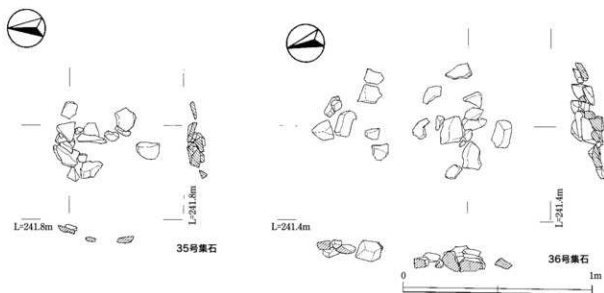
ほぼ平らな面に設置している。おおむね直径3～10cmのもろく赤化した角礫で構成されている。かなり拡散した状態であるが、北側に礫の集中が見られる。

33号集石 (L-9区) 1類

ほぼ平らな面に設置している。おおむね直径3～15cmのもろく赤化し熱破砕した角礫で構成されている。やや拡散した状態である。中心部の礫は他よりもレベルが低く、掘り込み内のものであることが予想されたが、精査しても確認できなかった。なお、本集石は周辺出土の土器より、塞ノ神式土器の時期と考えられる。

34号集石 (P-10区) 1類

ほぼ平らな面に設置している。おおむね直径3～12cmのもろく赤化し熱破砕した角礫で構成されている。やや拡散した状態で、炭化物もまばらに分布している。なお、P-10区には破砕礫が10個程度集中している集石の残欠もあったが、位置の記録にとどめている。



第23図 集石 (18)

C-2地区

東西分水嶺から西に舌状に張り出した部分のほぼ中央部に、6基の集石が集中して検出された。規模は大小があり、セットの可能性が高いものもある。遺物の集中範囲も重なる。

35号集石 (O-14区) 1類

やや傾斜した面に設置しているが、礫数17個の小規模な集石である。直径3～13cmの赤化した角礫で構成されている。

36号集石 (O-14区) 1類

傾斜面に設置しているが、礫の集中が2つに分けられる。直径2～14cmの赤化した角礫で構成されている。

37号集石 (O-14区) 1類

本区域最大の集石で、傾斜面に設置している。地形に沿って散在しており、中心部がはっきりしない状態である。直径3～23cmの赤化し熱破砕した角礫で構成されている。

38号集石 (O-14区) 1類

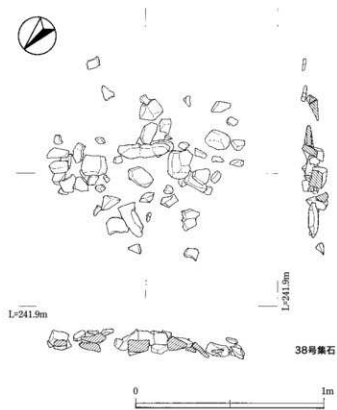
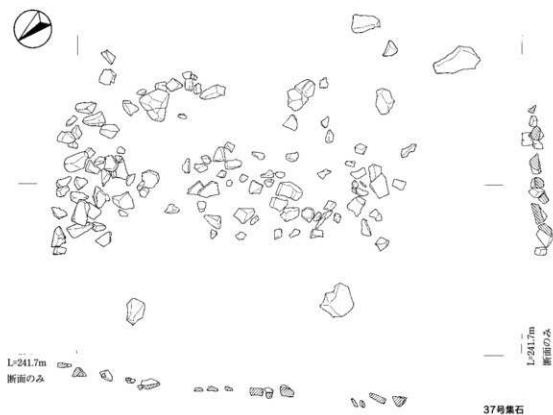
やや傾斜した面に設置している。直径3～25cmの赤化し熱破砕した角礫で構成されている。埋土に炭化物をまばらに含む。炭化材はマキ属で¹⁴C年代測定の結果は、9610±80年BP (補正¹⁴C年代)ということが判明している。また、暦年代交点はBC9135,8980,8930の値を示している。

39号集石 (N・O-14区) 1類

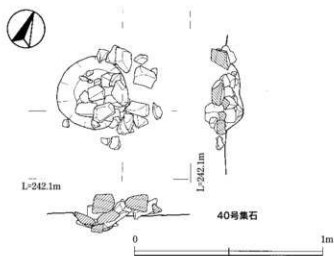
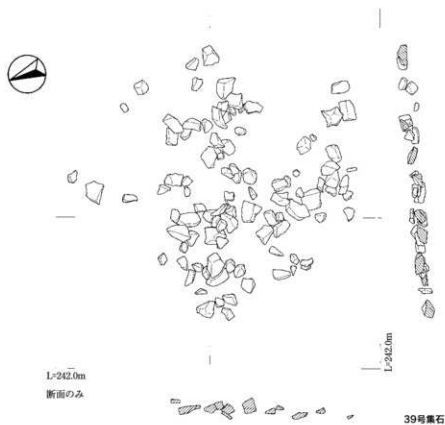
やや傾斜した面に設置している。直径4～12cmの赤化し熱破砕した円礫や角礫で構成されている。埋土に炭化物をこくまばらに含む。

40号集石 (N-14区) 3類

ほぼ平らな面を掘り込んで設置しているが、掘り込みのプランは礫を抜いた状態で、土色の変化ではつかめなかった。埋土に炭化物をこくまばらに含む。直径2～14cmの赤化し熱破砕した角礫で構成されている。掘り込みの中から一部の礫が掻き出された状態であり、上部の礫は周囲に流れたものと考えられる。



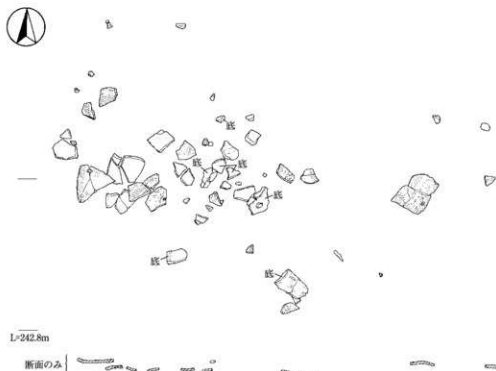
第24図 集石 (19)



第25図 集石 (20)

第9表 縄文時代早期の土坑観察表

挿図 番号	番号	検出区	床面レベル (m)	大 き さ (cm)	検出面から の深さ (cm)	備 考 (遺構内遺物)
1	1	N-10	243.944	87×64	9.3	埋土は炭化物を多く含む (小角礫1)



第26図 石坂式土器集中遺構

③ 土器集中遺構

B-1地区

石坂式土器集中遺構 (B・C-10区)

石坂式の円筒土器1個体分が235×186cmの範囲でまとまって出土した。標高は242.50～242.56mで、ほぼ同レベルである。同時に剥片も出土した。

5は、本遺跡群唯一の石坂式土器で、種子島では初出と思われる。器形は、胴部が直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。直線的な口縁部で、外面には貝殻腹縁刺突文が、口唇部には刻みが施されている。胴部には、綾杉状の貝殻条痕が施され、底部外面は横位と

なり、縦位の刻みが追加される。底部は平底である。また、補修孔が6か所あるが、へらで開けたような縦長のもの、回転による円いものが併用されている。破片や出土の状況から、補修作業中に破壊してしまい、そのまま遺棄されたものと思われる。

④ その他の遺構

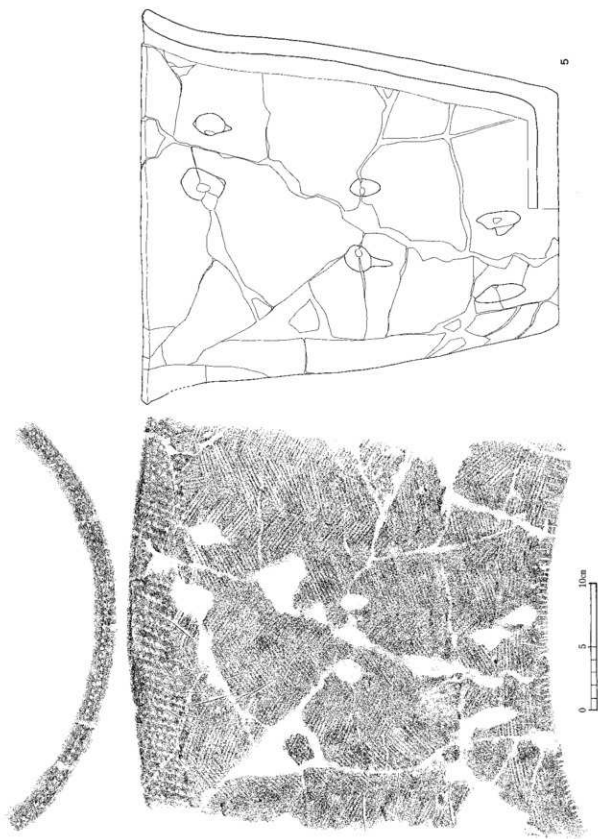
石器製作跡と思われる剥片やチップのブロックが確認されている。また、赤化礫分布域や集石の残欠もあった。位置や規模等については3～5図と28～37図を参照されたい。

第10表 縄文時代早期の遺構内土器観察表

探洞番号	地区	区	番号	器種	部位	紋様・調整				色		胎土					焼成	備考
						外面	内面	口唇部	外底	外面	内面	石英	長石	雲母	角閃	輝石		
16	B-2	E-13 18号 集石	2	深鉢	胴部	丁寧なナテ・貝殻押し引き(横)・条痕(斜めの交差)	丁寧なナテ			にぶい橙～灰褐色	灰褐～褐灰色	○	○	○		礫(白・灰・赤)・砂粒(白・黒・赤)・火山ガラス・貝殻片	良	
27	B-1	B-C-10 土器集中	5	深鉢	完形	貝殻刺突・貝殻条痕(綾杉)・縦刻み	ナテ	貝殻刺突(連点)	橙～灰褐色	橙～灰褐色	○	○	○	○	礫(白・灰・赤)・砂粒(白・黒・赤)	良	補修孔6	

第11表 縄文時代早期の遺構内石器観察表

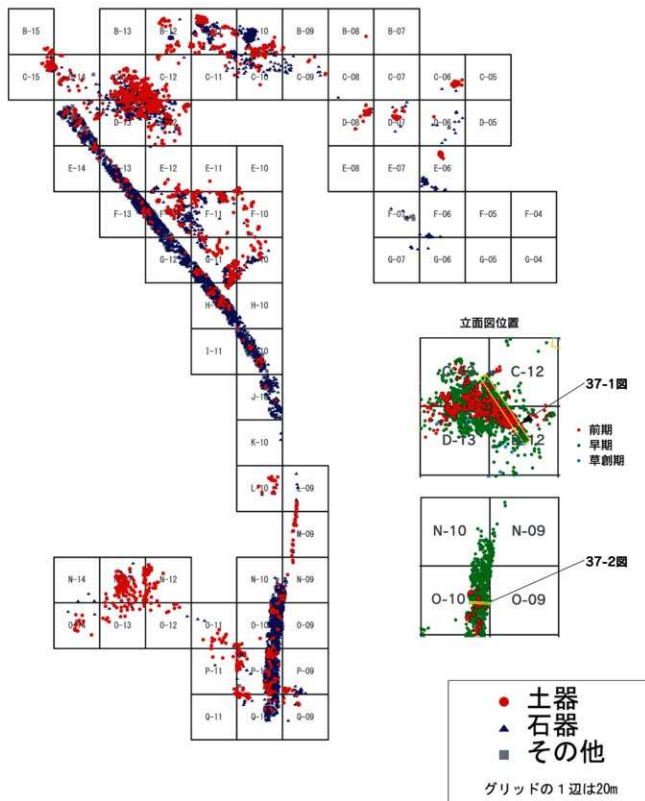
探洞	地区	出土区	番号	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
13	B-2	G-11 11号集石	1	剥片	頁岩	4.3	1.8	0.7	6	
			3	砥石	砂岩	19.3	8	4.5	842	作業面2、赤化している
16		E-13 18号集石	4	凹石	砂岩	12	10.7	4.5	609	作業面1、赤化している



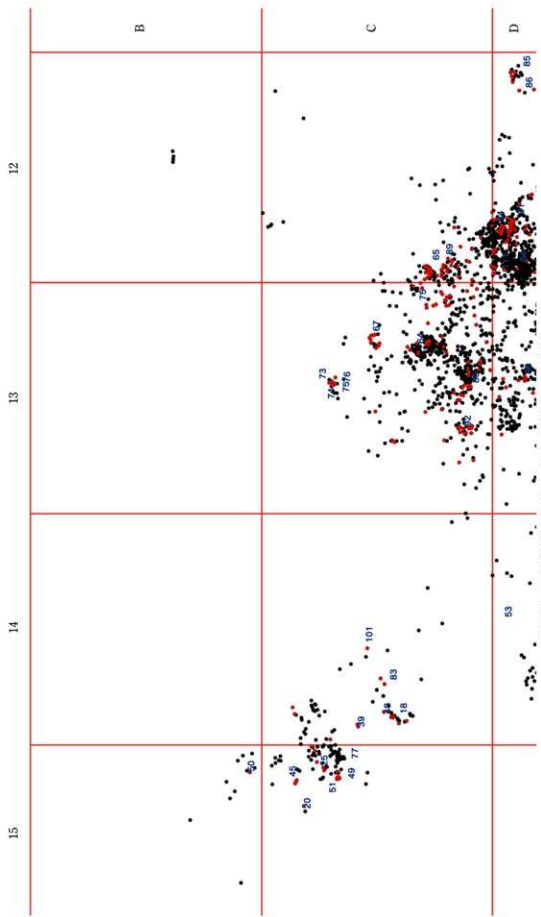
第12表 縄文時代早期の集石観察表

特記以外は熱破砕した砂岩礫にて構成 本(本体) 離(分離)

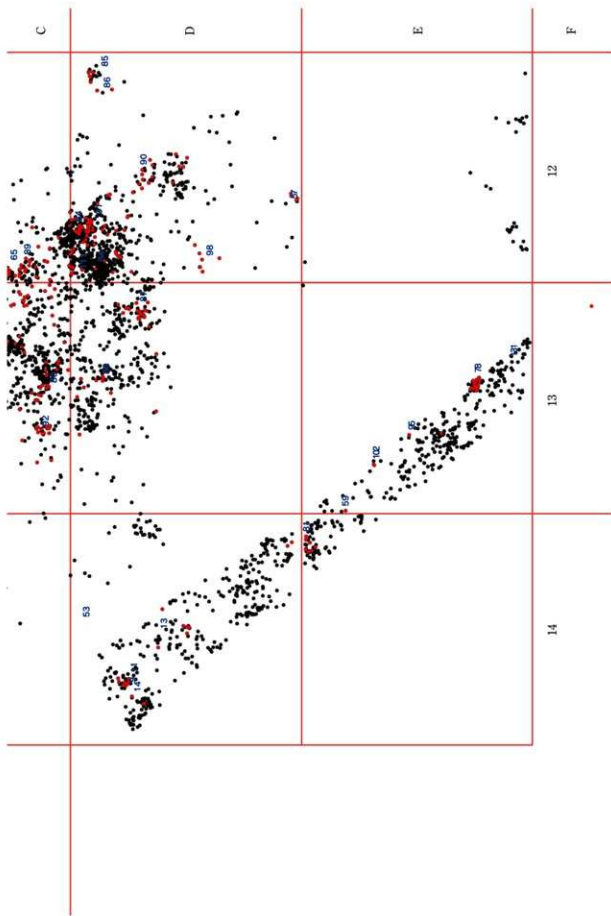
挿図 番号	番号	分類	地区	検出区	礫数	床面レベル (m)	大きさ (cm)	掘り込み (cm)			備考 (遺構内遺物)		
								有無	大きさ	深さ			
6	1	1	A	G-6	77	238.81~239.29	365 × 112	無			14C補6890 ± 60		
7	2	3		C-6	216	240.725	159 × 105	有	112 × 100	20			
8	3	5		F-7	本 離 計	44 9 53	240.87	本76 × 49	有	70 × 50	8	14C補8830 ± 70 掘り込みというより窪み	
9	4	5		F-6	本 離 計	21 33 54	239.93	本57 × 47	有	57 × 41	7	14C補6800 ± 60 炭化物は疎ら 浅い皿状の窪み	
10	5	1	B	C-10	40	242.17	80 × 79	無					
	6	1		B-12	41	242.52	62 × 60	無				7号と関連の場合4類	
	7	4		B-12	本 離 計	42 4 46	242.62	92 × 91	無			14C補8820 ± 80 熱による変色域有り	
11	8	3		C-10	198	242.31	本112 × 104 全246 × 126	有	89 × 70	9			
	9	3		B-C-9	12	242.16	62 × 58	有	58 × 57	11.5			
12	10	5		C-10	本 離 計	18 19 37	242.16	本63 × 56	有	58 × 44	14	上層に白色砂岩散在 底辺に熱破砕した小礫層。 炭化物を含む	
13	11	1	B	G-11	36	242.42	130 × 110	無					
	12	1		C-12	109	240.54	114 × 81	無					
	13	1		D-14	35	242.46	84 × 36	無				荻浜式に伴う	
14	14	1		E-12	27	242.22	138 × 70	無					
	15	1		E-11	本 離 計	58 16 74	241.12	107 × 80	無				熱による変色域有り
							177 × 116						
15	16	2		D-12	72	240.26	71 × 49	無					
16	17	2		G-11	56	241.86	79 × 67	無				14C補8770 ± 70	
	18	2		E-13	35	243.0	69 × 68	無				壺ノ埴式、凹石、砥石	
17	19	3		C-12	87	240.45	96 × 90	有	70 × 68	9		14C補8720 ± 80	
	20	3		C-13	90	240.745	88 × 82	有	88 × 82	15			
	21	3		D-12	47	239.25	74 × 49	有	71 × 49	17			
	22	3		H-11	100	242.21	78 × 70	有	90 × 80	12		底辺に熱破砕した小礫層	
	23	5		D-12	120	240.21	130 × 80	有	63 × 63	10		14C補8790 ± 80	
18	24	5		C-14	本 離 計	24 12 36	242.46	66 × 46	有	34 × 30	12		
							104 × 51						
	25	5		D-12	本 離 計	29 6 35	240.15	53 × 36	有	40 × 37	10		
19	26	3		F-11	81	241.88	110 × 100	有	100 × 90	15		27号と関連の場合5類 14C補8740 ± 80	
	27	1		F-11	25	241.92	110 × 68	無				26号と関連の場合5類	
	28	6		C-14	大 小 計	120 8 128	242.44 242.47	131 × 97 54 × 39 195 × 98	有 有	65 × 57 50 × 36	8 8		
20	29	7		C-14	本 離 計	113 60 173	北 242.35 中 242.3 南 242.32	本237 × 90	有 有 有	北51 × 45 中67 × 45 南49 × 46	5 10 8	3つの掘り込みの内 外に炭化物が集中する (土器片)	
							全345 × 200						
21	30	1	C	J-10	10	242.87	69 × 58	無				ほとんどが円礫	
	31	1		N-9-10	37	243.98	113 × 75	無				礫の一部に炭化物付着	
	32	1		Q-10	18	243.75	137 × 64	無				熱を受けた礫なし	
	33	1		L-9	59	243.94	168 × 96	無				壺ノ埴式に伴う	
22	34	1		P-10	24	243.11	102 × 94	無				中央に疎らな炭化物	
23	35	1	C	O-14	17	241.68	56 × 48	無					
	36	1		O-14	21	241.11	105 × 61	無					
24	37	1		O-14	112	241.43-63	248 × 64	無				14C補8070 ± 70	
	38	1		O-14	52	241.63	120 × 104	無				マキ属14C補9610 ± 80	
	39	1		N-O-14	97	241.71-86	157 × 145	無				炭化物は疎ら	
25	40	3		N-14	31	241.82	57 × 51	有	37 × 37	9		炭化物は疎ら	



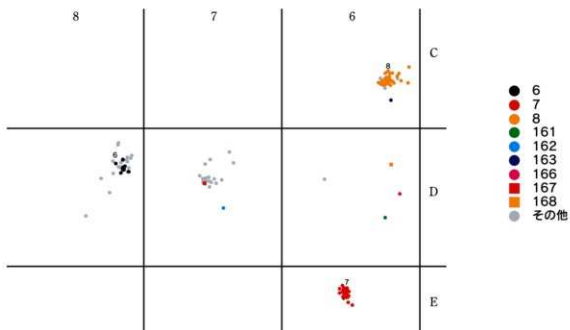
第28図 縄文時代早期（Ⅲ・Ⅳ層）遺物出土状況全体図



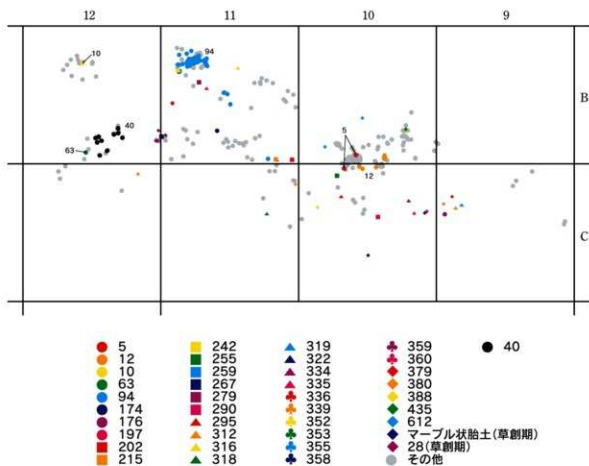
新29図 縄文時代早期 (Ⅲ・Ⅳ層) 遺物出土状況図 (1) -1



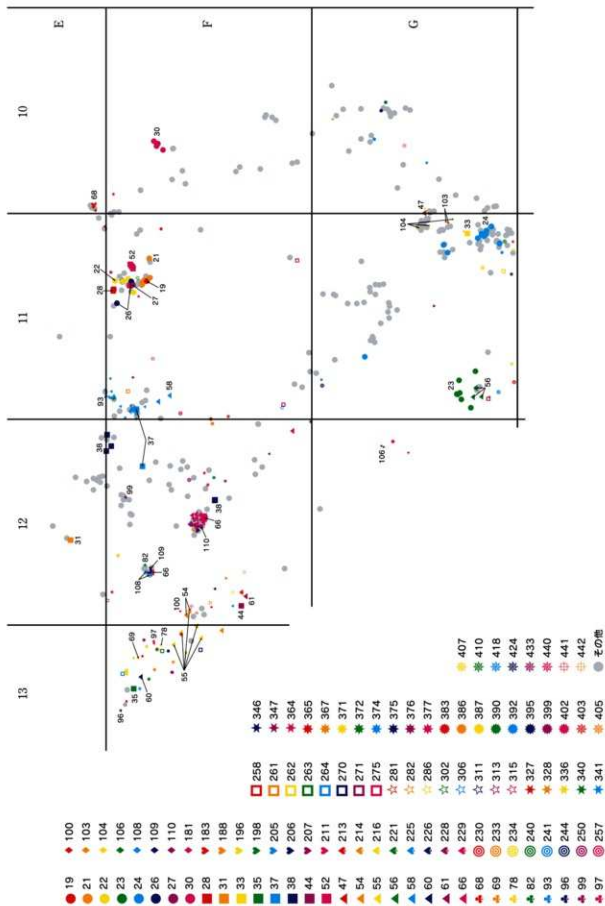
第29図 縄文時代早期（Ⅲ・Ⅳ層）遺物出土状況図（Ⅰ）-2



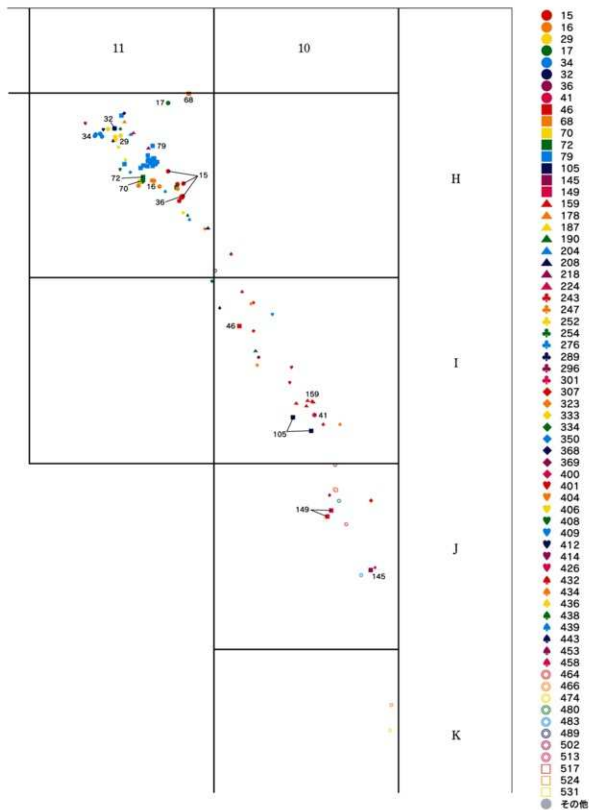
第30図 縄文時代早期（Ⅲ層）遺物出土状況図（2）



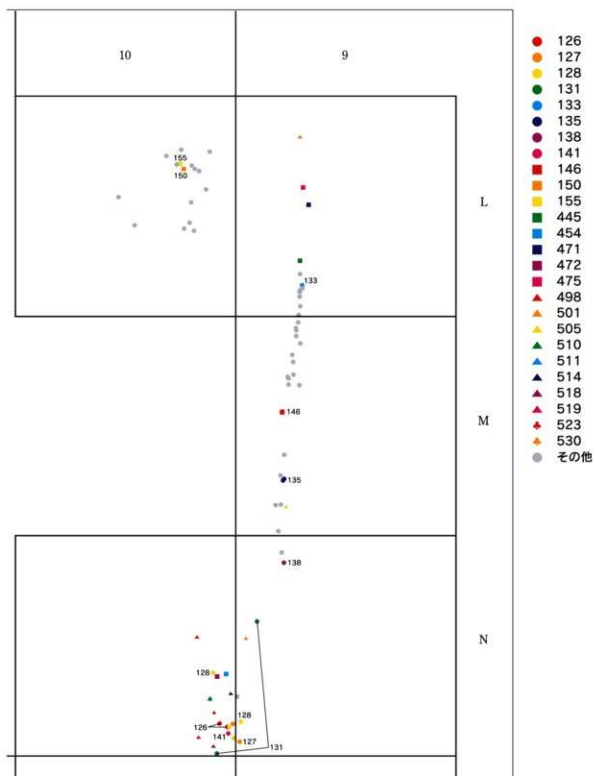
第31図 縄文時代早期（Ⅲ層）遺物出土状況図（3）



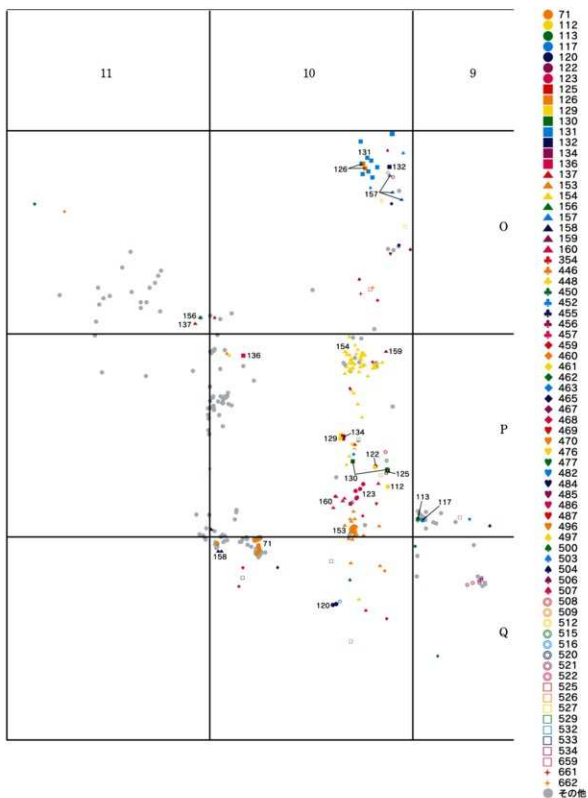
新32区 縄文時代早期(Ⅲ層) 遺物出土状況図(4)



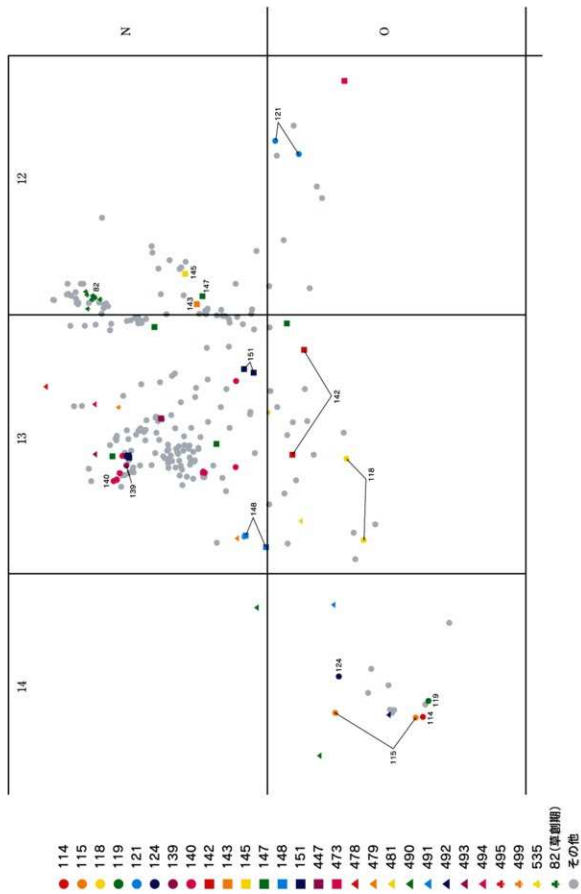
第33図 縄文時代早期（Ⅲ層）遺物出土状況図（5）



第34図 縄文時代早期（Ⅲ層）遺物出土状況図（6）

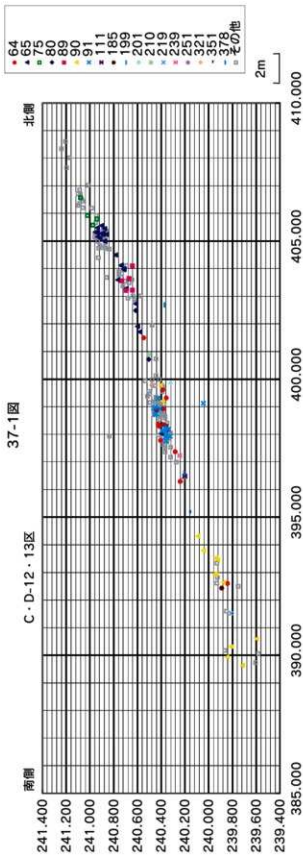


第35図 縄文時代早期（Ⅲ層）遺物出土状況図（7）

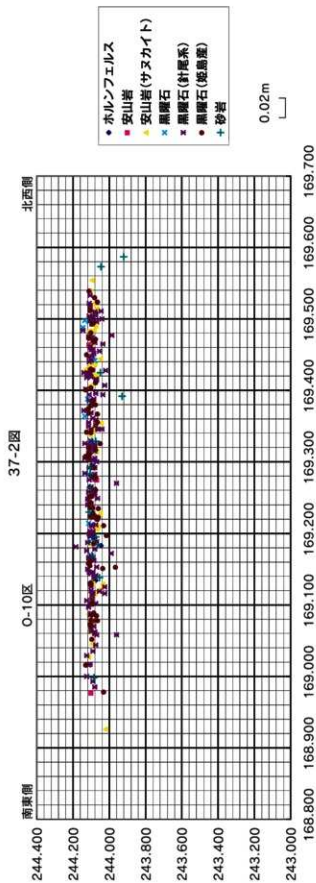


新36図 縄文時代早期(Ⅲ層)遺物出土状況図(8)

37-1図



37-2図



第37図 遺物分布立面図

(1) 遺物

① 土器

(はじめに)

Ⅲ層出土の土器について、まず分類指標を示す。次にⅣ層出土の石器と同様の観点から、A、B、Cの3地区に区分し、おのおのの出土土器について説明する。

(分類)

土器分類は、「三角山遺跡群(2)」(以下「報告1」とする。)に基づいているが、新たに認められた類もあるので整理した。

1類 円筒形を呈し、口縁端部に規則的な刻みを施す。その下に波状の貝殻条痕紋を施すものである。岩本式土器に比定される。

2類 前平式土器に該当する。「報告1」では1類とした。

3類 石版式土器に該当する。遺構として取り上げている(第27図)。

4類 器形は、口縁部が外反する。口縁部や胴部に刺突をめぐらせ、部分的にフジツボ状の瘤状突起が付着する。紋様は、沈線紋・刺突紋を組み合わせた多様な紋様パターンがみられる。

妙見・天道ヶ尾式土器をはじめとする平格式の前段階について一括している。「報告1」では5類とした。

5類 平格式土器に該当する。

器形は、口縁部が外反する。口縁部外面に粘土紐を貼付するなどして肥厚させ、紋様帯をつくりだしている。紋様は、口縁部に沈線紋を羽状に施し、胴部には結節縄紋が施されている。「報告1」では6類とした。

6類 摺糸文系の塞ノ神式土器(塞ノ神A式)に該当する。器形は口縁部がラッパ状に外反し、短筒状の胴部を呈する。底部は比較的薄手で若干上げ底状を呈している。文様は網目摺糸文を、間隔をおいて縦位に施すものと、幾何学的に摺糸紋を施し、その上と下を沈線で区画する2つのタイプがみられる。「報告1」では7類とした。

7類 貝殻条系の塞ノ神式土器(塞ノ神B式)に該当する。器形は口縁部が外反し胴部内面に稜線を残すものと直行し胴部がわずかにふくらむものがある。文様は貝殻腹縁による刺突連点紋、貝殻腹縁またはヘラ描きによる菱形格子紋を口縁部および胴部に施すものなどがある。なお、形態的な特徴を考慮して無紋の塞ノ神式土器についても7類としている。「報告1」では8類とした。

8類 苦浜式土器に該当する。器形は平底で、口縁部・頸部などについてはバリエーションがみられる。

口縁部は外反するものと内湾気味のものがある。頸部はゆるくしまるものと直線のなものがみられる。紋様は口縁部にヘラまたは貝殻腹縁による刻みを施し、胴部には貝殻による直線または波状の条線紋を施す。縦位あるいは横位に短突帯や瘤状突起を持つ。「報告1」では9類とした。

9類 器形は8類(苦浜式土器)に類似し、口唇部にはヘラまたは貝殻腹縁による刻みを施し、胴部には頸部の痕跡と考えられるゆるいしまりがわずかにみられる。紋様は胴部(口縁部下施紋帯)に棒状工具による鋸歯状紋を施す。「報告1」では10類とした。

10類 既存の土器型式では轟1式土器または右京西タイプとされるものに該当する。「報告1」では12類とした。

その他 1類から10類までには入らないものを一括した。

(A地区)

A地区は、表土を除去するとすぐにⅢ層となる。

A地区からは1類と6類が出土しているが、量的には少量である。1類はD-8、E-6区と離れて分布しているが、完形に近い状態でまとまって出土している。6類はC-6区から出土し、これも完形に復元できた。

1類(第38図6、7)

6は口縁から胴部で直線的に開く。器面はナデ調整で、口縁外部に波状の貝殻条痕、端部は規則的に刻みを施す。7は胴部から底部でわずかに開きながら立ち上がる。丁寧なナデ調整である。

6類(第39図8)

8は口縁部が直線的に大きく開き、胴部は直立するが、中央部でやや膨らみをもつ。口唇部に6回程度連続する刻みが、間隔をあけて巡らされる。口縁端部には連続的な刻み、その下に刺突連点紋、2条の沈線紋、7条の沈線で鋸歯紋を描き、更に刺突連点紋を巡らす。胴部との境には沈線が巡る。網目摺糸紋が縦方向に施されるが、その幅が広いものと狭いものがある。胴部中央付近は刺突連点紋、1本の沈線、鋸歯紋が施されている。

(B地区)

B地区からは1類、4～10類と多種類の出土が認められる。

分布状況は、1類はB-10、12区、D-14区、4類はC-10、14区、G・H-11区、5類はC-15区、E-12区、F-10・11区、G・H-11区、6類はB-12区、C-13～15区、F-11～13区、G-10区、H-11区、7類はB・C-15区、D-14区、E-13区、F-11～13区、G-11区、I-10区、8類はC-12～15区、D-12、14区、E-10～13区、F-10、12・13区、G-10～12区、H-11区、9類はC-12・13区、D-12・13区、10類はB-11区、C-13・14区、D-12・13区、E-13区、F-11～13区、G-10・11区に出土している。ほとんどの種類がF-11～13区に出土している。

1類 (第40図9～14)

9～11は口縁部でわずかに開きながら立ち上がり、口唇は平坦である。口縁に、横方向の波状条痕を巡らし、それに直交する、縦方向の波状条痕を施す。11には穿孔がみられる。

12～14は胴部～底部で、わずかに開きながら立ち上がる。無紋でナデ調整を施すが、ケズリや条痕がみられるものがある。

4類 (第41図15～18)

15～17は外反する口縁部で、横方向の刻目突帯を巡らすものである。15、16は、地は無紋であるが、17は斜方向の沈線の間に波状の沈線を巡らしている。

18も外反する口縁部であるが、刻目突帯はなく、無紋で、胴部に縄紋を巡らすものである。

5類 (第41図19～25、第42図26～34)

19～23は口縁部を肥厚させるもので、19～21は肥厚部分に沈線と刺突によって施されるものである。22、23は肥厚部分に縄紋を施す。22は結節縄紋である。

24は小型品で、完形に復元できた。口縁は外反し、口縁端部を断面三角形に仕上げ、斜方向の沈線紋を折帯紋風に施す。胴部はやや膨らみ、沈線と刺突紋を組み合わせ、施紋する。底部はやや上げ底となる。

25は壺形土器で、頸部に棒状工具を刺突した突帯を巡らす。胴部は無紋である。

26～32は胴部で、縄紋及び結節縄紋を施すものである。26～28は胴部上半で口縁との境で刻目突帯を巡らす。29～32はやや丸みをもちながら立ち上がる。

33、34は底部で、33は縄紋が施され、34は無紋である。

6類 (第42図35～39、第43図40～47)

35～38は口縁で微隆帯に刻みを施すものである。口唇に刻みを施すものがある。37は波状口縁である。

38は内側に屈曲し立ち上がる。

39は無紋の口縁部である。

40は完形品で、口縁部は大きく開き、胴部はやや丸みを持ちながらまっすぐ立ち上がり、底部はやや上げ底気味である。波状口縁で、口唇には羽状又は斜方向に刻み、あるいは沈線紋を施し規則的な施紋である。口縁部は無紋。胴部との境に2条の沈線があるが、つながっていない。胴部には3本の沈線帯を3条巡らす。途中、外側の沈線を繋ぎ、曲線を描いている。また、1cm強幅の網目燃糸紋を縦方向に施している。

41、42は口縁部で口唇に刻みを施す。41は縦方向の網目燃糸紋を施している。

43も口縁部で大きく開き、沈線帯を波状及び横方向に施している。

44は胴部で、沈線帯を斜方向に施している。

45～47は底部で、開き気味の胴部となる。網目燃糸紋が施される。

7類 (第44図48～56、第45図57、59～61、第53図87)

48～50、53は口縁部でわずかに開く。端部に貝殻腹縁を押し引きする。50は沈線紋もみられる。53は胴上部にも押し引き紋がみられる。

51は口縁～胴部で、胴部は丸みを持ち膨らみながら立ち上がり、口縁との境で屈曲し、口縁はわずかに開く。口唇に貝殻刺突、口縁に貝殻押し引きと平行沈線、胴部に貝殻押し引きと平行沈線と斜方向の沈線を交差させる。

52は胴部で、爪状の刺突で押し引き風に表現している。

54は胴下部でやや丸みを持ち、無紋である。55、56は底部でやや上げ底となり、胴部が開き気味に立ち上がる。56は胴下部まで貝殻押し引きが施される。

57は口縁部で、やや突った断面で、その外面に貝殻腹縁を巡らす。その下方に波状の条痕が施される。

59～61は胴部で、貝殻腹縁を巡らしている。

87は口縁部で、波状口縁である。口縁端部に貝殻腹縁を巡らし、条痕紋を垂直方向及び斜方向に組み合わせ幾何学的に表現している。

8類 (第46図64、第47図65、第48図66、67、第49図68～70、72～77、第50図78、79、第51図80、81、第52図82～86、第57図104)

平底で、胴部形態は数パターンあるが、波状口縁になるものと平口縁とがある。地紋は貝殻条痕で刻み目突帯もしくは微隆起線文をもつ。

64は平底で、胴部は丸みをもちながら立ち上がり、口縁は外反する。波状口縁である。口唇部に刻みを巡らし、その下方に1条の刻目突帯を巡らす。波頂部下に縦方向に2条の刻目突帯を施す。胴部上半外面に押



第38図 縄文時代早期の土器（1）

し引き風の貝殻腹線文を波状に施す。また、補修孔がみられる。

65は平底で、胴部はわずかに丸みをもちながら立ち上がる。波状口縁となり、波頂部は4か所あり、その口唇に刻みが施される。さらに、その下に縦方向に2条の刻目突帯がつけられ、その下に横方向の短い刻目突帯がつけられる。地紋は貝殻条痕で、口縁付近は波状に、胴部は斜方向に交差させている。

66は口縁～胴部で、波状口縁である。胴部は丸みをもち、口縁は外反する。外面全面的に刻みをもつ微隆起線紋を巡らせている。地紋は貝殻条痕である。

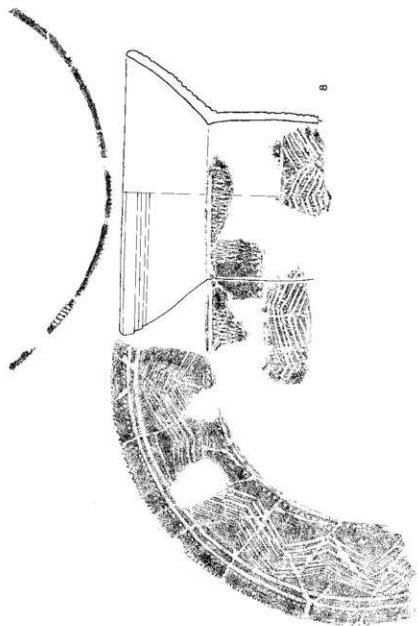
67は平底で胴部は丸みをもち、口縁は外反する。

波状口縁である。口縁に1条、突帯を巡らす。地紋は貝殻条痕であるが、ランダムである。口唇に沈線を、口唇外面に刻みを施している。

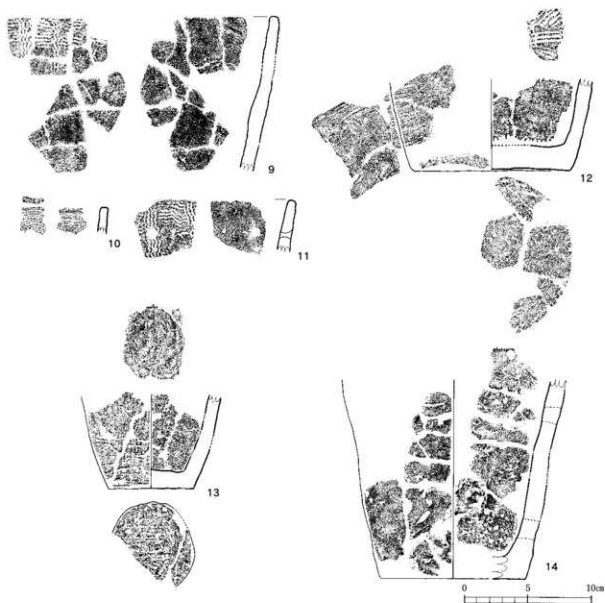
68は口縁～胴部で、波状口縁をなす。口縁端部を肥厚させ、胴部上半に貝殻腹線をジグザグに押し引きさせ施紋する。胴部下半は条痕であると思われる。70は胴部で、2条の貝殻腹線の押し引き紋が施される。72も胴部であるが、貝殻条痕が施されるものである。

69は胴部の小破片であるが、外面に2条の刻目突帯を施すものである。

73、74は波状の条痕を地紋とし、縦方向の刻目突



第39図 縄文時代早期の土器（2）



第40図 縄文時代早期の土器（3）

帯をつけるものである。73は口縁部で波状口縁となる。

75は胴部片、76、77は底部である。紋様はないが、胎土の共通性からこの部類にしている。

78は完形で、平底で緩やかに開く円筒形の器形である。口唇部には爪形の刻みを施し、4か所等間隔に短い横方向の突帯をつけ、その下に縦方向の刻み目突帯をつける。外面上半に貝殻条痕紋を施している。

79は胴部下半までが復元できた。平底で外面に貝殻上痕を施している。

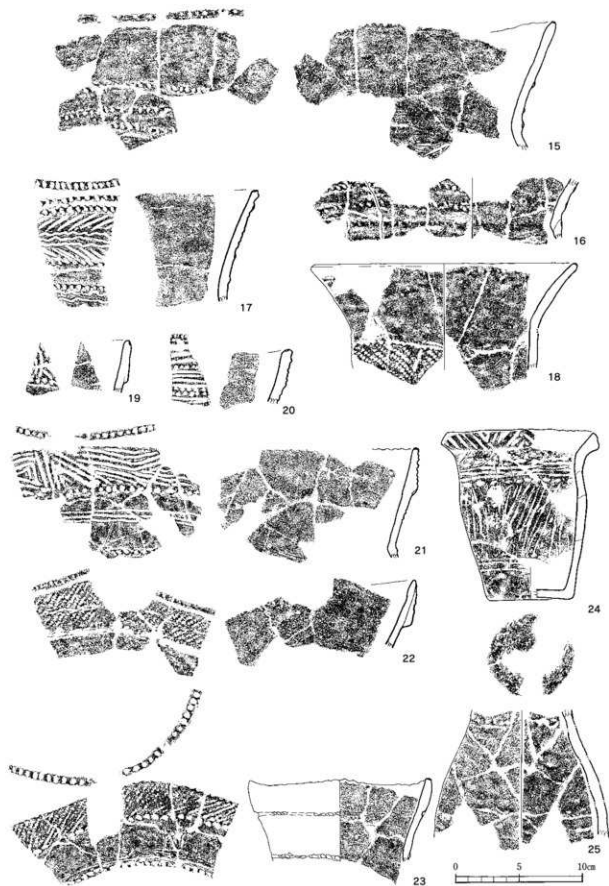
80も完形で、平底で緩やかに開く円筒形の器形で

ある。外面に横方向の貝殻条痕を施す。81も同様の器形であるが、口縁がやや波状をなし、条痕がランダムに施されている。

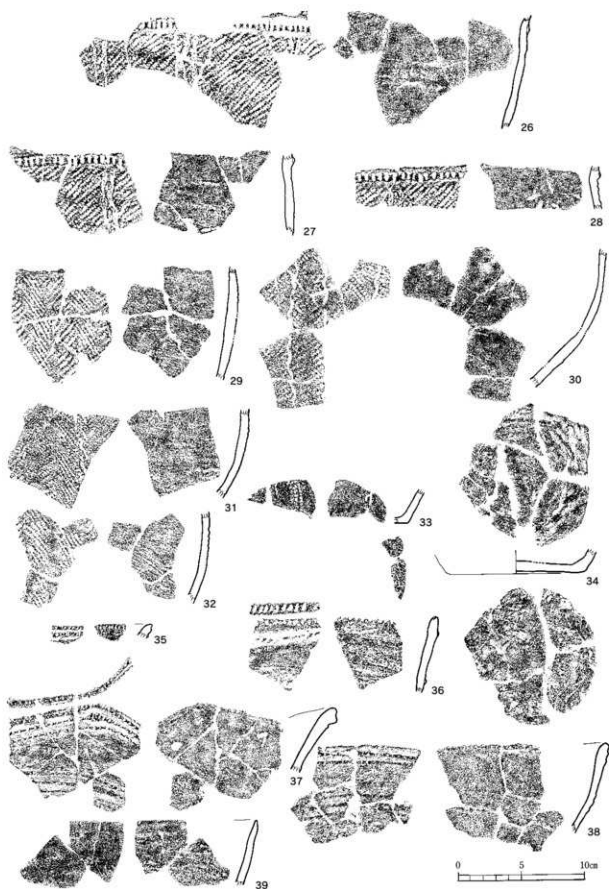
82、83は口縁部でわずかに外反し、口唇は平坦である。横方向の密接した貝殻条痕が施される。82には補修孔と思われる穿孔がある。

84～86は間隔のあいた貝殻条痕が施されるものである。85は底部～胴部の破片である。

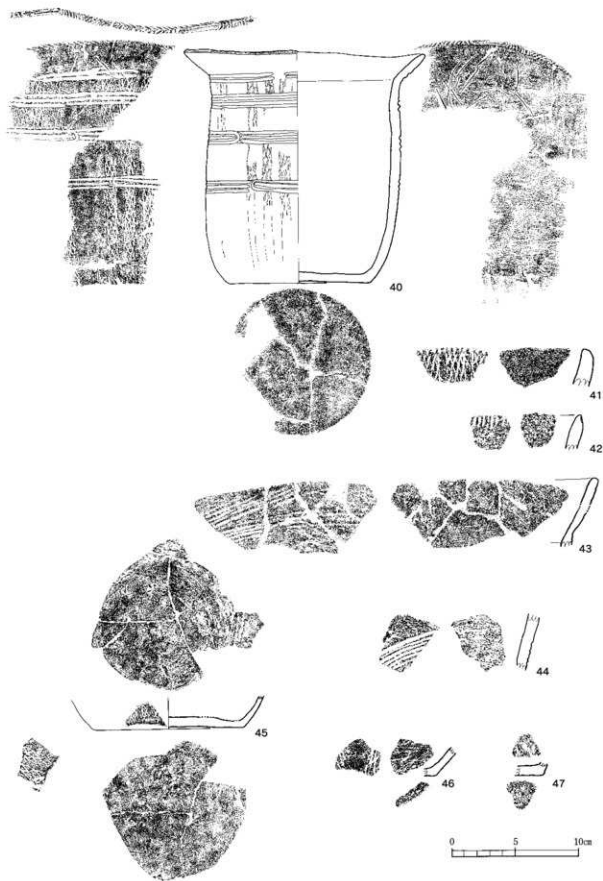
104は底部～胴部で開きながら立ち上がる。貝殻刺突紋が施されている。



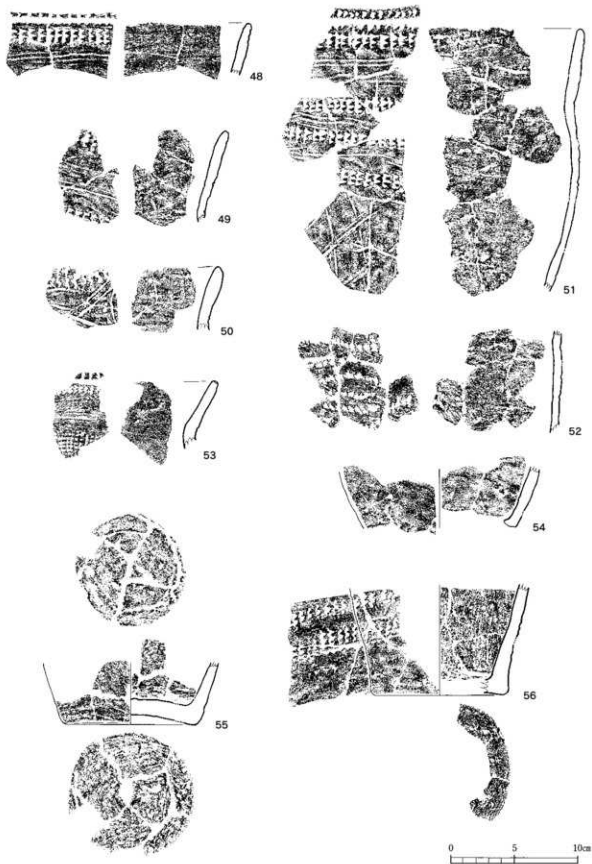
第41図 縄文時代早期の土器（4）



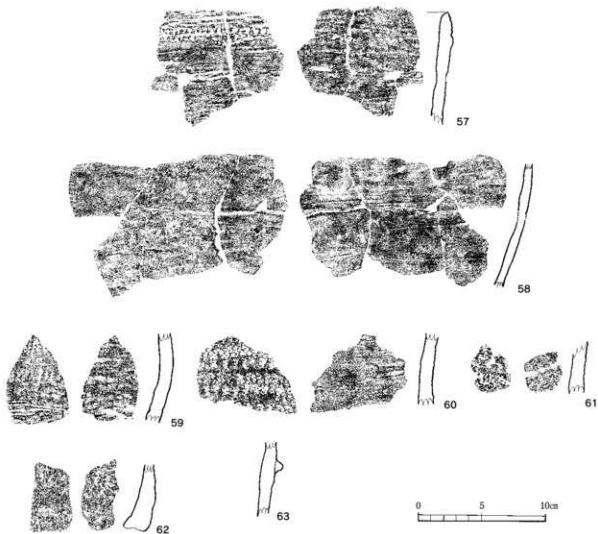
第42図 縄文時代早期の土器（5）



第43図 縄文時代早期の土器（6）



第44図 縄文時代早期の土器（7）



第45図 縄文時代早期の土器（8）

9類（第53図88, 89, 第54図90）

鋸歯状の沈線を施すもので、縦方向の刻目突帯をつけるものとそうでないものがある。

88は口縁で、波状口縁である。波頂部に縦方向の刻目突帯をつける。

90は口縁～胴部で、わずかに丸みをもちながら、立ち上がり、平口縁で口唇部に刻みを施す。89は胴部である。

10類（第54図91, 第55図92, 第56図93, 94, 第57図95～103, 107, 第58図108～110）

条痕紋を横方向ばかりでなく、斜方向、縦方向、波状に描くものである。器形は平底でわずかに開きながら立ち上がる深鉢と、接地面が狭いやや上げ底で、やや丸みをもちながら立ち上がる深鉢がある。また、微

隆帯を条痕風に描くものもある。

91, 92は完形に復元できた。91はわずかに外反する口縁で、口唇に刻みを施す。胴部はやや丸みをもち、平底となる。横方向の密接した条痕を地紋とし、斜方向の条痕をクロスさせている。92もわずかに外反し口唇は平坦で刻みが施される。胴部はやや丸みをもち平底となる。横方向の密接した条痕を地紋とするが、底部付近では縦方向気味でややランダムである。口縁付近に弧状、鋸歯状、縦方向の条痕を組み合わせている。

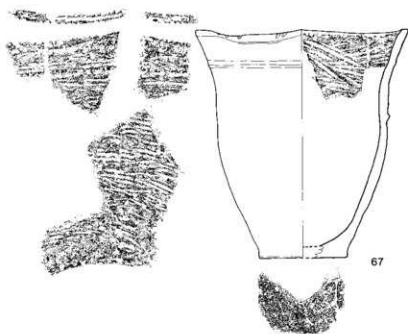
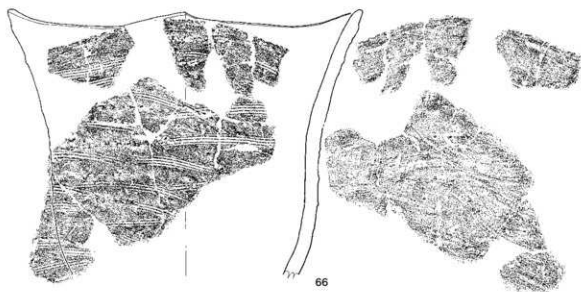
93は口縁～胴部が復元できた。波状口縁で、胴部は丸みをもち、口縁はわずかに外反する。平坦な口唇部に鋭角的な刻みが定期的に施される。波頂部は大きく窪ませる。口縁～胴部に貝殻条痕を平行と波状に縦



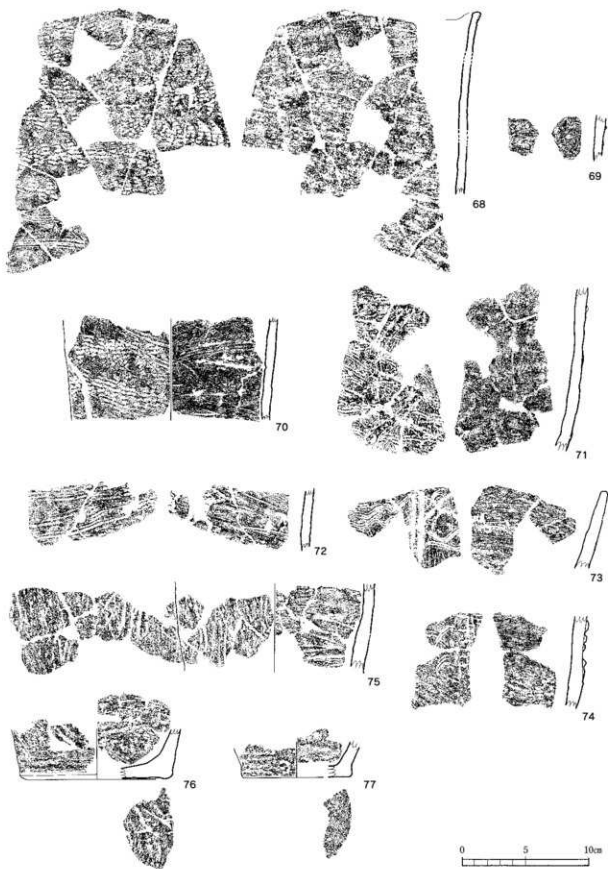
第46図 縄文時代早期の土器（9）



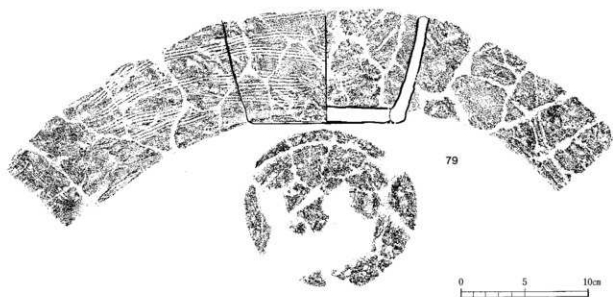
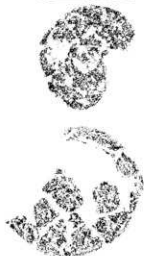
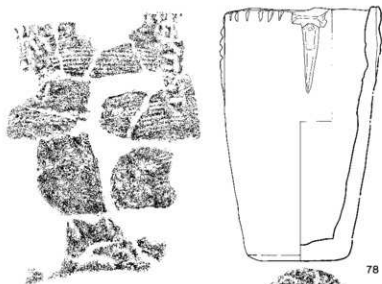
第47図 縄文時代早期の土器 (10)



第48図 縄文時代早期の土器（11）



第49図 縄文時代早期の土器 (12)



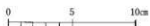
第50図 縄文時代早期の土器 (13)



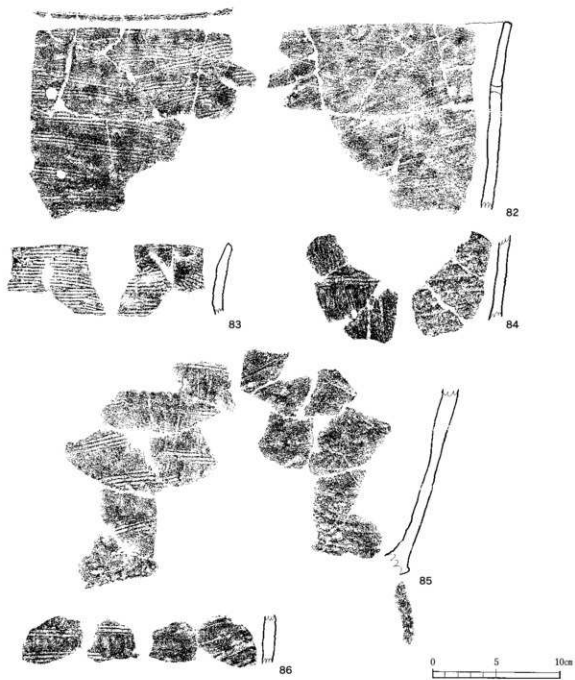
80



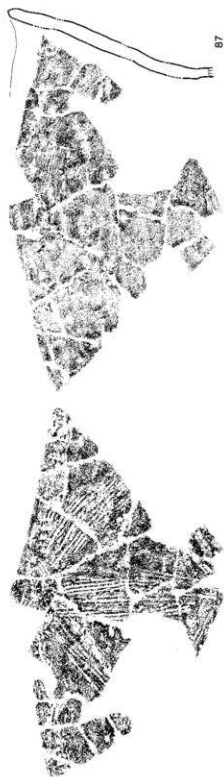
81



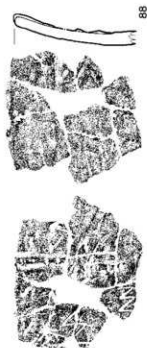
第51図 縄文時代早期の土器 (14)



第52図 縄文時代早期の土器 (15)



87



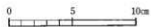
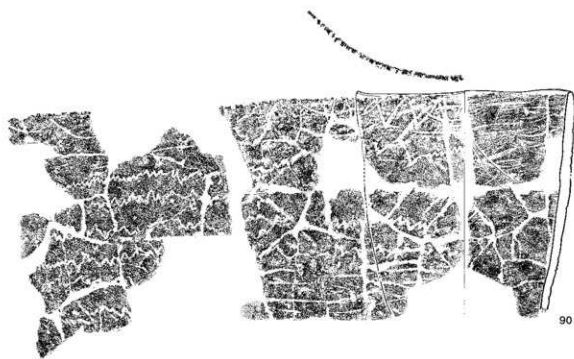
88



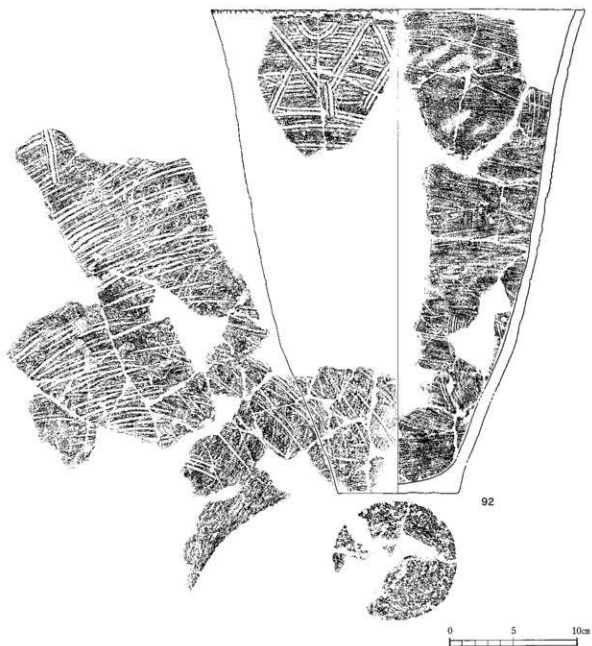
89



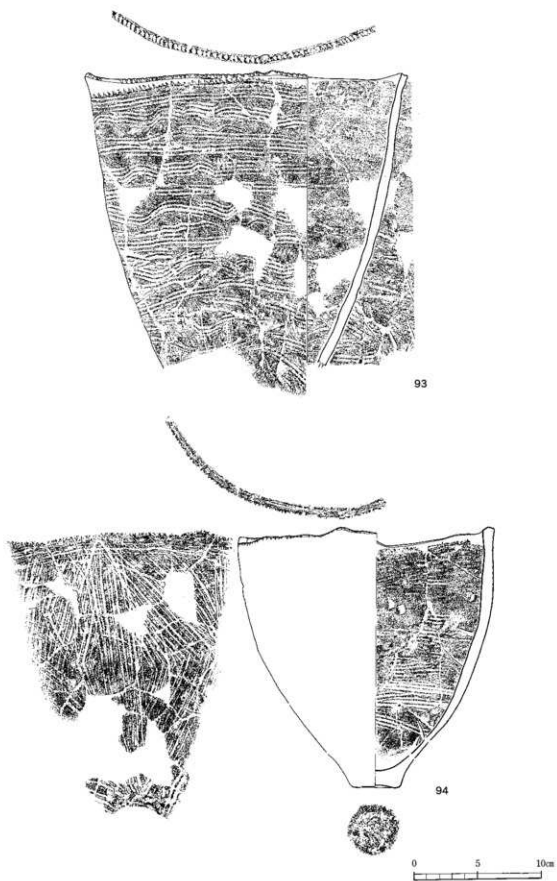
第53図 縄文時代早期の土器 (16)



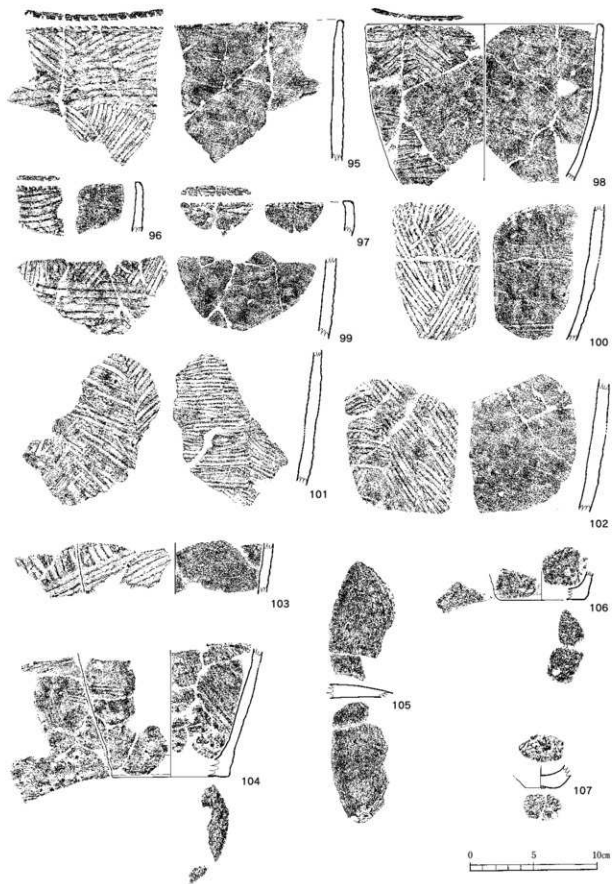
第54図 縄文時代早期の土器 (17)



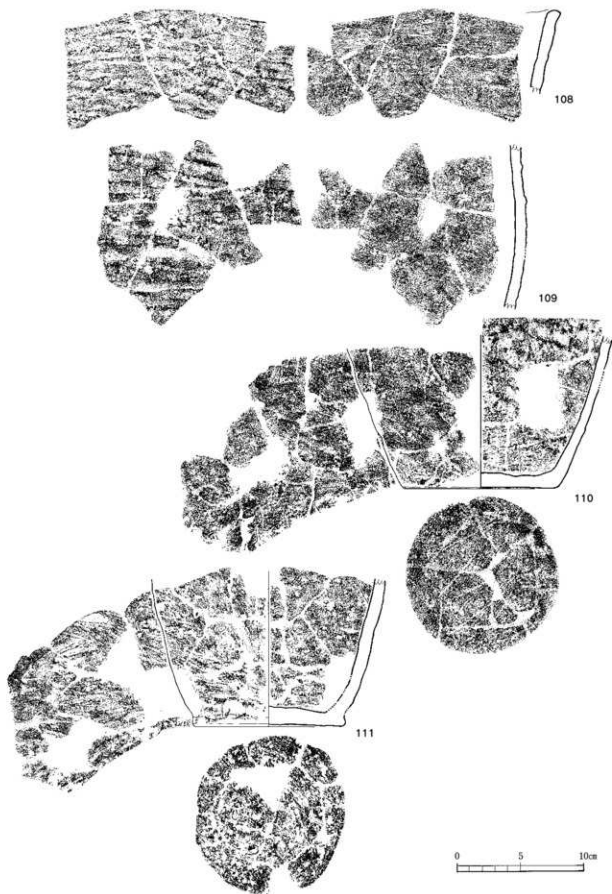
第55図 縄文時代早期の土器 (18)



第56図 縄文時代早期の土器 (19)



第57図 縄文時代早期の土器 (20)



第58図 縄文時代早期の土器 (21)

り返し施紋している。

94は完形に復元できた。波状口縁で、胴部は丸みをもち、口縁はほぼ直立する。底部はやや小さく、上げ底を呈する。口唇部は中央で稜をもち断面形は三角形である。細かい刻みが施される。口縁へ胴部は条痕で施紋され、口縁付近は横方向、胴部は縦方向と横方向を組み合わせている。107もこれに類似した底部である。

95～99, 108, 109は微隆起突帯を意識したような幅広で浅い条痕が施紋されるものである。95は直立口縁で、口唇外面に刻みが施される。胴部やや深く条痕が施される。96, 97はやや内傾する口縁で、口唇外面に刻みが施される。98は口縁が直立し、胴部は丸みをもつ。胴部にも微隆起突帯風の施紋である。口唇外面に刻みがある。99は胴部である。108は波状口縁を呈し、109はこの胴部、110が底部であると推定される。

100～103は胴部で95にみられたようなやや深い条痕が綾形状に施されている。

その他 (第45図58, 62, 63, 第57図105, 106, 第58図111)

58は無紋の胴部で、丸みをもちながら立ち上がる。62は底部付近で、わずかに丸みをもちながら立ち上がり、底部との接合面がみられる。内外とも無紋である。63は胴部で太く目の突帯が付される。

105, 106は底部である。どちらもナデ調整で、紋様はない。

111は底部で、指の跡がのこる粗いナデ調整である。底部は横方向にやや突出している。

(C地区)

C地区からは2類, 4～10類が出土している。

分布状況については、2類はN-9・10, O-10, 12～14, P-9・10, Q-10区, 4類はP-10区, 5類はL-9, M-9, N-9, O-10・11, P-10区, 6類はJ-10, L-10, M-9, N-10, 12・13, O-13, P-10, Q-10区, 7類はO-10区, 8類はP-11, Q-10区, 9類はP-10区, 10類はP-10区から出土した。5, 6類は広範囲に分布する。多くの種類がP-10区に集中している。

2類 (第59図112～125, 第60図126～128)

円筒または角筒状をなすものと思われる。116～118は口縁部である。112, 114～116は口唇部に刺突紋、口縁端部に横方向の貝殻腹縁刺突紋、その下に縦方向の条痕紋を施し、胴部には斜方向の条痕紋を施す。112, 115は波状口縁を呈し、角筒となると思われる。113は口縁端部に貝殻条痕紋を横方向、斜方向

に施す。内面の調整はケズリとナデがある。

117～122は胴部である。貝殻条痕を施すが、117は113に類似する。119は口縁端部付近で横方向の刺突紋が施される。

123～125, 128は底部である。124, 125は紋様が不明であるが、1類の可能性がある。いずれも円筒形をなすと思われる。

4類 (第61図129, 130)

129, 130は口縁部で外反する。端部を肥厚させ、刻みを施す。

5類 (第61図131～138)

131は口縁へ胴部で、胴部は丸みをもち、口縁は外反し、口縁端部で下方に下げる。口縁端部の外面には沈線で折帯紋を施す。口縁は無紋。口縁と胴部の境界に連点紋を施し、胴部の下縁は縄紋で縦方向の刻目突帯をつける。

132は外反する口縁(波状口縁)の端部を断面三角形にし、紋様をつける。口唇は棒状工具で刺突し、肥厚部は沈線で複合鋸歯紋を描く。胴部の紋様も刺突と沈線によるものである。

133は口縁端部で肥厚させる。沈線を複合させ、その間に連点紋を施している。

134は胴部上半で瘤状突起をつける。胴部に沈線と連点によって紋様をつける。

135も胴部上半で、胴部は丸みをもつ。口縁との境界に連点を巡らせ、その下に横方向の沈線を2条巡らせ、その下に縦方向の沈線を等間隔に描き、さらに連点、短い縦方向の沈線、やや長めの沈線(縦)と施す。136は口縁部で肥厚させ、波状口縁である。肥厚部には連点紋と沈線紋が組み合わされている。

137は胴部で、縄紋が施される。

138は小形の深鉢である。波状口縁で、外反する口縁は肥厚させる。胴部は丸みをもち、口縁との境で屈曲させる。肥厚口縁の下部に刺突紋が施され、口縁と胴部の境のやや下に刻目突帯を巡らす。

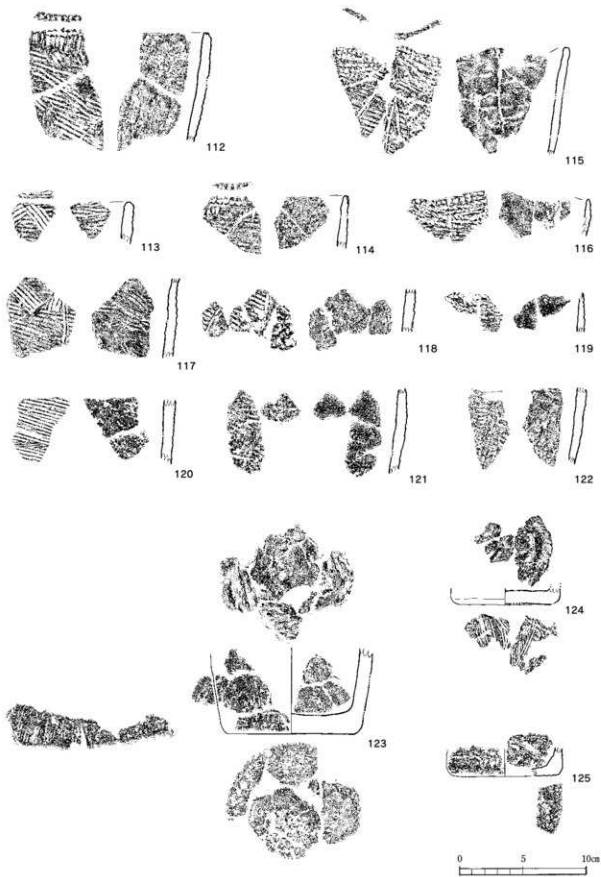
6類 (第61図139, 140, 第62図141～152, 第63図153)

140は口縁へ胴部である。胴部はほぼ直立し、口縁は大きく開く。口縁部は沈線を、横方向、斜方向、弧状に描き、口縁と胴部の境に沈線を巡らせ、胴部には縦方向の網目燃系紋が施される。胴部中央にも沈線が数条巡らす。139は口縁部であるが、140と同様の紋様である。

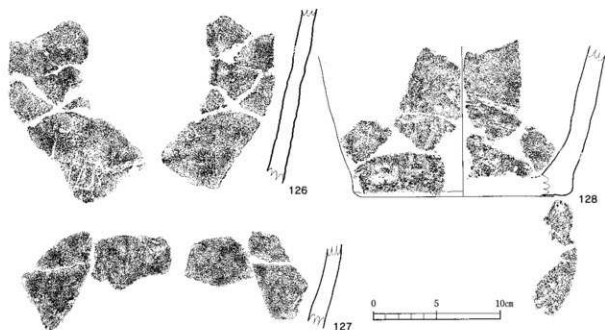
141は胴部との境で屈曲し、大きく開く口縁であるが、無紋である。

142は口縁部で、やや内湾気味のものである。端部に刻み、口縁部から縦方向の網目燃系紋を施す。

143～145, 150は胴部で、ほぼ直線的で網目燃系



第59図 縄文時代早期の土器 (22)



第60図 縄文時代早期の土器 (23)

紋と沈線紋が描かれる。

146～149も胴部であるが、丸みをもつもので、147、148は大きくまがるものである。これも、沈線と網目燃糸紋で紋様が構成される。

152は胴部下半で、丸みをもち、網目燃糸紋が縦方向に施される。

151は底部で、わずかに上げ底になる。

153は口縁～胴部で、口縁部が屈曲し、胴部は真っ直ぐ立ち上がる。口唇部は刻みが施される。屈曲した口縁部の上半には沈線が横方向に5条ほど巡り、その間に連点紋が施される。また、下半には網目燃糸紋が波状に巡り、沈線で区画される。胴部には網目燃糸紋を交差させ、沈線で区画される。中央付近には沈線が1本巡る。

7類 (第65図157)

157は外反する口縁で、口唇と、口縁端部に貝殻縁が刺突される。さらに、沈線が鋸歯状に施される。

8類 (第49図71, 第65図158)

71は胴部で貝殻条痕を地紋とし、刻目突帯を縦方向の鋸歯状に施している。

158は胴部で、貝殻条痕を波状または横方向にめぐらせたものを地紋とし、刻目突帯を縦方向の鋸歯状に施している。

9類 (第65図159)

159は口縁～胴部で、ほぼ直線的に立ち上がる。平坦な口唇部で、斜方向から刻みが施される。上半は縦方向の条痕、下半は横方向の波状条痕を地紋とし、刻みを施した横方向の微隆起突帯が2条間隔をあけて巡らされる。

10類 (第65図160)

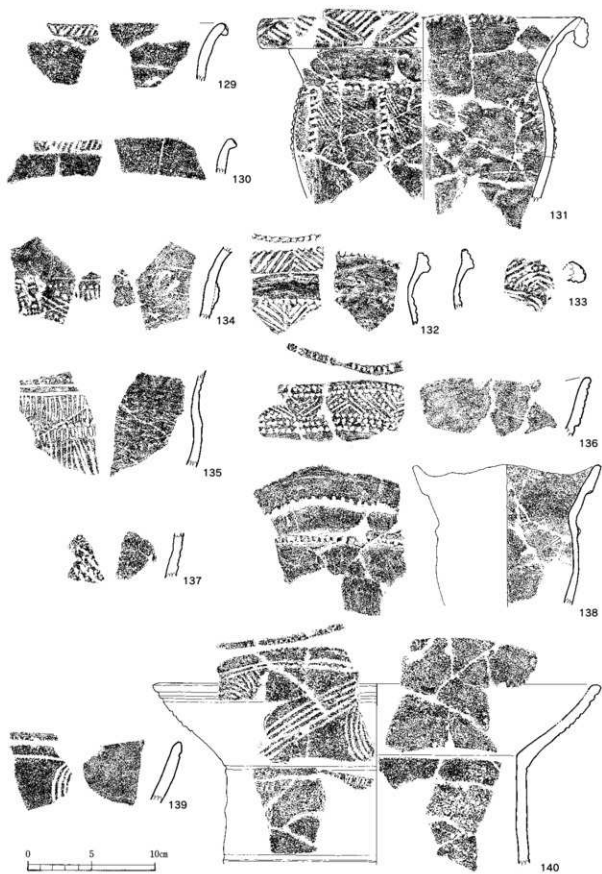
160は小形の深鉢で完形に復元できた。底部は狭く、胴部は丸みをもちながら立ち上がり、口縁付近では直に立つ。口唇には刻みが施され、口縁付近は条痕を複合鋸歯風にし、下半は縦方向に施している。

その他 (第64図154, 第65図155, 156)

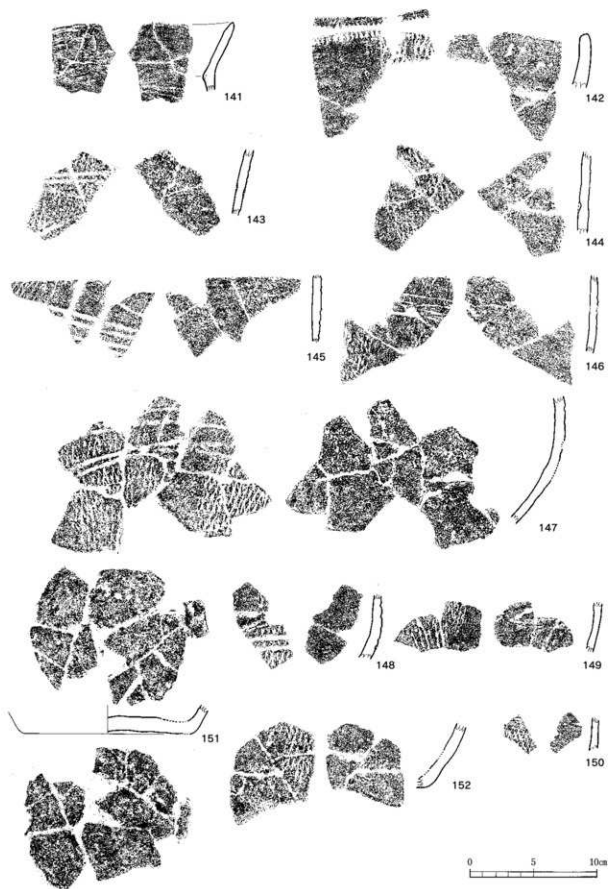
154は完形に復元できた深鉢である。波状口縁で、口縁は開くもので、端部でわずかに外反する。胴部との境で屈曲する。胴部は丸みをもち、中央部で胴部最大径となる。底部は平底である。口唇部は内外両側から刺突紋が施される。口縁部は条痕によって斜方向、波状に紋様が描かれる。口縁と胴部の境に2条の刻目突帯が巡る。

155は口縁部で、大きく開く。口唇部には斜方向の刻みが施され、口縁部は条痕を横方向に施す。

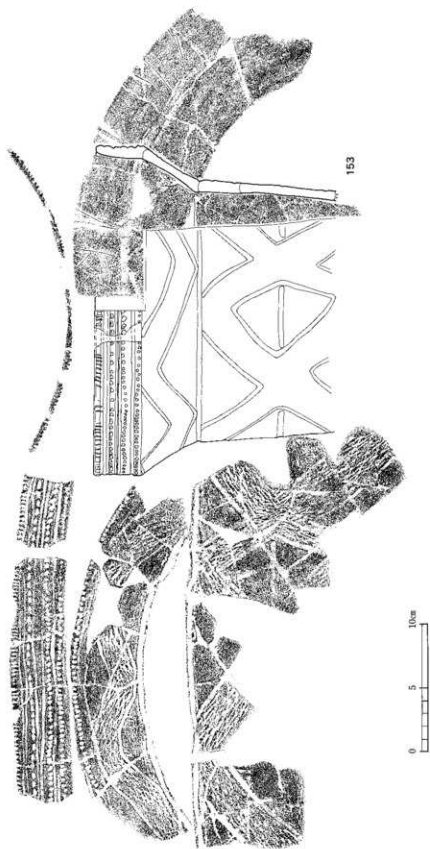
156は口縁部で、緩やかに外反し、無紋である。



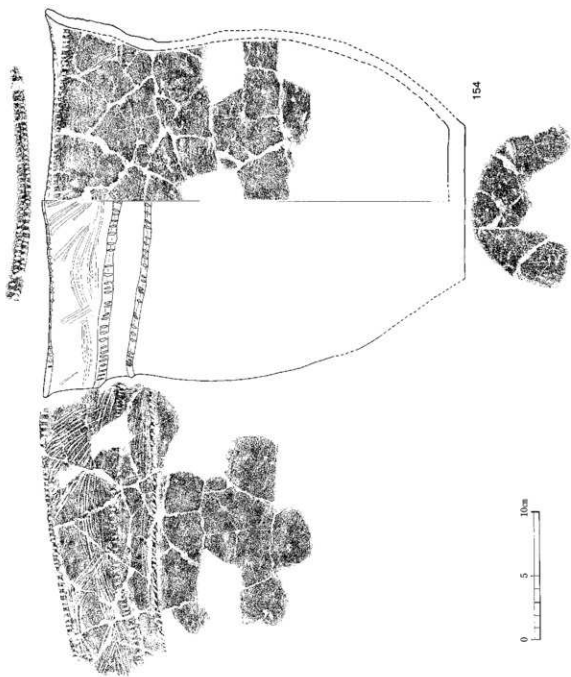
第61図 縄文時代早期の土器 (24)



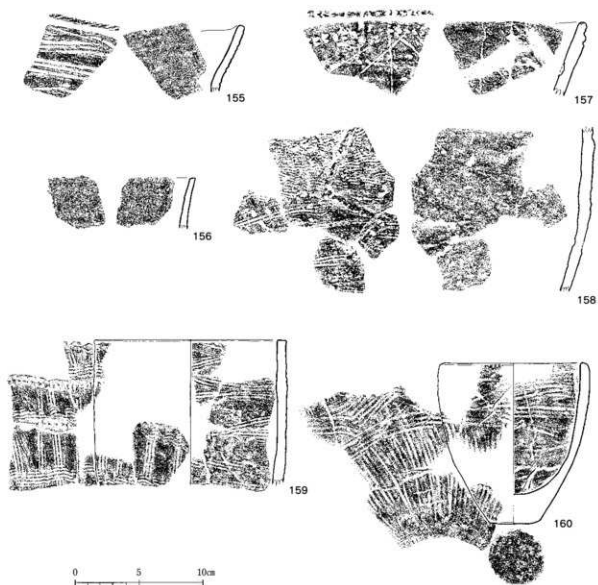
第62図 縄文時代早期の土器 (25)



第63図 縄文時代早期の土器 (26)



第64図 縄文時代早期の土器 (27)



第65図 縄文時代早期の土器 (28)

② 石器・石製品

(はじめに)

土器と同様に平面分布状況から、A～Cの3地区に分けて報告する。

(A地区)

A地区からは磨製石鏃、磨製石斧、磨石・敲石、石皿が出土した。分布域はC-6、D-6・7区とF-7、G-6区の2区域に細分できる。

磨製石鏃 (第66図161、162)

161、162はD-6・7区から出土した。どちらも頁岩製である。161は先端が欠損しているが、縦長で、側縁がやや丸みをもち、基部付近でやや開き気味となる。基部はわずかに窪む。基部は両面から面取りをしている。側縁の一部に稜がみられるが、全体として、研磨によって丸みをもちさせている。162は先端、基部ともに欠損している。

磨製石斧 (第66図163)

163はC-6区から出土した。頁岩製で、欠損しており、基部は不明である。

磨石・敲石 (第66図164～167)

164・165はF-7区で出土した。164は一部欠損しているが、ほぼ正円形の平面で、両面に磨痕が残り、側縁の一部に敲打痕が残っている。165は不整な四角形で、後縁部分に敲打痕が顕著である。166はD-6区から出土した。不整な四角形で、後縁に敲打痕が顕著で、わずかに磨痕が残る。167はD-7区から出土した。扁平で平面が不整な四角形である。側縁部分に敲打痕が顕著に残っている。

石皿 (第67図168、169)

2点取り上げた。いずれも砂岩製で、縦長の形状を残している。168はD-6区から出土した。やや扁平で、両面と側縁の一部に磨痕が残っている。169はG-6区から出土した。やや厚さがあり、両面に磨痕が残り、磨面の断面が曲面を呈している。

(B地区)

B地区からは抉状耳飾、トトロ石器の石製品や打製石鏃(未製品)、磨製石鏃、石匙、楔形石器、石錐、尖頭状石器、スクレイパー、剥片、石核、磨製石斧、磨石・敲石、砥石、有溝砥石、石皿、礫器などが出土した。集中域はB-11区とC-13、D-12～14とF-11～13区、さらにG・H-11、I-10区の4区域に細分される。

石器製作に伴うチップも多数出土したが、図化は困難であり、図は掲載していない。チップの素材は安山

岩(サスカイト)、頁岩、黒曜石(針尾系、姫島産ほか)、ホルンフェルス、砂岩である。

また、本来無遺物層であるIV層出土として取り上げてしまったものは縄文時代早期の資料として位置づけ、ここで取り上げた。

石製品・耳飾り (第68図170)

170はB-11区から出土した。破損して、3点に割れたものが接合できた。素材は滑石である。一部欠損した状態であるが、平面形が金環形の抉状耳飾である。直径2.8cm、内径0.8cm、厚さが0.9～1.1cmである。研磨により丸みをもち、丁寧に仕上げている。

石製品・トトロ石器 (第81図323)

H-11区から出土し、チャート素材としている。片側辺と基部に調整を施している。先端部分は平坦で側辺は基部付近でくの字状に屈曲し、広がり、基部は丸みをもちさせて窪んでいる。

打製石鏃 (第69～75図171～295)

素材には安山岩(サスカイト)、黒曜石(針尾系・榎原産・腰岳産・姫島産ほか)、鉄石英、ホルンフェルス、頁岩、凝灰岩がある。B-11・12区、C-9・10・12～15区、D-12～14区、E-13区、F-11～13区、G-11・12区、H-11区、I-10区と広範囲に出土している。中でもD-12区の出土が最も多い。

171は長さ1cmで、長幅比が0.71である。側辺は丸みをもち、基部は内湾する。姫島産黒曜石製である。

172は長さ1.5cmで、長幅比0.88ではほぼ正三角形形状である。基部がわずかに内湾する。

173、176は長さ2.3cmで、長幅比1.20～1.30で二等辺三角形形状を呈し、基部がわずかに窪む。

174は長さ1.5cmで、長幅比0.94である。側辺を大きく剥離し、基部も鋭角的になる。175は長さ1.7cm、長幅比0.89で基部が大きく内湾し、側辺も逆側部分で屈曲している。179もやや長いのがこれと似た形状である。

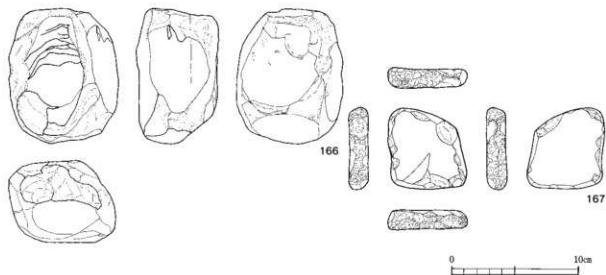
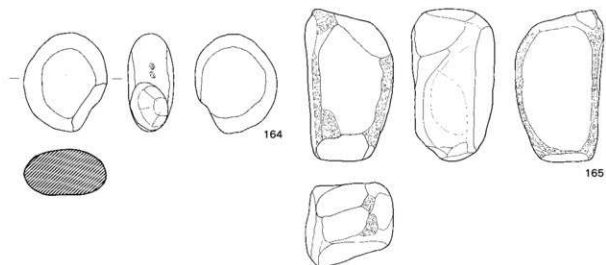
177、178、180は長さ1cm強あり、長幅比も1.00～1.14であるが、やや先端を細くし、基部を内湾させるものである。

181～191は側辺が直線的で、基部が鋭角的に大きく入り込んでいるものである。長さは1.3～2.0cm、長幅比は1.00～1.31である。

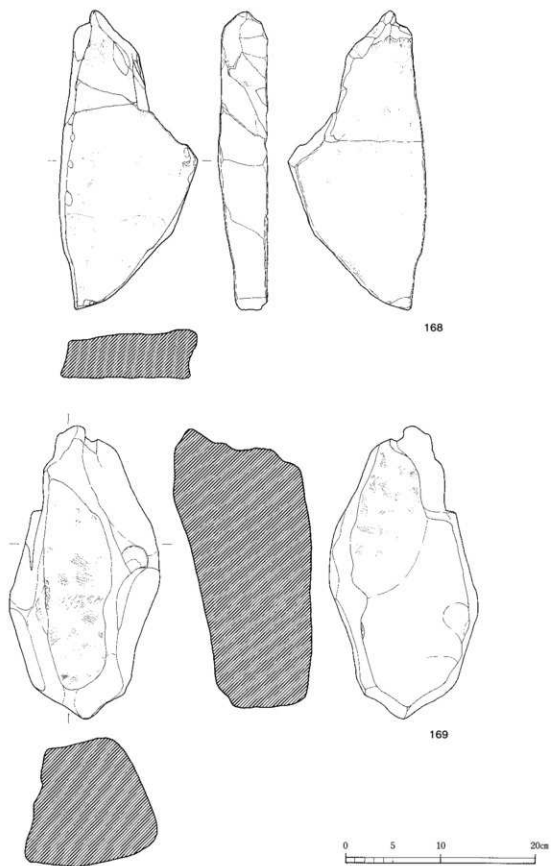
192は基部が欠損しているが、丸みをもちた側辺で、挟りはわずかである。長さは1.5cmである。200は先端が欠損しているが同様の形状であるが、やや大きい。

193、194は未製品である。

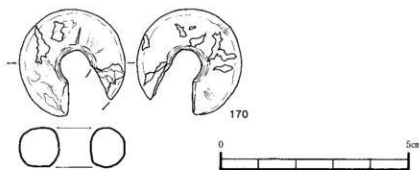
195、196は基部の挟りがやや深く丸をもつ。長幅比は1.25～1.30である。



第66図 縄文時代早期の石器（1）



第67図 縄文時代早期の石器（2）



第68図 縄文時代早期の石器（3）

197, 204, 205, 208, 209は側辺が丸みをもち、逆刺は鋭い。205は未製品である。

198, 199, 201はやや幅広くわずかに挟りが入るものである。199, 201は未製品である。

203, 206は基部にU字状の挟りかはい入るものである。206は長さ2.0cm, 長幅比1.33である。

210~212は側辺が丸みをもち、基部の挟りが大きくU字状にはいる。逆刺は丸みをもっている。212は先端も丸く、長さ2.4cm, 長幅比1.33である。

213~230は側辺が直線的で、基部の挟りが深いものである（213~215は逆刺部分が欠損している）。224, 227を除き逆刺は鋭いものである。長さは1.5~2.5cmで、長幅比は1.20~1.30である。

231~243, 247, 249~251, 253~262, 275は側縁が逆刺付近で屈曲して外に開き、基部の挟りも深く、逆刺は鋭いものである。278~280も同様の形状である。232, 237は欠損品。236は先端が欠損しているが、わずかに横長になる。245も欠損品であるが、この形状になると思われる。280は側辺下部が鋸歯状になる。

244, 269, 270は側辺が内湾気味で先端が細くなる。長幅比が1.40前後である。

246, 248は側辺の剥離が未完のものと思われる。

252は側辺が先端部で一度突出し、逆刺付近で大きく外に開くものである。

263~268は側辺部の剥離が、逆刺付近で特徴的なもので、基部の挟りも大きいものである。263は側辺を大きく挟り、逆刺付近は鋸歯状となる。長さ2.7cm,

長幅比1.50である。264, 266~268も逆刺が鋸歯状になる。265は長さ3.2cm, 長幅比1.50である。逆刺付近で側辺は大きく挟られ、鋭角な逆刺をもつ。

271は長さ2.4cmで、長幅比1.71である。先端が鋸歯状で、側辺は直線的である。基部はU字状に窪み、逆刺は鋭い。

272~274は基部が大きくU字状に挟られるものである。272は逆刺が丸みをもつ。274は基部が平坦となる。273は欠損品である。

276, 283は逆刺が鈍角になっているものである。283は長さ3.0cm, 長幅比1.67である。

277, 281は欠損しているが、基部が大きく挟られ、逆刺が鋭いものである。

284は欠損品で先端部のみである。

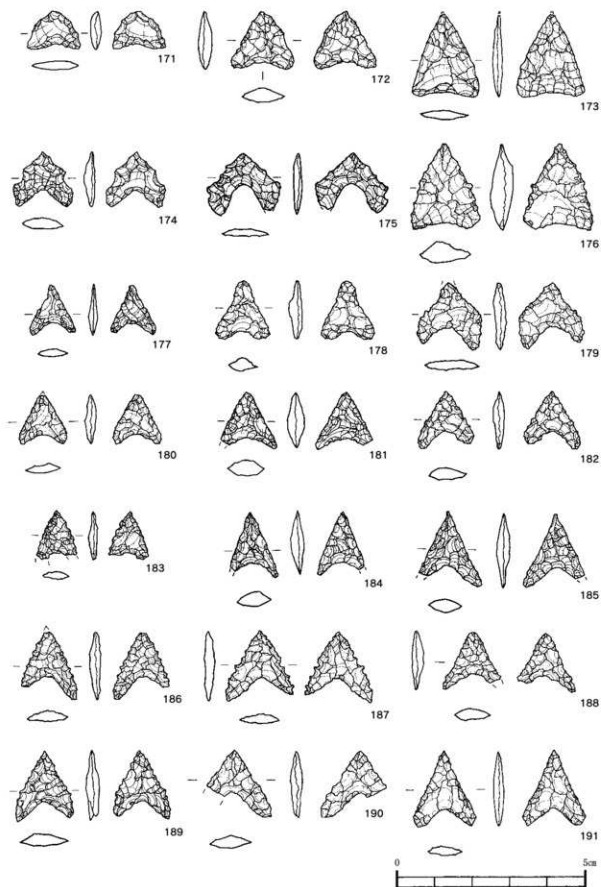
285, 286は側辺の剥離が不十分な未製品である。

287, 290は側辺が中央で屈曲し、五角形状を呈するものである。287はその未製品である。290は長さ2.2cm, 長幅比1.83で、基部はわずかに窪む。

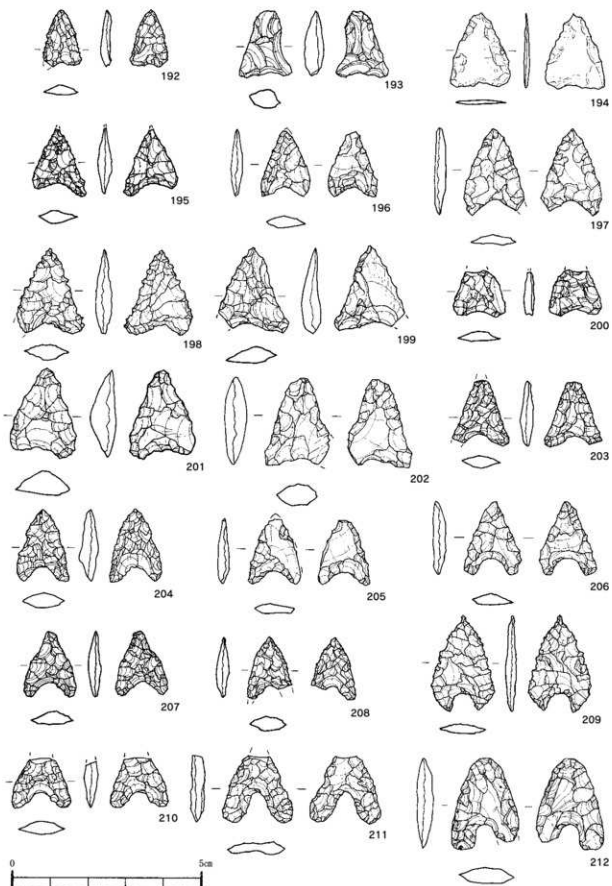
288は成形過程で欠損したものと思われる。

289は自然面を残し、先端と逆刺の一方が欠損しているものである。

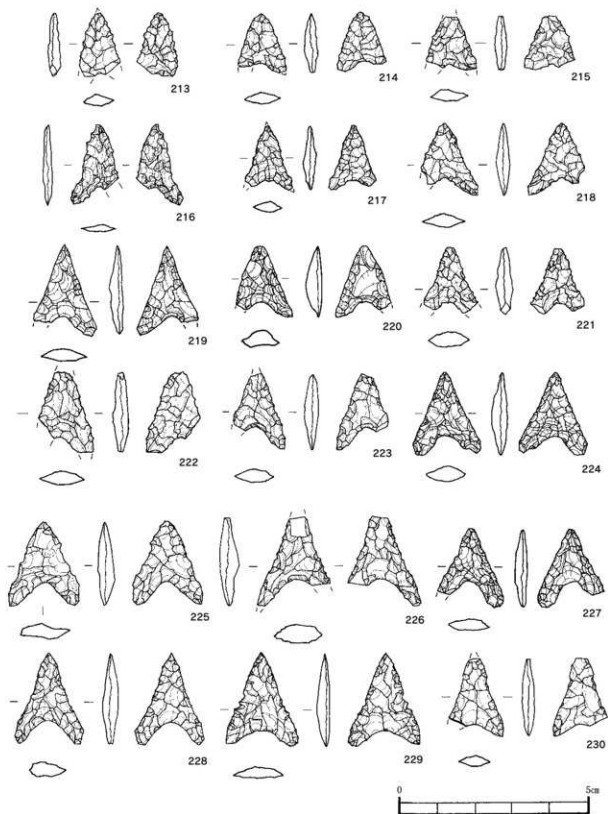
291~295は縦長のものである。291は長さ2.2cm, 長幅比1.83である。鋸歯状の縁辺で、基部はやや丸みをもつ。293は長さ3cm, 長幅比2.5で側辺がわずかに丸みをもち、基部はわずかに窪む。292は欠損品であるが同様の形状であろう。294も側辺が丸みをもつが、基部は平坦である。295は先端と基部が欠損している。成形過程で欠損したものであろう。



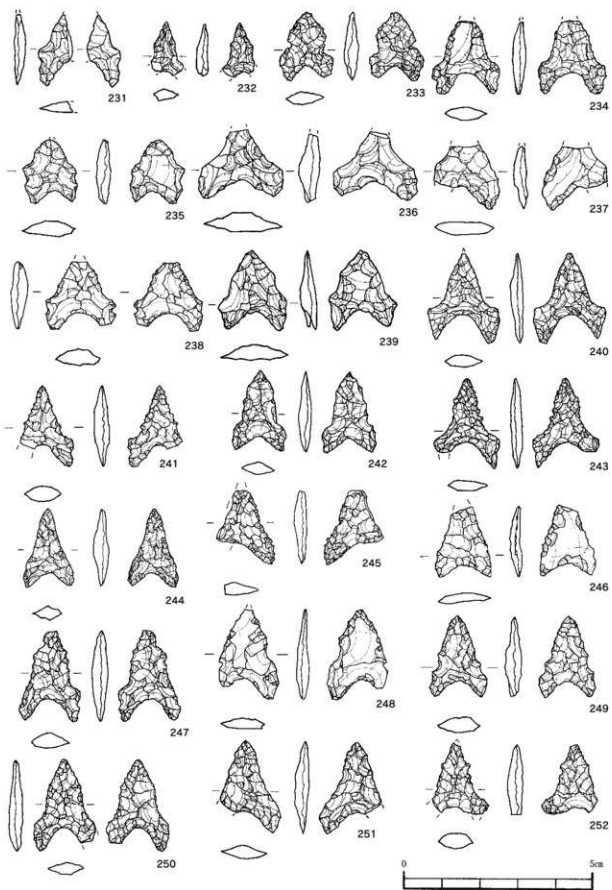
第69図 縄文時代早期の石器（4）



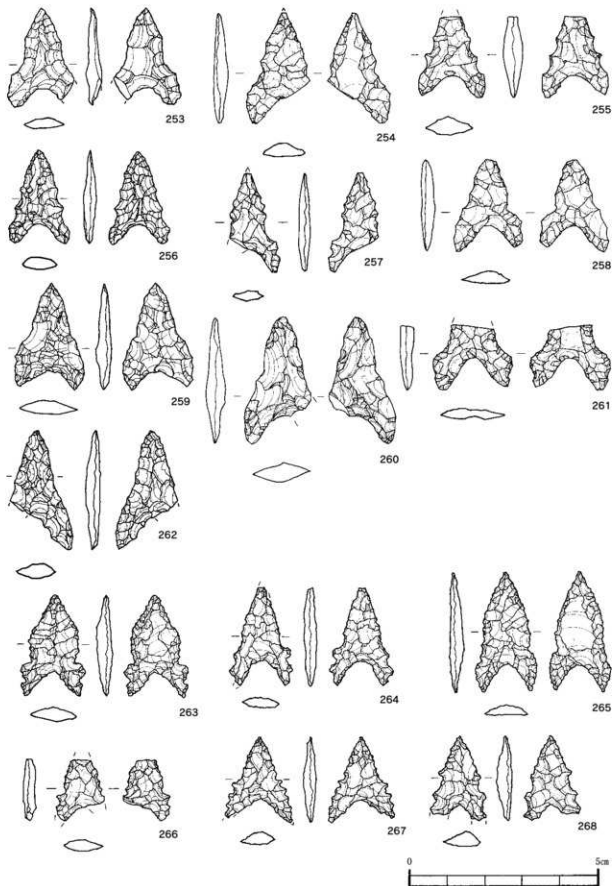
第70図 縄文時代早期の石器（5）



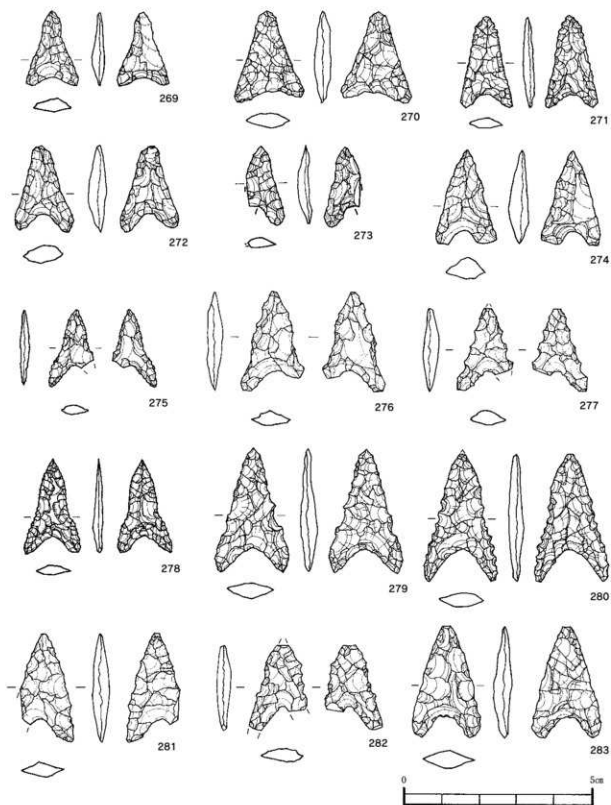
第71図 縄文時代早期の石器（6）



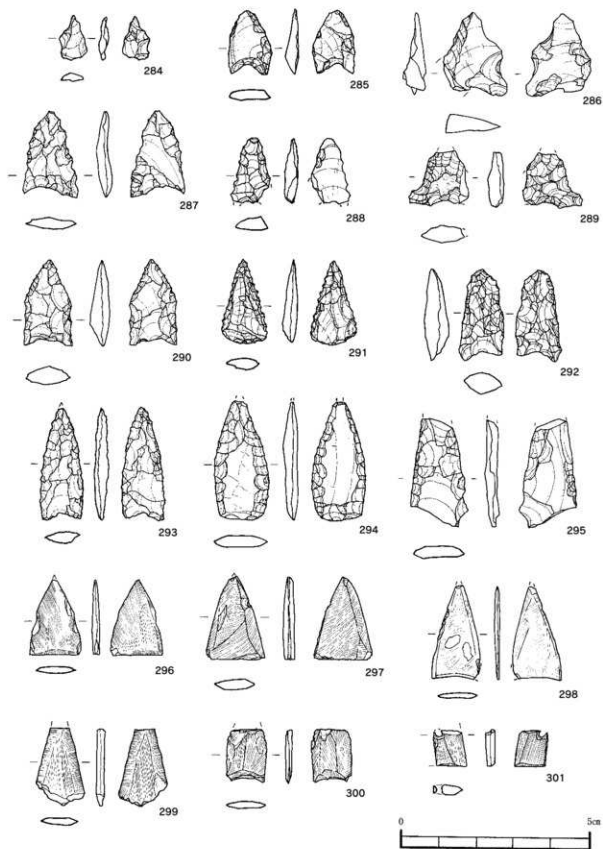
第72図 縄文時代早期の石器（7）



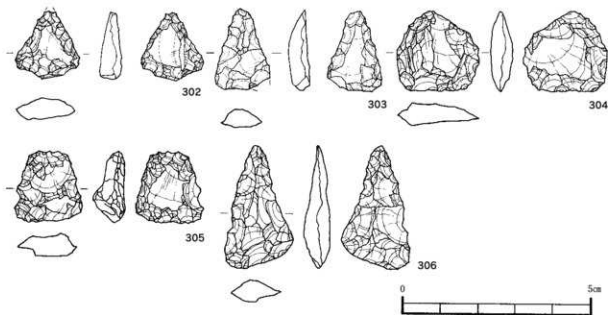
第73図 縄文時代早期の石器（8）



第74図 縄文時代早期の石器（9）



第75図 縄文時代早期の石器 (10)



第76図 縄文時代早期の石器 (11)

磨製石鏃 (第75図296~301)

いずれも頁岩を素材にする。C・D-13区に集中する。

296, 297は長幅比が1.4代で、基部はほぼ平坦である。296は研磨により片側辺と基部を面取りしている。297はやや厚さがある。側辺に面取りがあり、さらに側縁にも面取りがみられる。

298は長幅比が1.9代でやや長いものである。側辺と基部を面取りし、基部はわずかに窪ませている。299, 300は欠損品である。

301も欠損品であるが、中央に穿孔を施している。

打製石鏃未製品 (第76図302~306)

側辺を細かく調整し、平面三角形にしているものを、石鏃未製品とした。C-13, D-13, F-11区から出土し、素材は様々である。

石匙 (第77~80図307~320)

いずれも横長のもので安山岩 (307~314) とホルンフェルス (315~320) を素材としている。安山岩のものはC~F-12~14区に、ホルンフェルスはB~G-10~12区に出土している。

307~309はやや長い剥片を素材としている。311はやや短い素材の剥片で、側辺の調整が細かく施され、菱形を呈している。314も短い素材で極端に横長であ

る。

312は未製品もしくはスクレイパーである。313は小型品である。

ホルンフェルス素材とするものはやや横長のもの (315, 316)、長めの素材で、大き目のもの (317, 318)、小形のもの (319, 320) がある。

楔形石器 (第81図321, 322)

B-11, D-12区から出土した。素材は安山岩で、長さは1.5~2.3cmである。322は片面のみ端部の調整を施している。

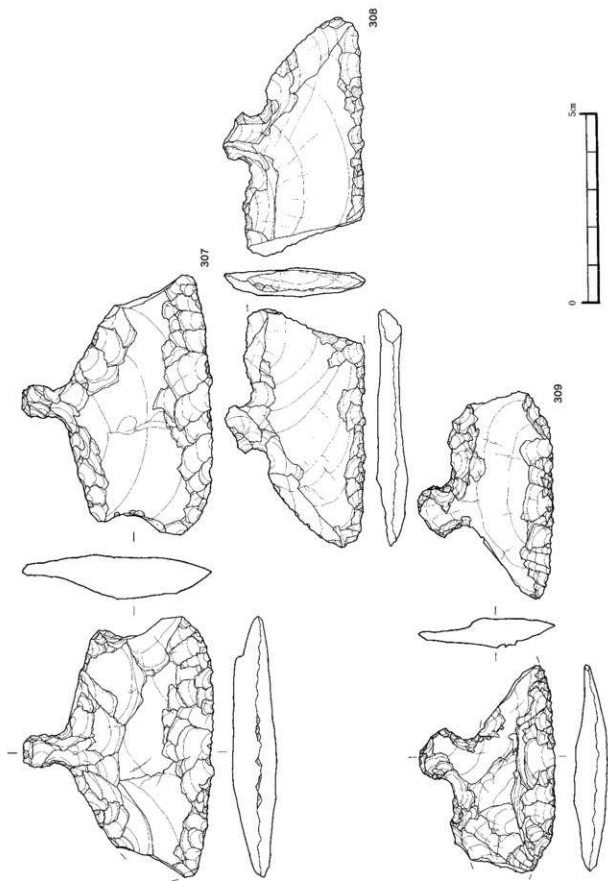
石鏃 (第81図324~330)

黒曜石と安山岩を素材にしている。黒曜石は樋脇、針尾、姫島と産地・素材が異なっている。また、出土区もC-14, D-12・13, E-13, F-12と散在している。いずれも、鏃部分は短く、328を除き五角形状を呈している。328はやや細長である。

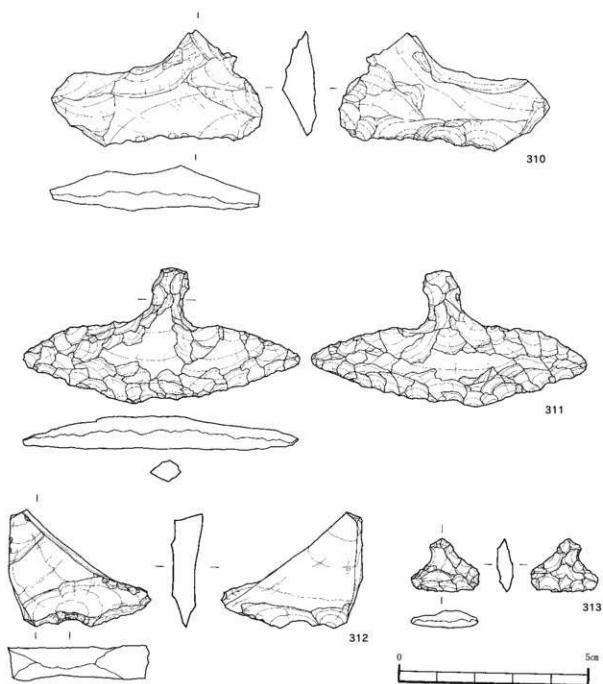
尖頭状石器 (第82図331, 332)

331はC-13区から出土し、頁岩を素材とする。片面の両側辺ともう片面の片側辺に細かい調整を施している。基部はわずかに窪む。

332はD-12区から出土し、安山岩を素材とする。両面の両側辺にやや大きめの剝離がみられる。



第77図 縄文時代早期の石器 (12)



第78図 縄文時代早期の石器 (13)

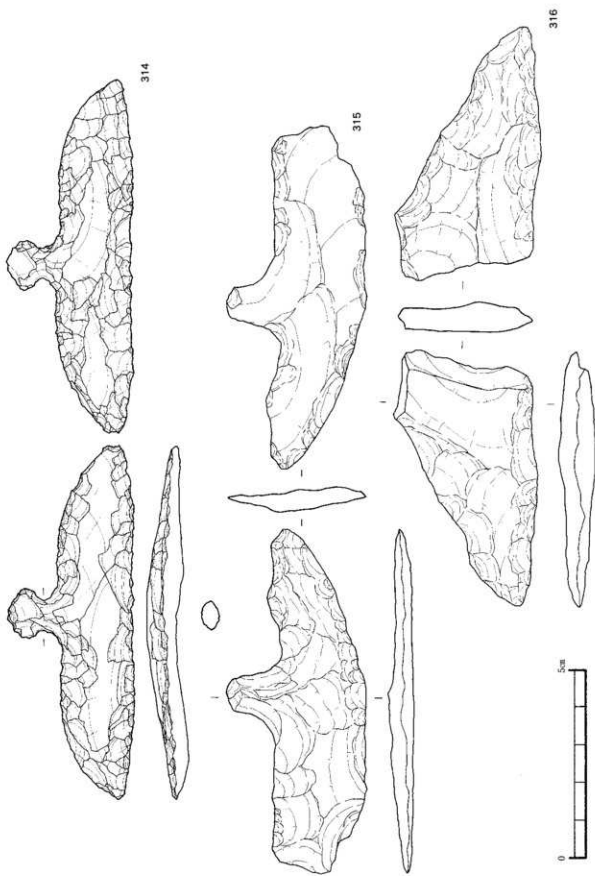
スクレイパー (第82, 83, 85図333~343, 356)
出土区は集中せず、素材も頁岩、安山岩、ホルンフェルスなど様々である。

短い剥片を素材とし、その基部を剥離するもの(333, 338, 339, 342, 343)、横長剥片の基部を剥離するもの(335, 336, 337, 356)と剥片の側辺を剥離するもの(334, 340, 341)がある。

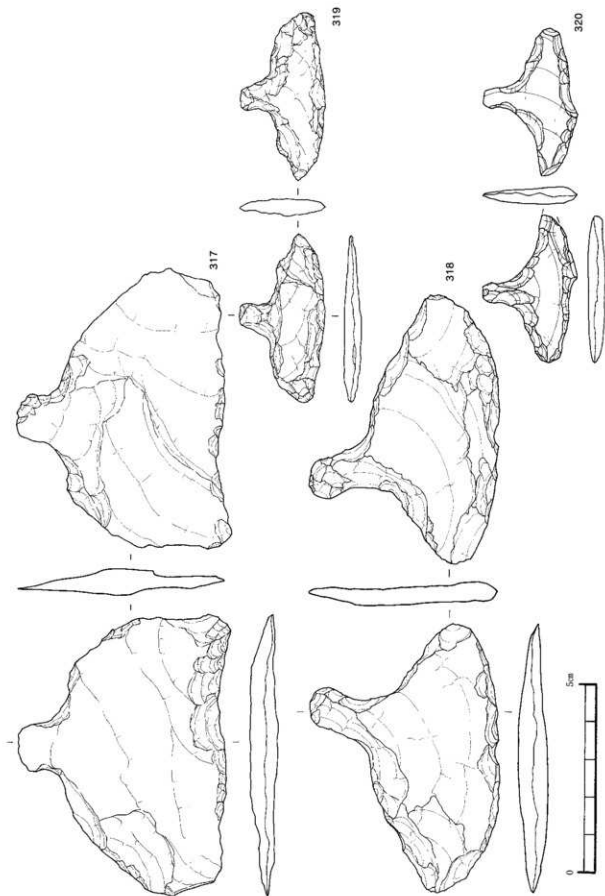
剥片 (第84, 85図344~347, 350, 352~355)

二次加工剥片、使用痕剥片、剥片等を一括した。

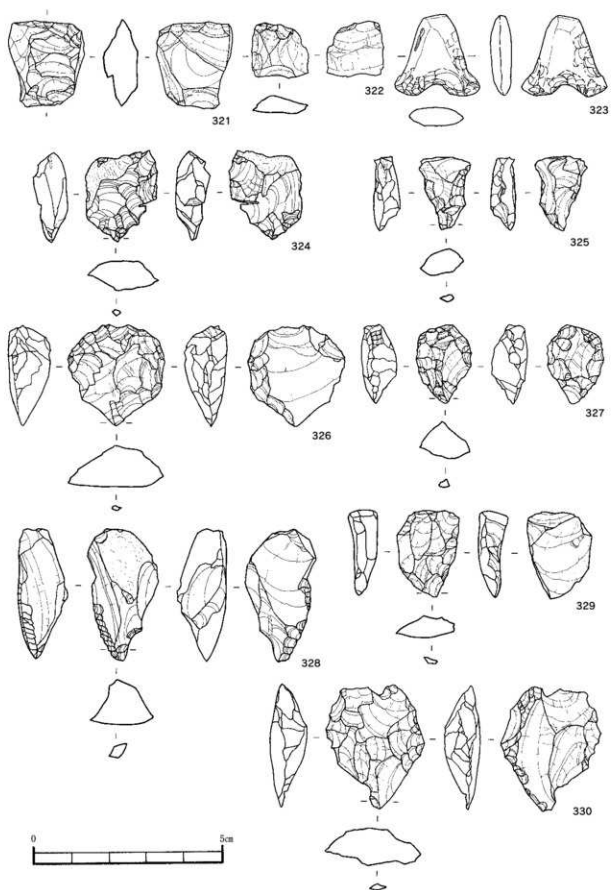
344はC-13区で出土したもので、ホルンフェルス素材とする。横長剥片で刃部側に加工がみられる。345もC-13区から出土しているが、安山岩を素材とする。縦長剥片で側縁に使用痕が認められる。346, 347はF-12区から出土し、安山岩を素材とする剥片である。



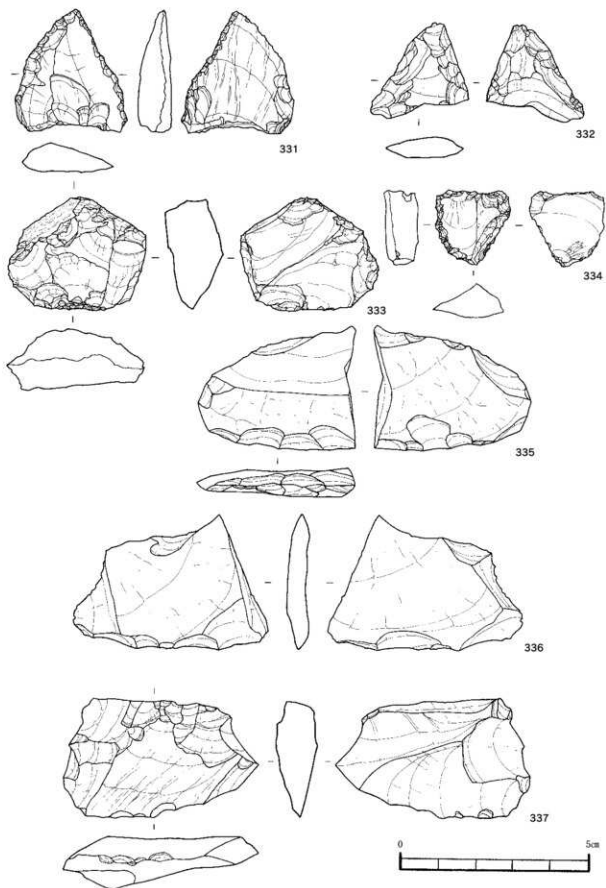
第79図 縄文時代早期の石器 (14)



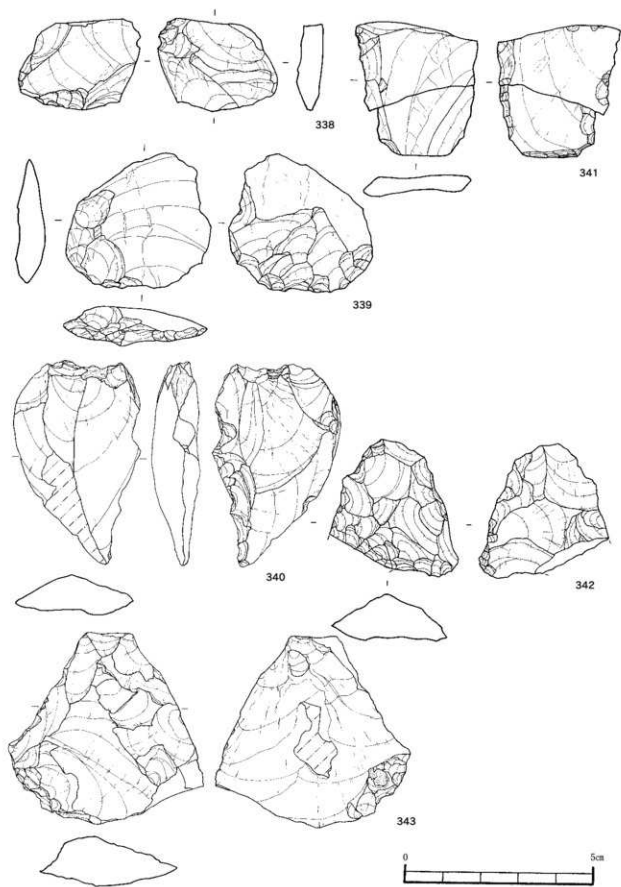
第80図 縄文時代早期の石器 (15)



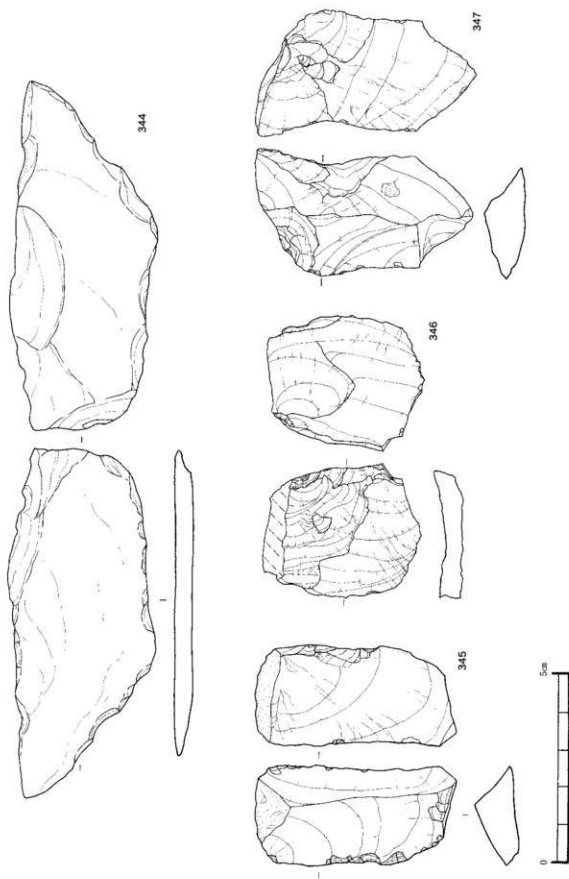
第81図 縄文時代早期の石器 (16)



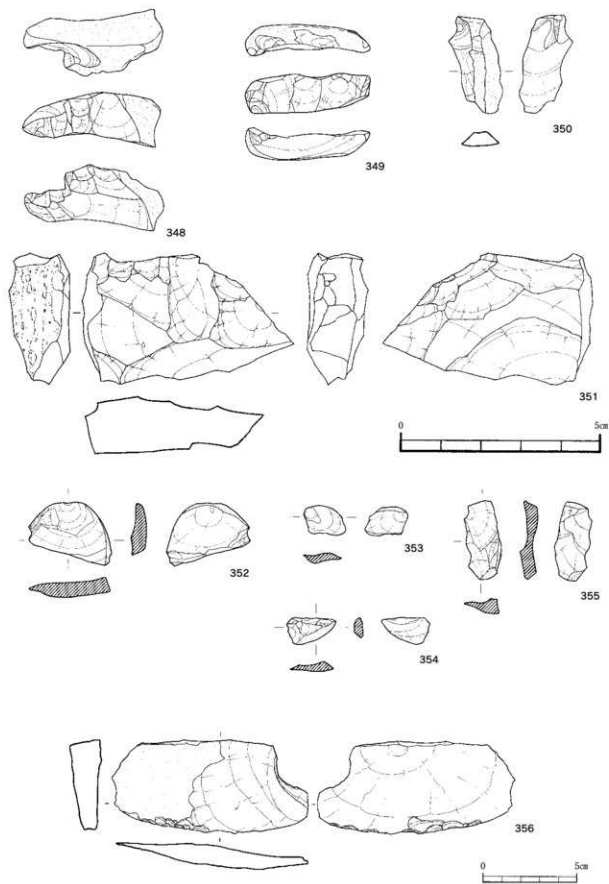
第82図 縄文時代早期の石器 (17)



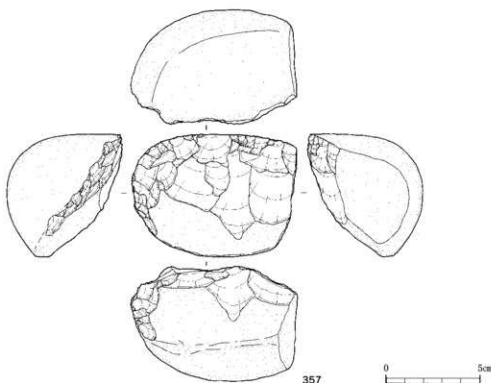
第83図 縄文時代早期の石器 (18)



第84図 縄文時代早期の石器 (19)



第85図 縄文時代早期の石器 (20)



第86図 縄文時代早期の石器 (21)

350はH-11区から出土し、黒曜石を素材としている縦長の剥片である。

352~355は砂岩を素材としたもので、B-10、C-12区から出土している。

石核 (第85~87図348, 349, 351, 357~360)

348はH-11区から出土し、黒曜石を素材とする。打面は自然面のままである。作業の最終段階で左方向から切断している。349はD-13区から出土し、黒曜石を素材としている。これも最終段階で切断している。

351はD-12区から出土し、安山岩を素材とする。上下から剥片をとっているものと考えられる。

357~360は砂岩の礫を母岩とするもので、打面は自然面のままである。C-10, 13区から出土している。

357は平面形が三角形を呈する礫を使用し、その平坦面を打面としている。正面と左側面から剥離している。最終作業で細かい調整を施している。側面観はやや鋭角的である。

358, 359は扁平な円礫を使用している。これも最終段階で細かい調整をしており、側面観はやや鋭角的である。359は裏面側にも剥離がみられる。

360はやや厚い円礫を用いている。これも最終段階で細かい剥離を施している。

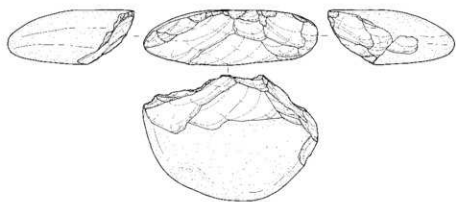
磨製石斧 (第88, 89図361~366)

D-12・13, F-11・12区から出土した。ホルンフェルスと頁岩を素材とする。

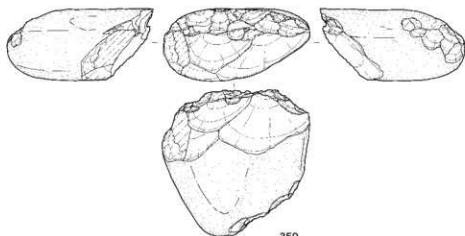
361, 362はD-12区から出土し、ホルンフェルスを素材とする。長さが16cm以上あり、長幅比は2.31, 1.94である。表面の風化が著しく、詳細な製作技法はわかりづらいが、両側面から剥離し調整している。366もホルンフェルス製でD-13区から出土した。8.9cmと短いが長幅比は2.41である。

363は頁岩製で、刃部が欠損しているが、刃部付近には磨痕が残っている。やや大きいものである。

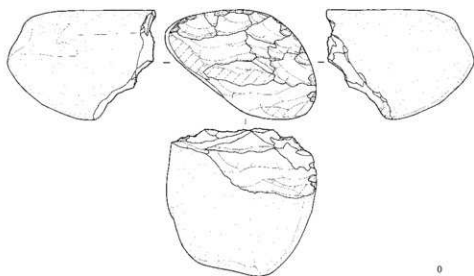
364, 365は頁岩製でF-11・12区から出土した。364は長さ15.3cmで長幅比が3.00である。素材の礫の形状を残し、やや曲がっている。側面を剥離し、刃部を研磨している。365は長さ9cmで、長幅比2.20である。刃部付近を丁寧に研磨して刃部を形成している。



358



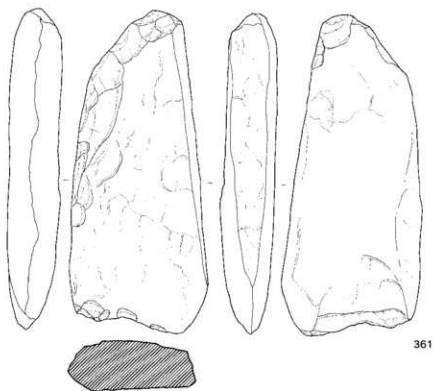
359



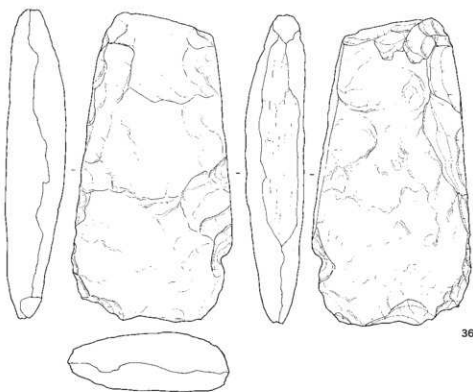
360



第87図 縄文時代早期の石器 (22)



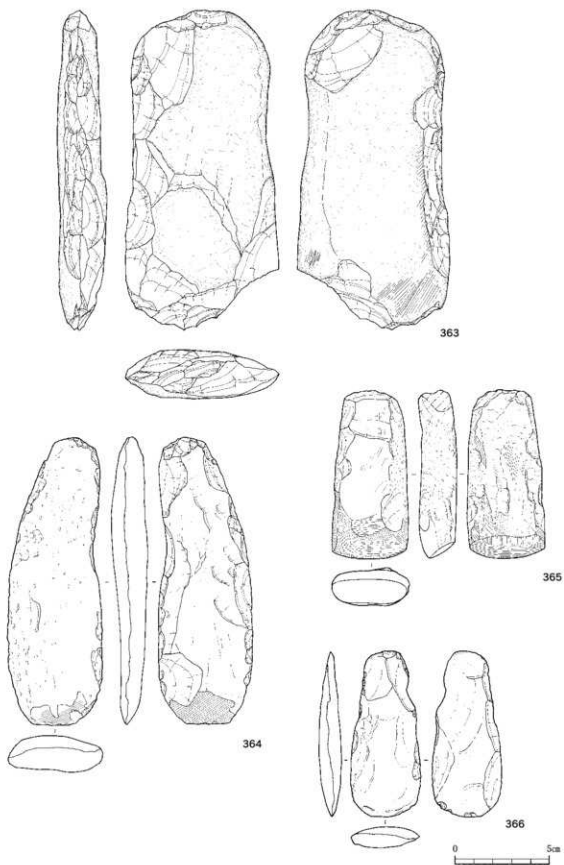
361



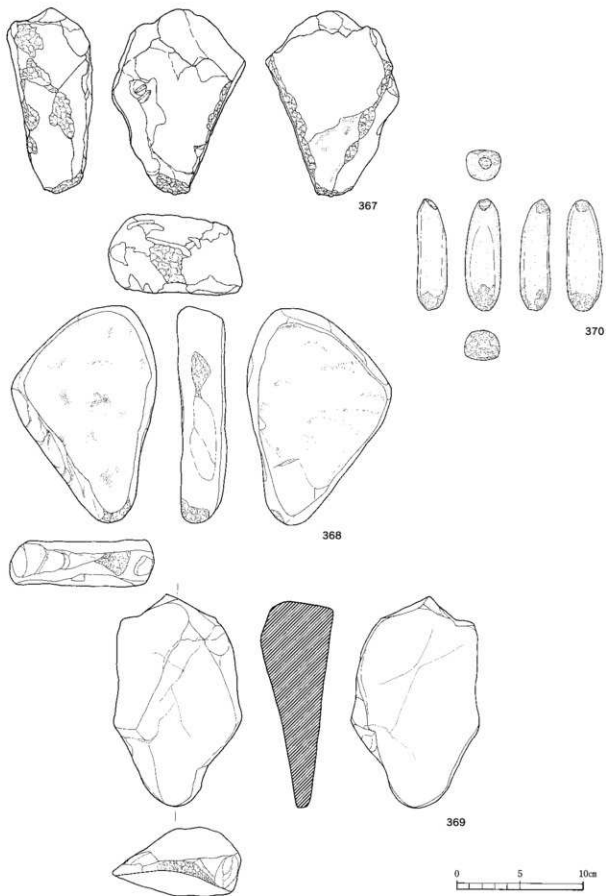
362



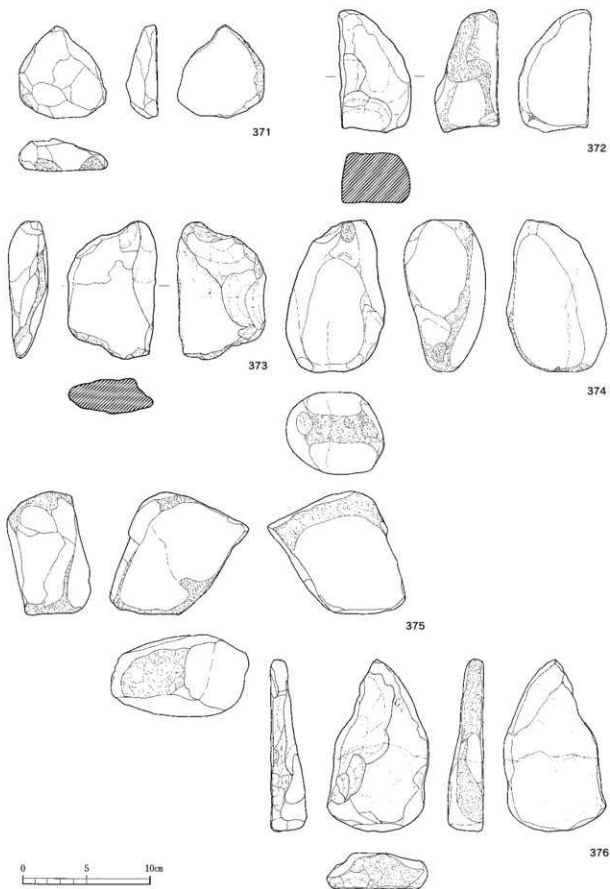
第88図 縄文時代早期の石器 (23)



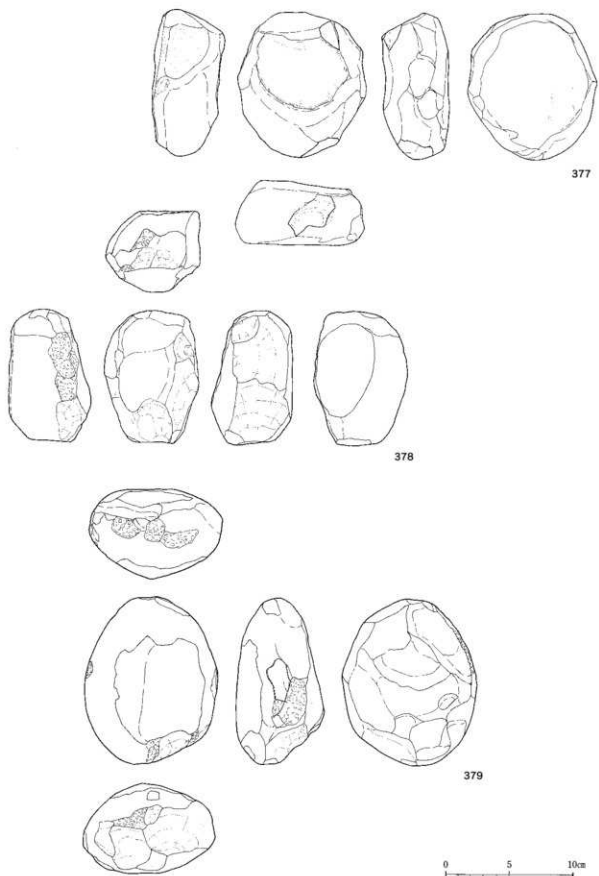
第89図 縄文時代早期の石器 (24)



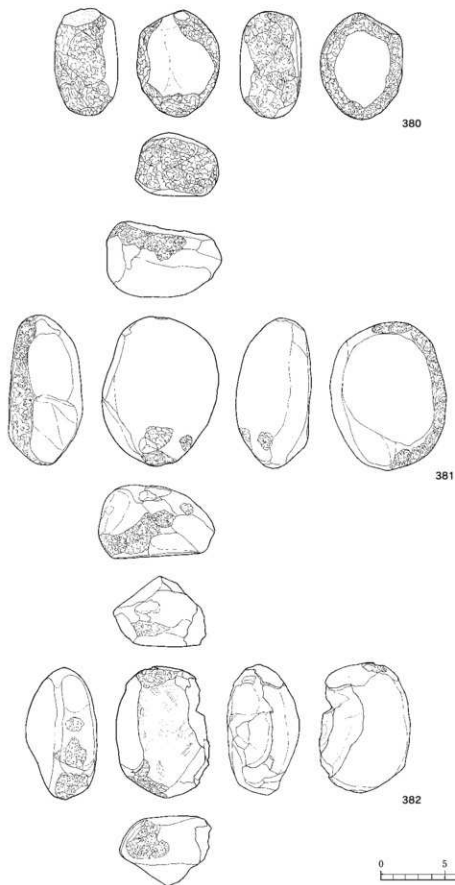
第90図 縄文時代早期の石器 (25)



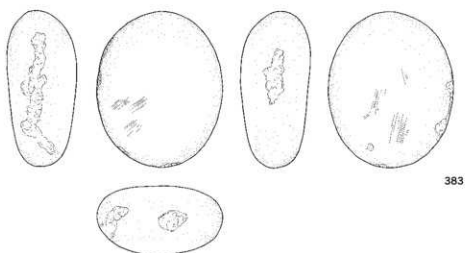
第91図 縄文時代早期の石器 (26)



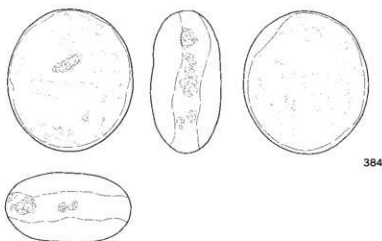
第92図 縄文時代早期の石器 (27)



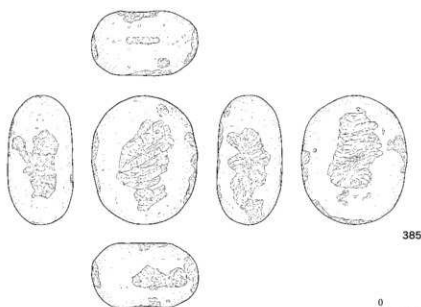
第93図 縄文時代早期の石器 (28)



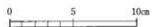
383



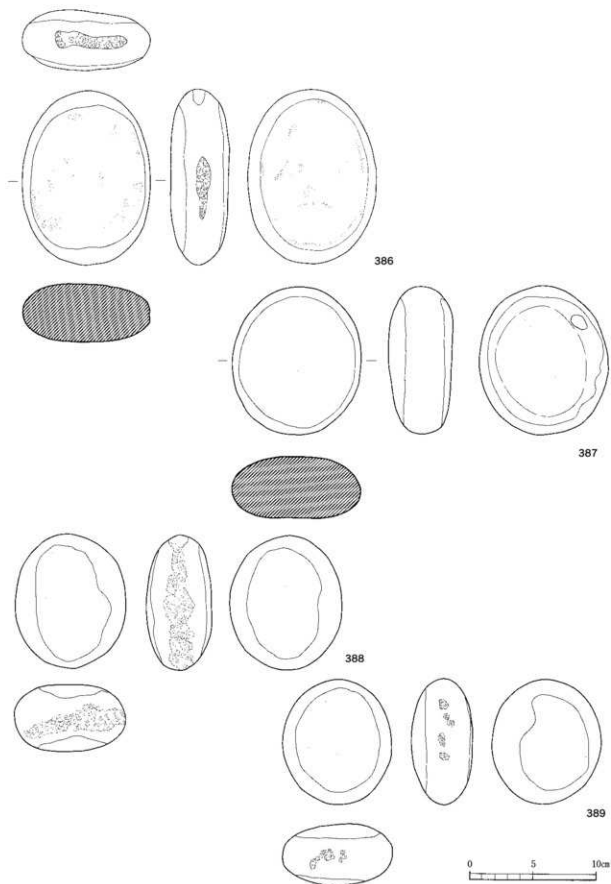
384



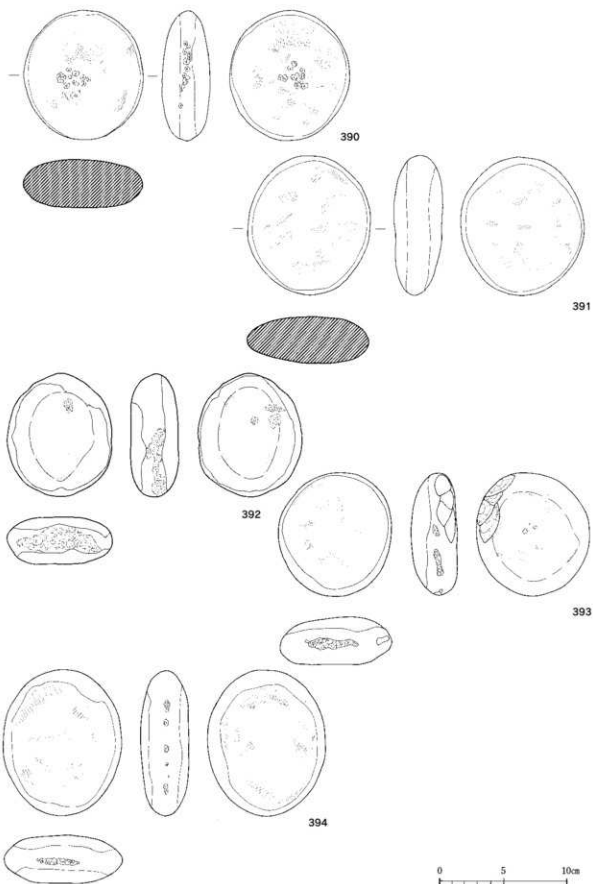
385



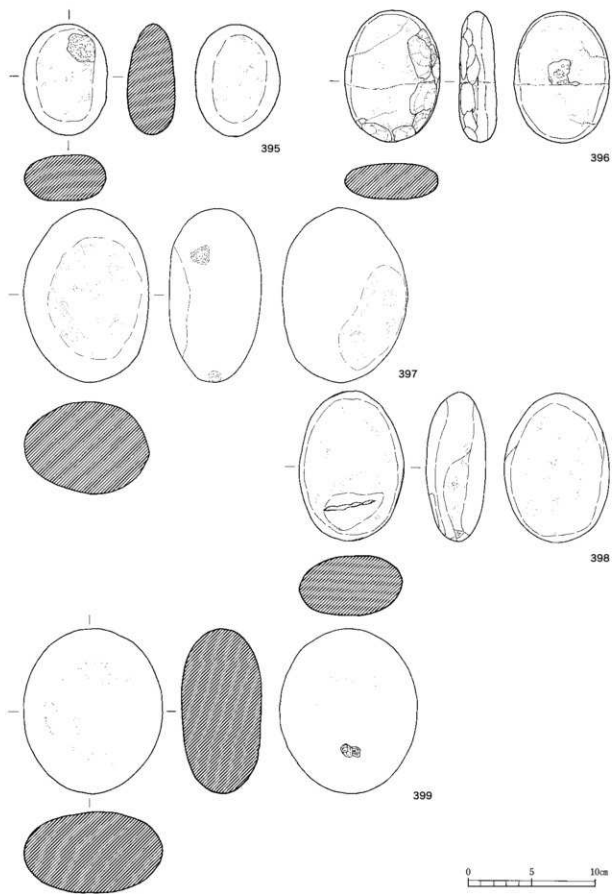
第94図 縄文時代早期の石器 (29)



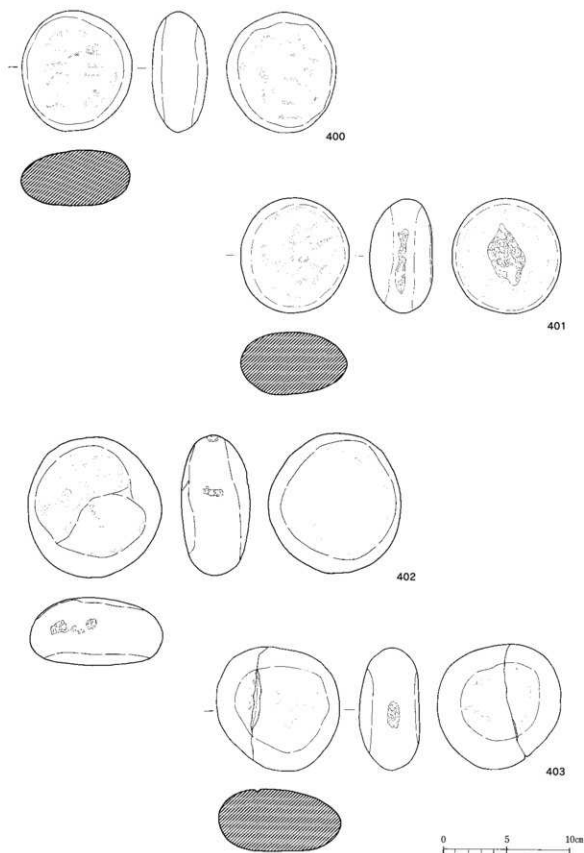
第95図 縄文時代早期の石器 (30)



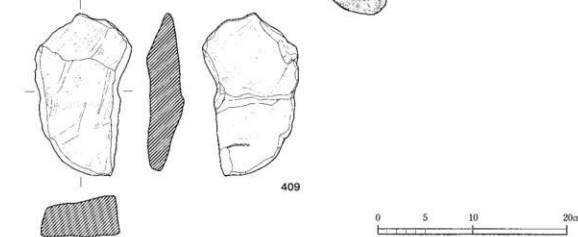
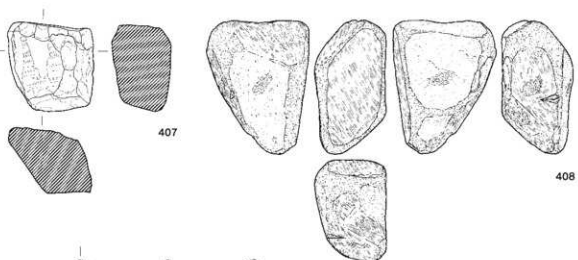
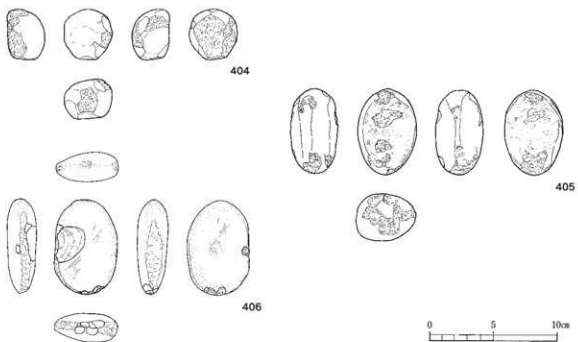
第96図 縄文時代早期の石器 (31)



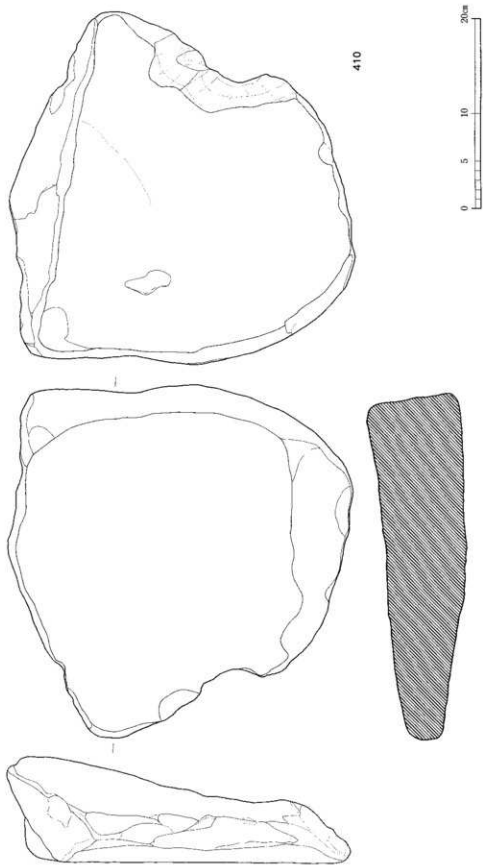
第97図 縄文時代早期の石器 (32)



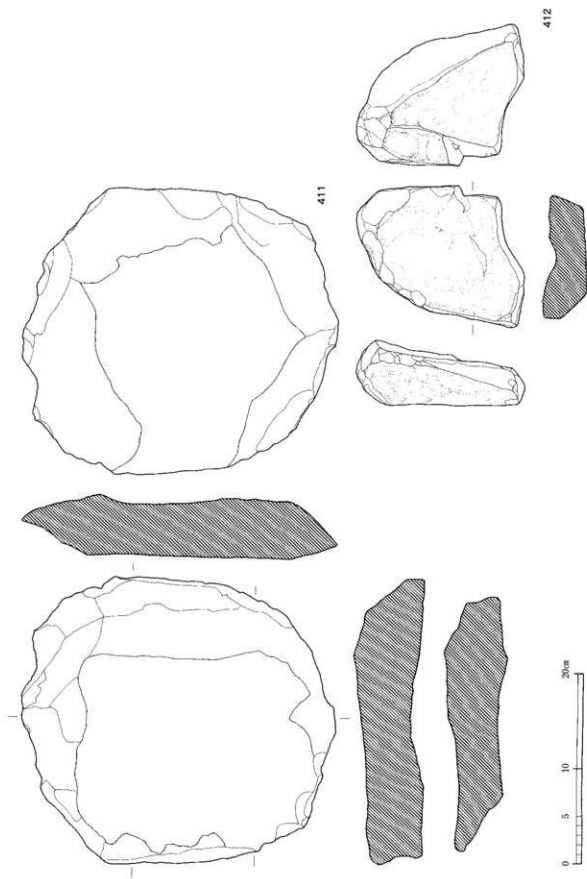
第98図 縄文時代早期の石器 (33)



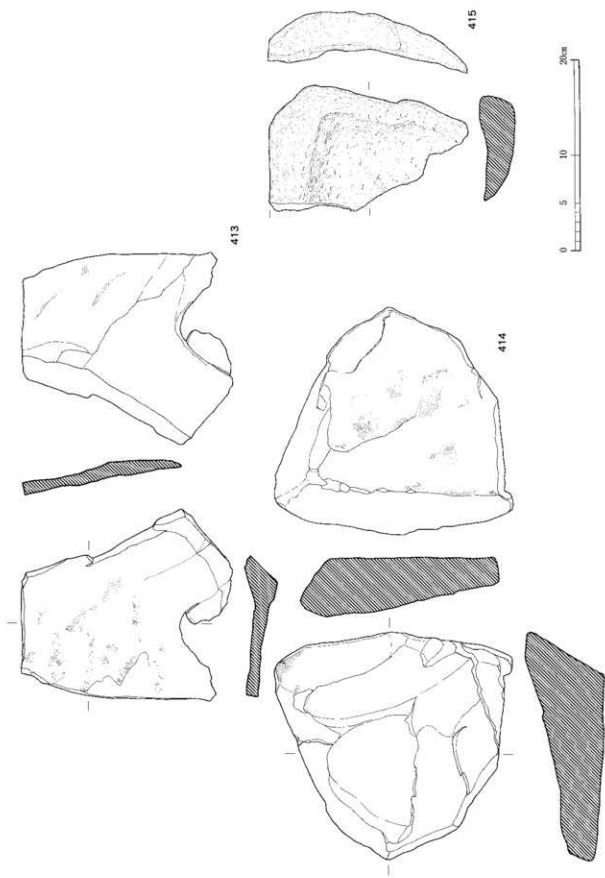
第99図 縄文時代早期の石器 (34)



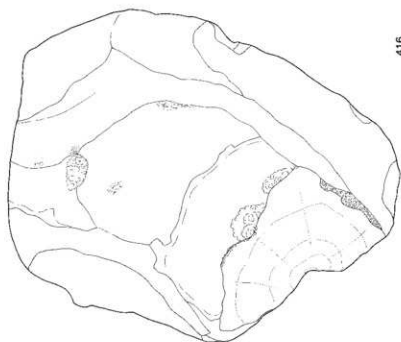
第100図 縄文時代早期の石器 (35)



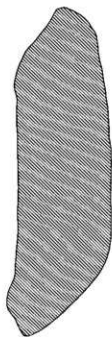
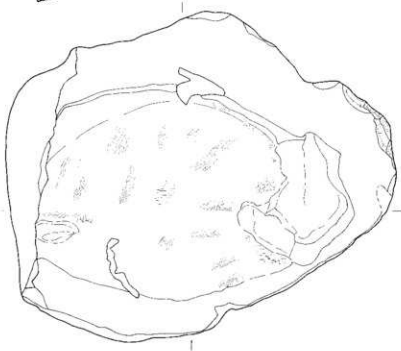
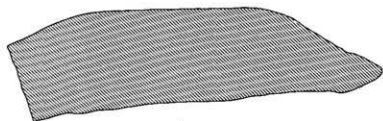
第101図 縄文時代早期の石器 (36)



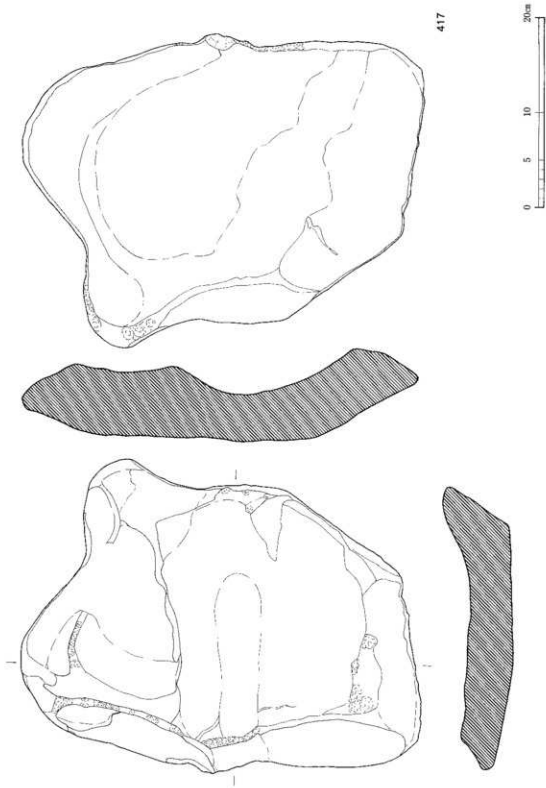
第102図 縄文時代早期の石器 (37)



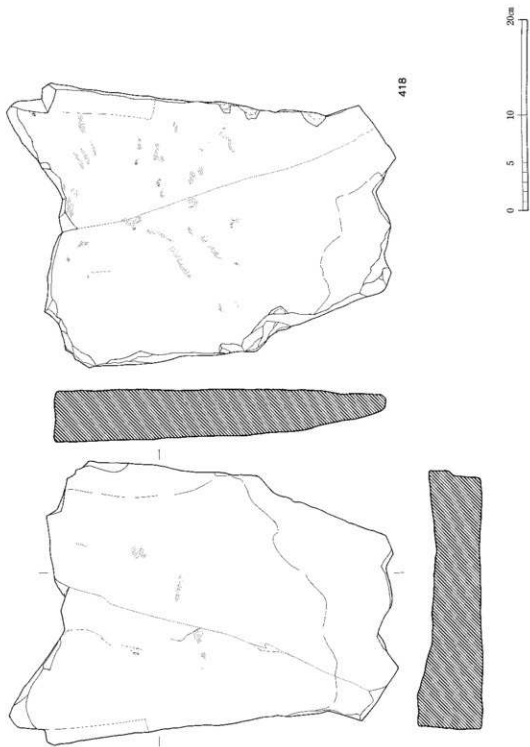
416



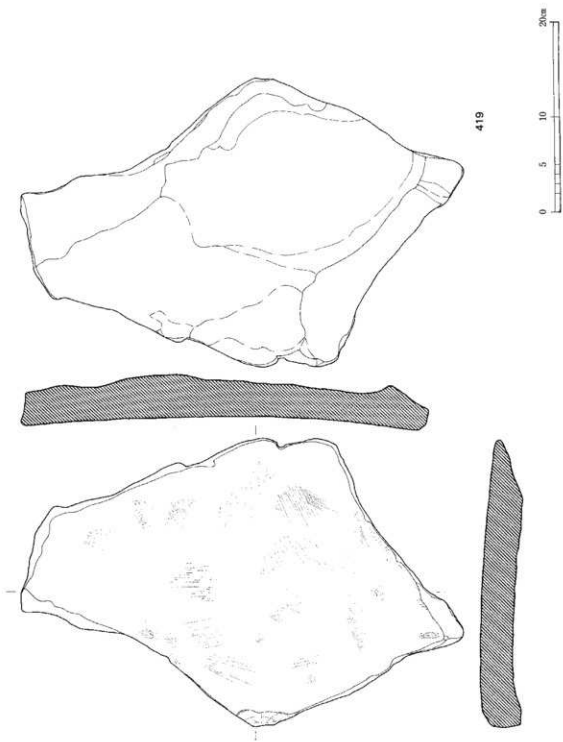
第103図 縄文時代早期の石器 (38)



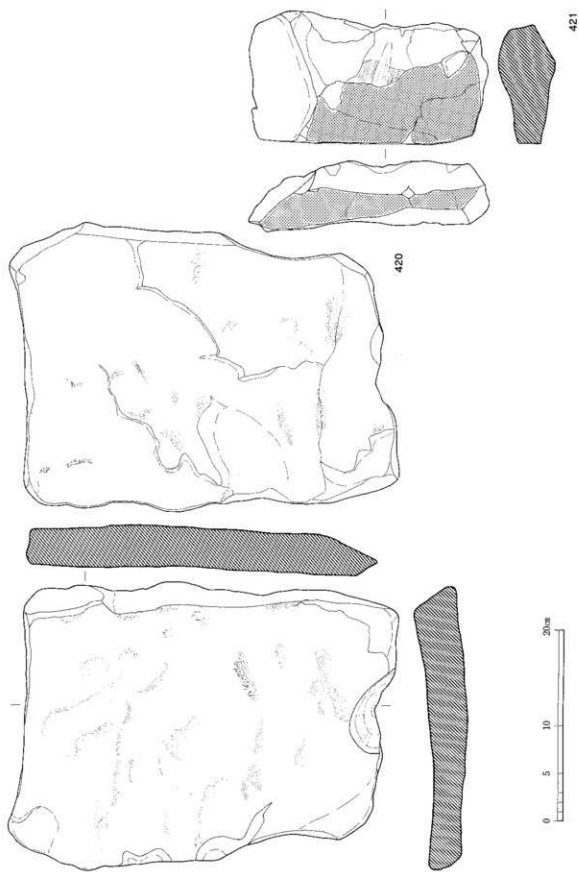
第104図 縄文時代早期の石器 (39)



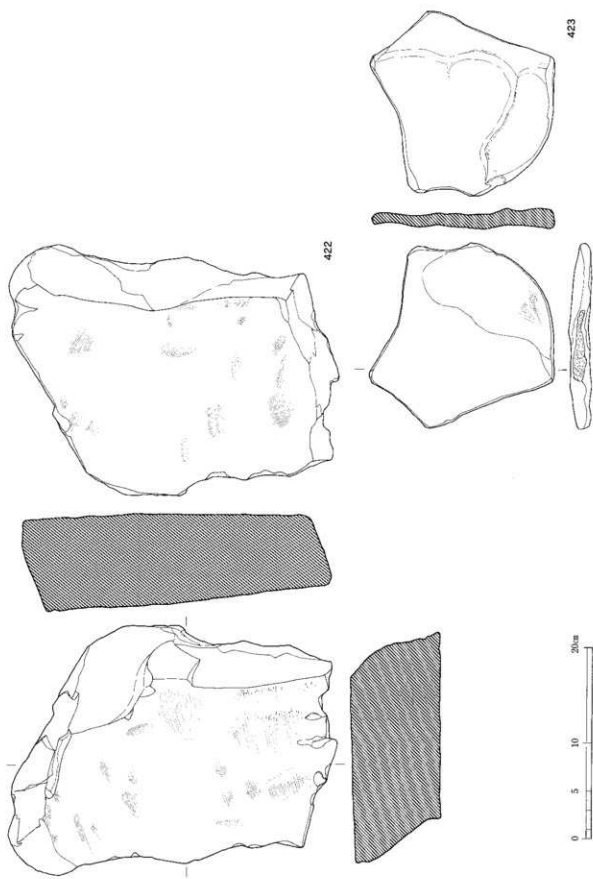
第105図 縄文時代早期の石器 (40)



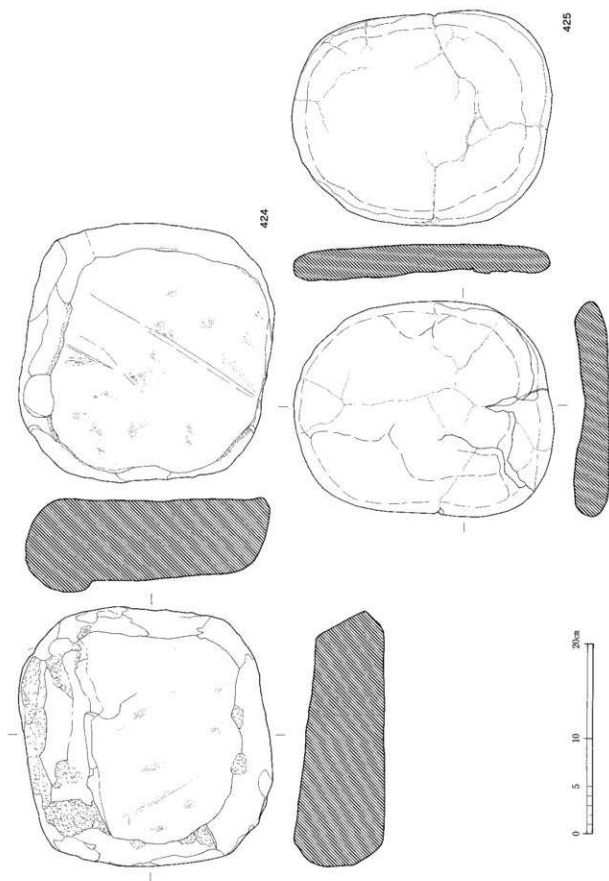
第106図 縄文時代早期の石器 (41)



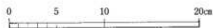
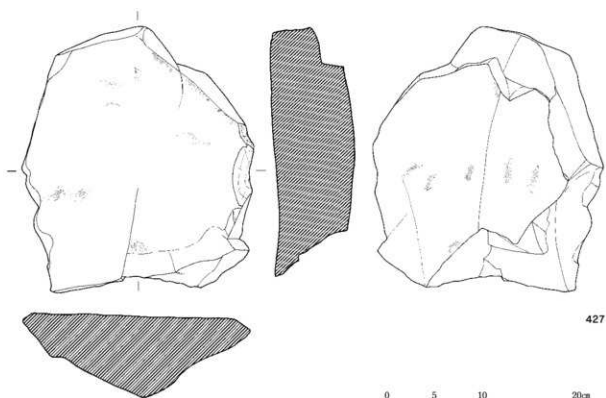
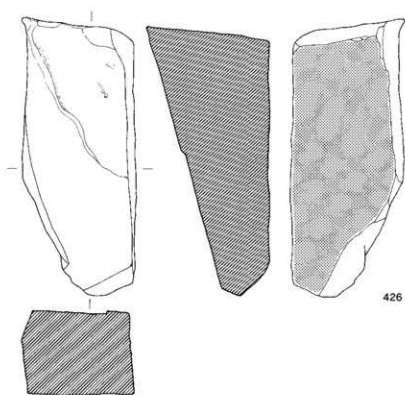
第107図 縄文時代早期の石器 (42)



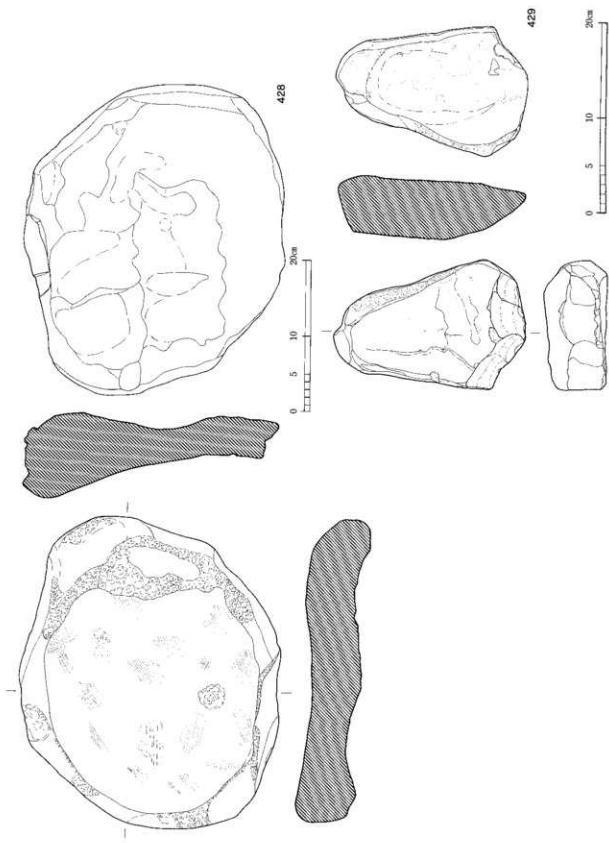
第108図 縄文時代早期の石器 (43)



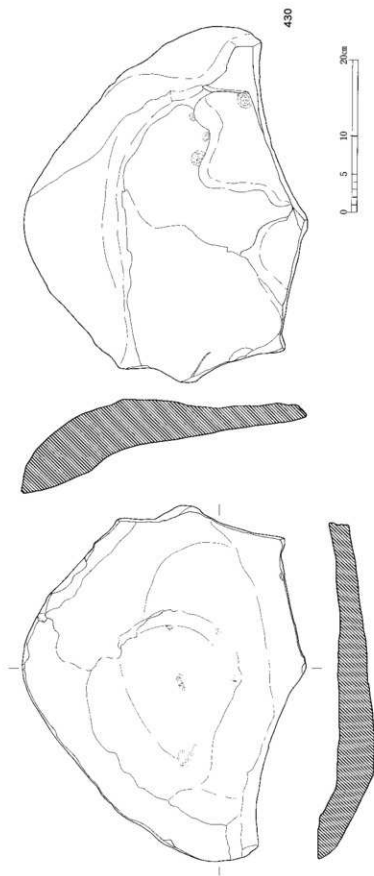
第109図 縄文時代早期の石器 (44)



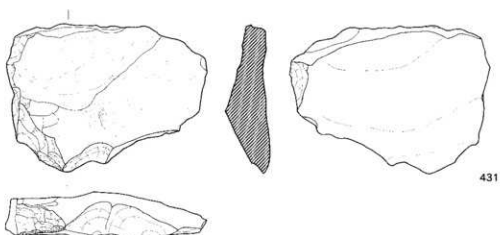
第110図 縄文時代早期の石器 (45)



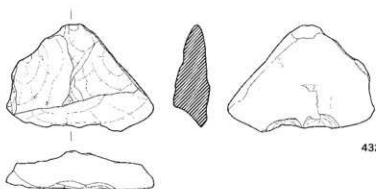
第111図 縄文時代早期の石器 (46)



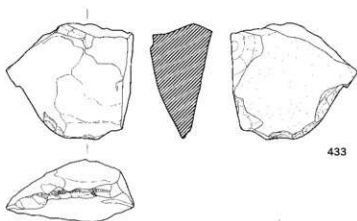
第112図 縄文時代早期の石器 (47)



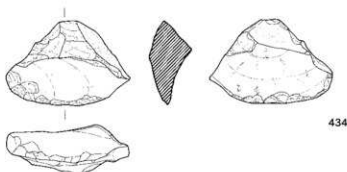
431



432



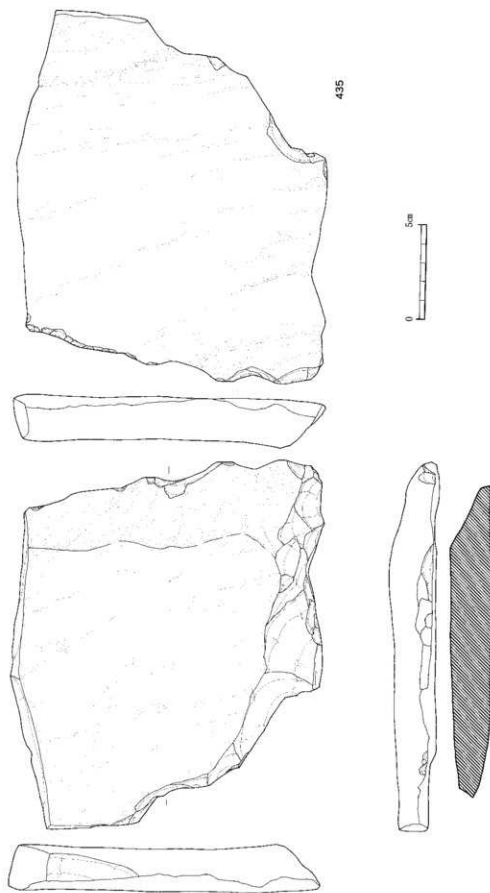
433



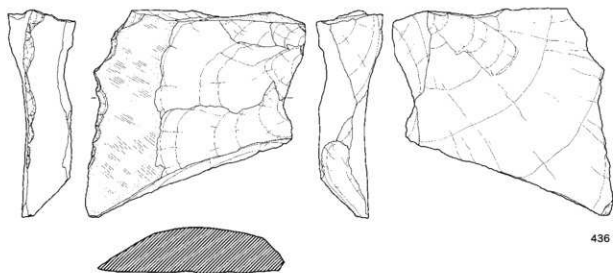
434



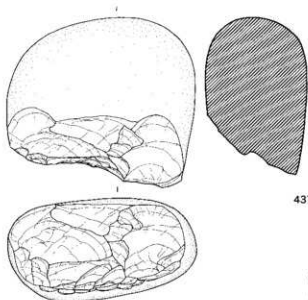
第113図 縄文時代早期の石器 (48)



第114図 縄文時代早期の石器 (49)



436



437



第115図 縄文時代早期の石器 (50)

磨石・敲石 (第90～99図367～406)

367～369は不整形な自然礫を敲石に利用しているものである。三角形状でその鋭利な頂点部分に敲打痕がみられる。長さ15～17cm程度で重さが820～960gである。368には磨痕もみられる。

371～376も不整形なものである。側縁部分に敲打痕が残る。敲打により、欠損しているものも多い。373、376には磨痕もみられる。

370は長さ9cm弱の棒状を呈し、その両端に敲打痕が残る。

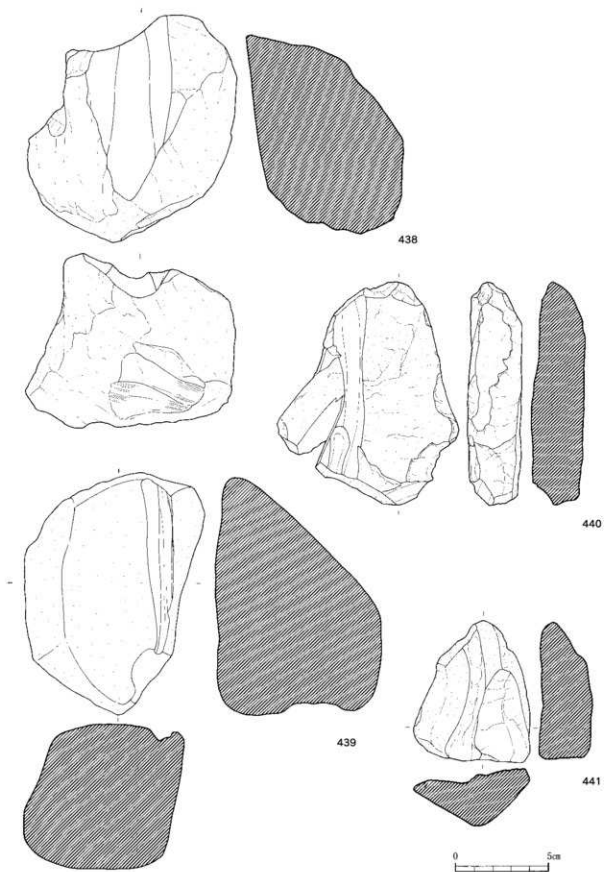
377～382は円礫近い形状で、側縁に敲打痕による

欠損が顕著にみられる。長さは8～13cm程度である。382は片面に磨痕が残る。

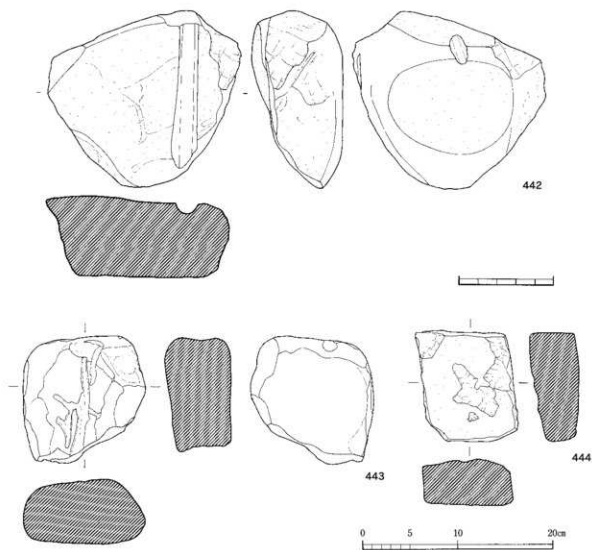
383～403は平面形が円形のものである。長さが9～14cmで、長幅比は397が1.80であるが、ほかは1.00～1.46である。重さは300～1300gでややばらつきがある。

404は小形の敲石で、下面と片面に敲打痕が残る。

405、406は小形の磨石・敲石である。長さ7cm程度で、長幅比は1.50程度である。



第116図 縄文時代早期の石器 (51)



第117図 縄文時代早期の石器 (52)

砥石 (第99図407～409)

407は平面形が方形のもので、1面に磨痕が顕著に残る。

408は平面形が三角形を呈するもので、3面ほど磨痕がみられる。稜線はつぶれ、2面に敲打による窪みがある。

409は自然礫を利用したもので、半円形を呈し、両面に磨痕が残る。

石皿 (第100～112図410～430)

石皿はいずれも砂岩製である。

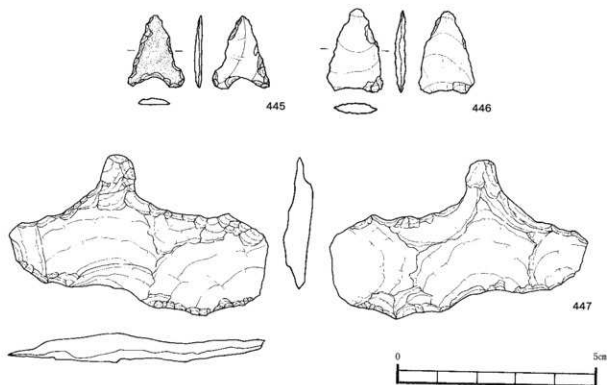
410はF-12区から出土した。表裏に部分的に磨痕が残る。表面はやや窪んでいる。

411はD-13区から出土した。板石を使うが、縁

辺を打ち欠いている。表裏面に部分的に磨痕が残り、両面ともやや窪んでいる。

412、414はH-11区から出土した。412はやや大きな円礫で、表裏と左側面が全面的に磨かれている。表面はわずかであるが溝状に窪んでいる。414は断面が台形状の板石で、裏面の中央付近に磨痕が残る。

413、415～417、419～421、425、427、428、430はD-13区から出土した。413は薄い板石で、窪んでいる表面の中央付近に磨痕が残っている。415も薄いものであるが、表面には意識的にくぼみが作られている。416は表面の中央がわずかに窪みそこに磨痕が残る。裏面には敲打痕がみられる。417は自然にくぼみをもつ石を利用している。磨痕はあまりはつき



第118図 縄文時代早期の石器 (53)

りしないが、縁辺部に敲打痕がみられる。419、420は扁平な板石で表面がわずかに窪み、磨痕が残っている。421はやや小形で表面と側面に顕著に磨痕がある。表面に溝状のくぼみがある（有溝砥石か?）。くぼみの幅は1cm強である。425はやや大きめの扁平な円礫で表面がわずかに窪んでいる。全面的にひびが入り磨痕は不明瞭である。427は断面三角形の板石であるが両面に磨痕がみられる。428は両面が窪んでいるもので、表面の磨痕は著しいものである。磨面の周辺には敲打痕が巡っている。磨面の中にも敲打痕が観察される。430は薄い板石で表面が窪んでいる。部分的に磨痕が残っている。裏面には敲打痕がある。

418はF-13区から出土した。扁平な板石で断面形は表面がやや窪んだ四角形である。節理で2つに割れている。裏面にまだら状に磨痕が残っている。

422はC-14区から出土した。やや厚さのある板石で両面とも平坦で磨痕が残っている。

423はD-14区から出土したが、扁平で小さいものである。部分的に磨痕が残り、側面に敲打痕が残っている。

424はG-11区から出土した。やや厚さのある平面形が正方形気味の板石で、両面に磨痕が残る。側辺

に敲打痕が残る。

426はI-10区から出土した。角柱状の素材で裏面全体に磨痕がある。表面は節理などで突出した部分だけ磨痕が残っている。

429はE-13区から出土した。小形の素材である。裏面に磨痕が顕著である。側面に敲打痕が、下部は打ち欠いており、礫石に転用したものと思われる。

礫石 (第113～115図431～437)

431はA-10区から出土した。自然面を残した砂岩の剥片の片側下端を打ち欠いている。一部、磨痕が観察できる。

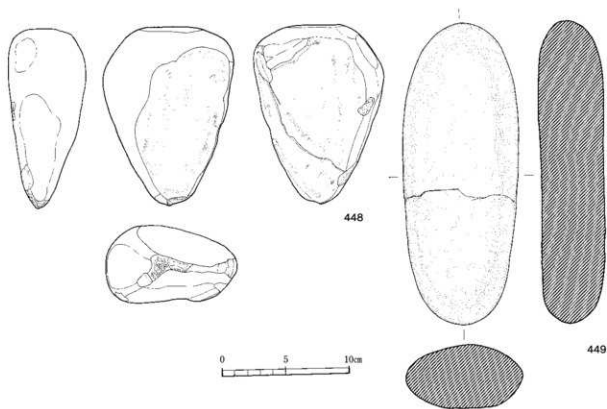
432、434はI-10区から出土した。平面形と断面が三角形状で、その下端に細かい剥離がみえる。部分的に磨痕が残っている。

433はF-13区から出土した。断面が三角形状でその下端を打ち欠く。端部はつぶれている。

435はB-11区から出土した。大きめの砂岩の板石を下端と左側面から打ち欠いている。

436はH-11区から出土した。砂岩の板石で、一部に磨痕が残る。

437はC-14区から出土した。砂岩の円礫の片側を打ち欠いている。



第119図 縄文時代早期の石器 (54)

有溝砥石 (第116, 117図438~443)

いずれも砂岩製である。

438, 439はH-11区から出土した。438は厚めの礫を素材とする。表面に2段になる溝がある。上側の広い溝は幅が約5cmで、下側の狭い方は断面がU字状で幅が約2cmである。側面にも溝状の磨痕が残る。439も厚めの礫を素材とする。表面に断面がV字状で幅が約1.4cmの溝がある。

440, 441はF-12区から出土した。440, 441はやや薄い石を素材とし、溝は屈曲している。溝の断面はU字状で幅は1~1.7cmである。

442もF-12区から出土した。やや厚めの礫を素材とし表面にU字状で幅約1.2cmの溝がある。また、下面の上端にもU字状の溝がある。

443はI-10区から出土した。厚めの礫を素材とする。やや不明瞭であるが、幅数ミリで、浅い溝がみえる。

台石 (第117図444)

444はE-13区から出土した。表面の中央付近に

くぼみがある。

ベツストーン

図化していないが、D-14区で2点確認した。砂岩の小円礫で、重さは24.1g, 16.7gである。

(IV層)

IV層は薩摩火山灰層に比定しているため、なおかつブロック状にしか堆積していない。したがって、本来は無遺物層である。B-10・11区に限り、ⅢまたはV層の境界が曖昧であったものをIV層として取り上げてしまった。整理段階において、レベルで判断する手法も考えたが、地形を把握できない面があった。したがって、この項で取り上げることにした。

打製石鏃、石匙、磨石・砥石が出土している。

打製石鏃 (第118図445, 446)

445, 446はいずれもホルンフェルスを素材とし、未製品である。

石匙 (第118図447)

447は石鏝と同じくホルンフェルス製で、側辺の調整剥離がまだらである。

磨石・敲石 (第119図448, 449)

448は平面三角形で、その鋭利な端部に敲打痕が残る。2面に磨痕が残る。

449は長楕円形状の磨石である。長さ23.8cmと長く、重さも1772gある。

(C地区)

C地区からは、打製石鏝、磨製石鏝、石槍、石錐、楔形石器、スクレイパー、石匙、磨製石斧、穿孔礫、磨石・敲石、有溝石製品、砥石、石皿、礫器、石核、剥片、円盤状石器が出土した。J-10区、N~Q-10区、N-13区の3区域に集中域があり、これで細区分できる。

石器製作時のチップはO・P-10区に多数出土している。チップの素材は安山岩(サスカイト)、頁岩、黒曜石(針尾系、姫島産ほか)、ホルンフェルス、砂岩である。

打製石鏝 (第120, 121図450~475)

素材には安山岩(サスカイト)、黒曜石(姫島産、針尾系ほか)、ホルンフェルスがある。J・K-10区、L-9区、N・O-10区、O-12区、P・Q-9・10区から出土している。

450は長さ2.3cm、長幅比1.21で側辺がわずかに内湾し、基部はわずかに窪んでいる。

451は長さ2.0cm、長幅比1.82で側辺が逆刺付近で屈曲し、逆刺が鋭い。基部はやや鋭角的に入る。

452, 455, 462は剥片剥離の状態が残っている。側辺は丸みをもち、基部は浅いU字状の抉りとなる。453は先端が欠損するが、ほぼ正三角形のものである。側辺はやや丸みをもち、基部は大きく抉り、逆刺は鋭角のである。

454, 456は逆刺が欠損している。大きくU字状に抉りが入ると思われる。

457は逆刺の一方が欠損している。側辺は直線的で、基部は大きく鋭角のな抉りで、逆刺も鋭くなる。

458は長さ2.1cmで、先端が細く、側辺はやや内湾きみである。基部は大きく抉り、逆刺は細くなる。

459は逆刺の一方が欠損している。鋸歯状の側辺で、逆刺付近で屈曲し端部は鋭角となる。

460はホルンフェルス製で、剥離が不明瞭である。長さ2.2cm、長幅比1.16で逆刺が鋭角で、基部も大きく抉りが入る。

463は先端と逆刺の一方が欠損している。

461, 464, 465は調整剥離が不十分で未製品である。

466~468は縁辺が内湾気味で、逆刺の部分で屈曲する。長さは3cm前後である。

469, 470, 472, 473は欠損品であるが、やや長めのものである。側辺は直線的で基部は平坦で、浅くU字状に抉りかはいる。

471, 474は長さが2.8cm程度で側辺がやや丸みをもち、基部はわずかにふくらみをもち、大きくU字状に抉りかはいる。

475は長さ4.4cm、長幅比1.76で、最も長く、縁辺は直線的で、平坦な基部にU字状の抉りかはいる。

磨製石鏝 (第121図476~479)

いずれも頁岩製である。

476は両面を研磨するが、側辺を剥離している。基部はわずかに窪んでいる。

477は側辺も研磨し、後縁が残る。二等辺三角形で、基部は平坦である。

478, 479は穿孔があるもので、どちらもN-13区から出土した。478は先端が欠損しているが、長めの二等辺三角形を呈している。全面研磨し、基部はわずかに窪んでいる。479は短めの二等辺三角形で、全面を研磨し、側辺部に後縁が明瞭である。穿孔も大きく目である。

石槍 (第122図480, 481)

480は欠損品で先端部分のみである。481は完形品で長さ約7cmである。調整剥離は片面のみ顕著である。

石鏝 (第122図482)

482は姫島産黒曜石製で、基部の両側辺を剥離する。鋸部は極めて短い。

楔形石器 (第122図483, 484)

どちらも安山岩製である。483は2cm程度の短いもので、上端は片面のみ剥離する。484は比較的長めのものである。

スクレイパー (第122, 123図485, 486)

どちらも安山岩製で基部に剥離を施すものである。

石匙 (第123図487, 488)

487は極めて小形のもので、つまみをもつ形状と剥離から石匙に分類したが、全く異なった機能をもつかもしれない。

488は欠損品である。安山岩製で、自然面を残す。

磨製・打製石斧 (第124図489~492)

いずれも頁岩製である。

489は刃部に磨痕が残る。側縁は剥離する。片面に装着痕と思われる痕跡が残る。

490は刃部が欠損している。両面に磨痕が残る。基部と側縁は剥離する。側縁はさらに敲打により成形している。

492は刃部で、磨痕がわずかに残っている。

491は欠損しているが、打製石斧と判断した。片面

にのみ剥離が認められる。

穿孔礫 (第124図493)

493は長さ10cm、重さ290gの礫で、その一端に径1cm弱の穿孔をあけるものである。何らかの鏝であろうか。

磨石・敲石 (第125～128図494～514)

494、495はN-13区、497はP-10区、498はN-10区から出土した小形品である。494は長楕円形を呈し、両端に敲打痕が、両面に磨痕が残る。495、497は正円に近い平面形であるが、495は断面も厚みである。498はやや不整形な円礫で、下端が欠損しているもの、表面の磨痕は明瞭である。

496はO-11区から出土した中形品である。ほぼ正円で断面も割合厚い。両面に磨痕、側面に敲打痕が残る。

499～505は径が10cmを超えるものである。平面がほぼ正円形である。502は欠損品である。いずれも出土区が異なっている。

506～514は不整形な礫を素材とするもので、J・N・O・P-10区から出土した。508～512は小形である。512は風化により脆かったため、OHにより強化処理を行った。507、513、514は大形品で、側面に敲打が残っている。

有溝石製品 (第129図515)

515はP-10区から出土したもので、欠損しているが、一部に断面がU字状を呈する溝状の窪みがあり、そこに擦痕が認められた。

砥石 (第129図516、517、第133図523)

516はQ-10区から出土した。欠損品であるが、極めの細かい砂岩を素材とし、磨痕が明瞭である。

517はJ-10区から出土した。砂岩の礫で、表は凸面、裏は平面である。両面に磨痕が残る。

523はN-10区から出土した。角柱状で、その小口面にのみ磨痕が残っている。

石皿 (第130～134図518～522、524～526)

518、519はN-10区から出土した。518は断面四角形の砂岩を使用し、表全面に磨痕があり、わずかに窪む。519は断面が五角形状の砂岩で、両面に部分的に磨痕が残る。表面には敲打痕もみられる。

520、526はP-10区から出土した。520は両面に敲打痕があり、台石としても利用されている。526は両面に磨痕が残るが、節理による、微妙な凹凸で磨きの程度が部分的に異なっている。

521はQ-9区から出土したが、3つに割れている。扁平な板石で、表面に磨痕が顕著で、わずかに窪んでいる。

522はO-10区から出土した。扁平で比較的小さな板石で両面に部分的に磨痕が残る。

524はJ-10区から出土した。円礫で磨痕が残る面が広く、裏面が狭くなっている。表面はやや窪む。

525はP-9区から出土した。やや厚い砂岩で、表面に磨痕が、裏面に敲打痕が残る。

礫器 (第135、136図527～532)

砂岩製であるが、いずれも出土区が異なっている。

527は大きな砂岩の板石の一端を打ち欠くものである。528～532は比較的小きなものである。いずれも板石状のもの一端を打ち欠いている。530～532は平面形が三角形を呈しているものである。

石核 (第137図533)

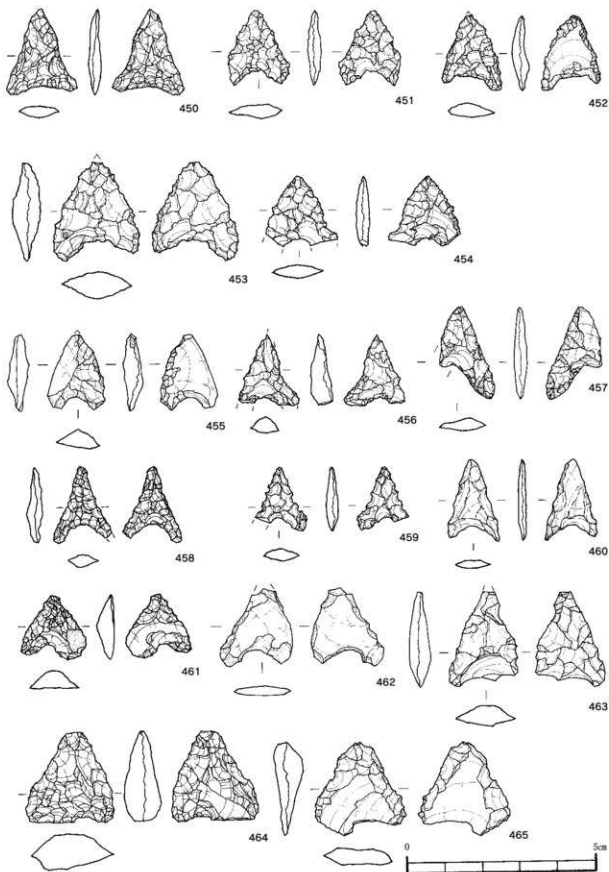
533はQ-10区から出土したもので凝灰岩製である。打面には節理面がみえる。

剥片 (第137図534)

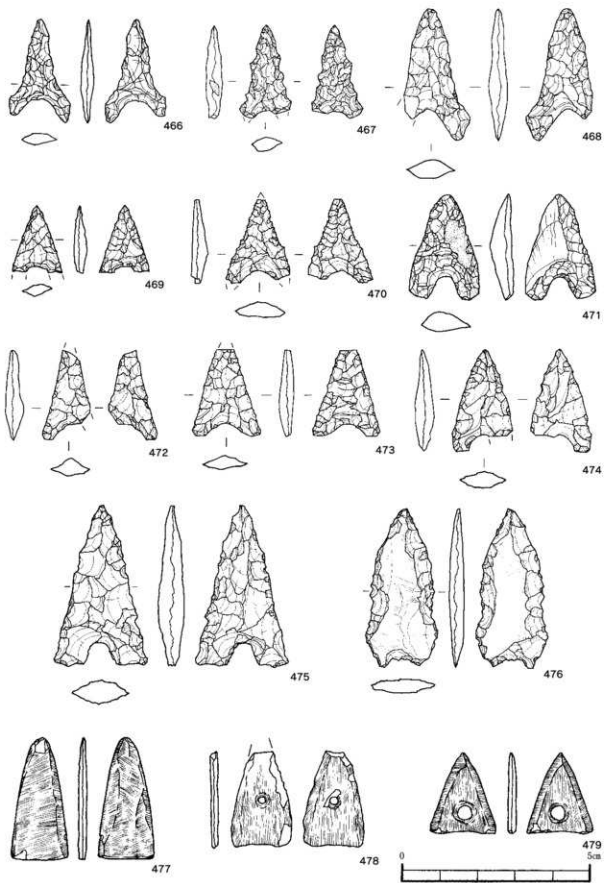
534はQ-10区から出土した。砂岩製である。

円盤状石器 (第137図535)

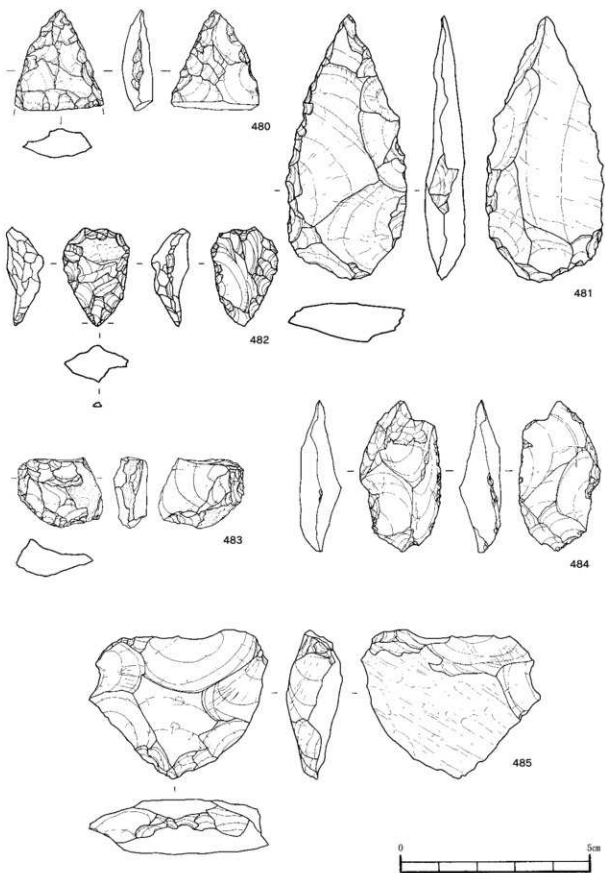
535はO-13区から出土したもので、砂岩の円礫を打ち欠き、縁辺を剥離して円形に整形する。裏面は自然面を残す。



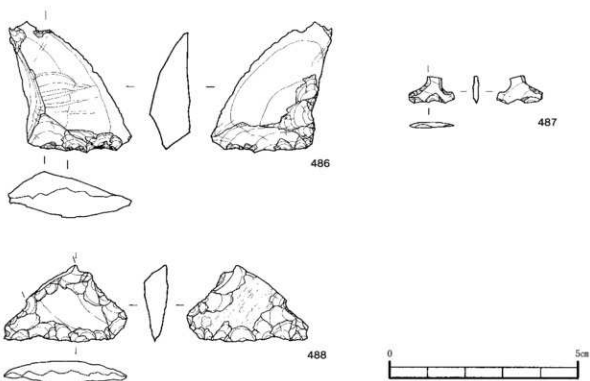
第120図 縄文時代早期の石器 (55)



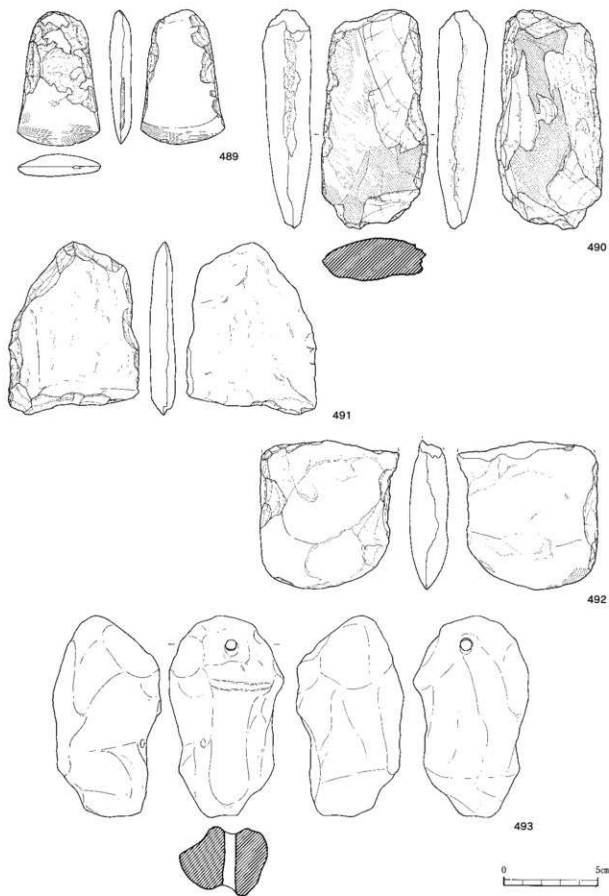
第121図 縄文時代早期の石器 (56)



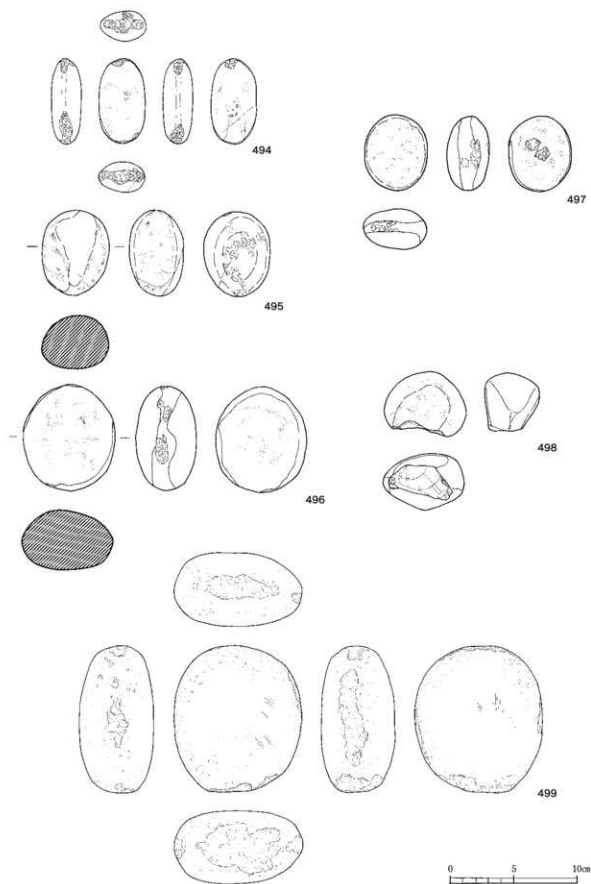
第122図 縄文時代早期の石器 (57)



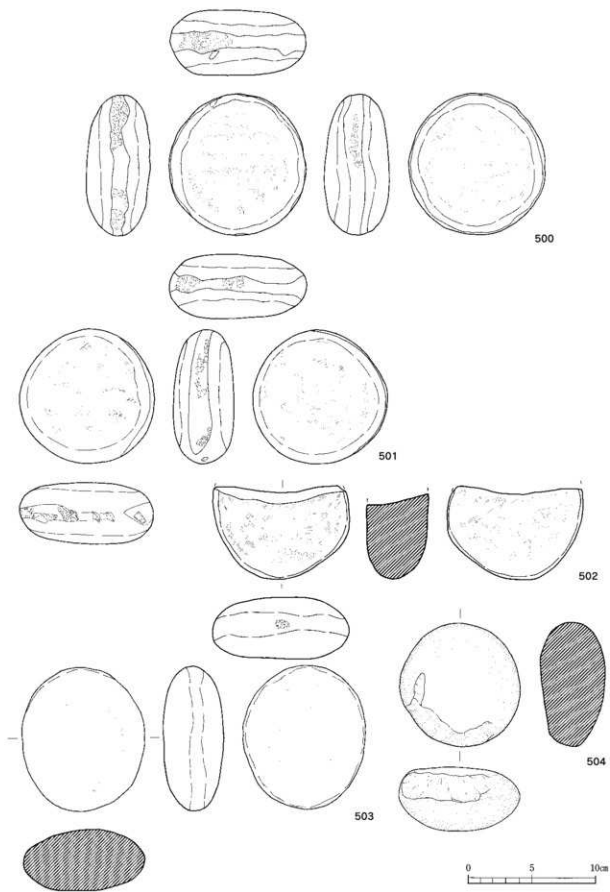
第123図 縄文時代早期の石器 (58)



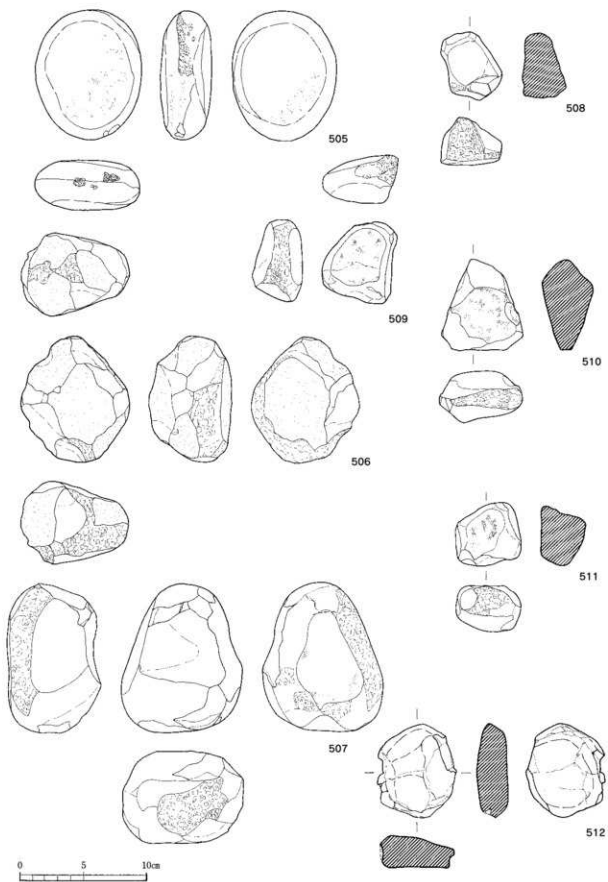
第124図 縄文時代早期の石器 (59)



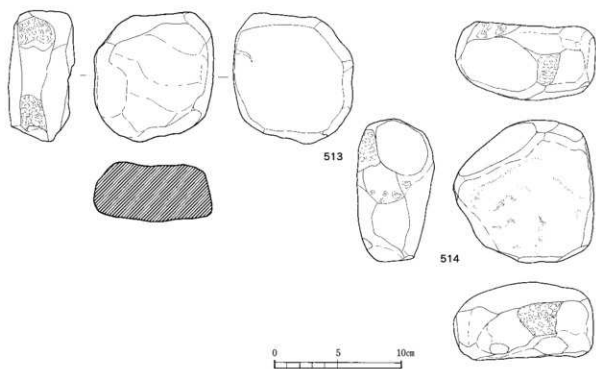
第125図 縄文時代早期の石器 (60)



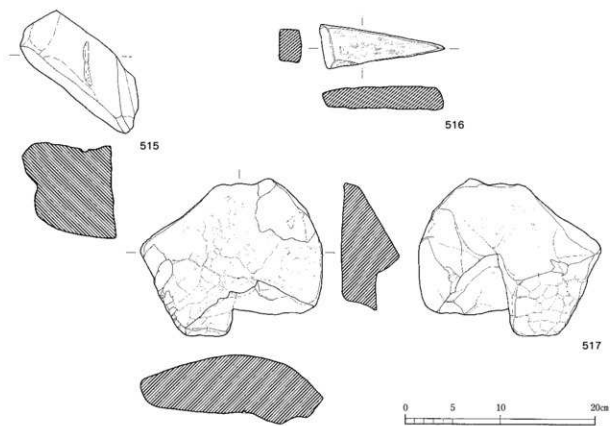
第126図 縄文時代早期の石器 (61)



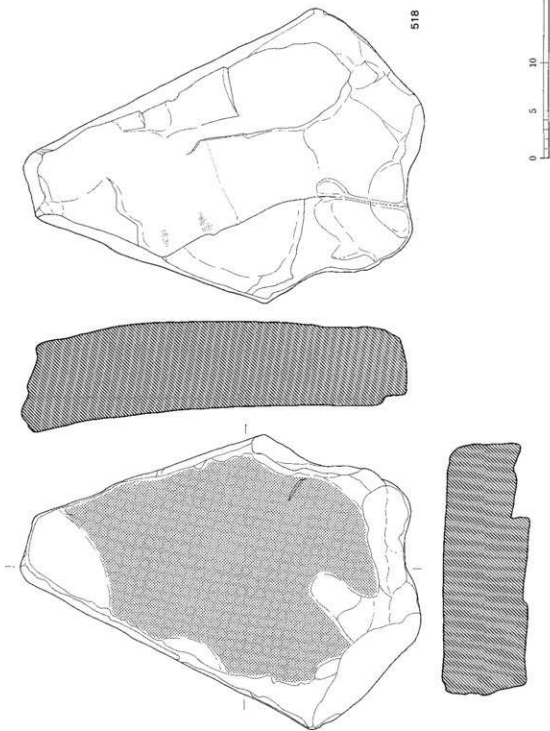
第127図 縄文時代早期の石器 (62)



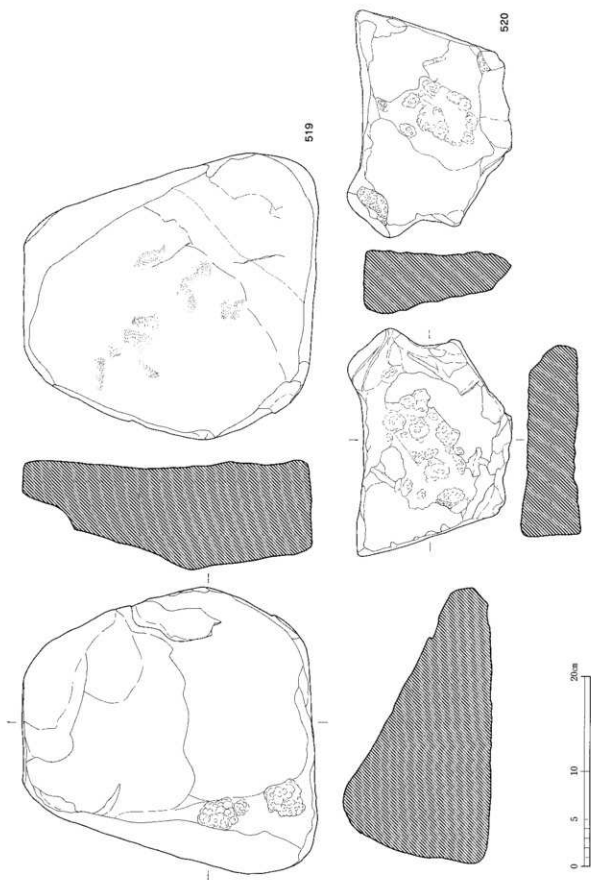
第128図 縄文時代早期の石器 (63)



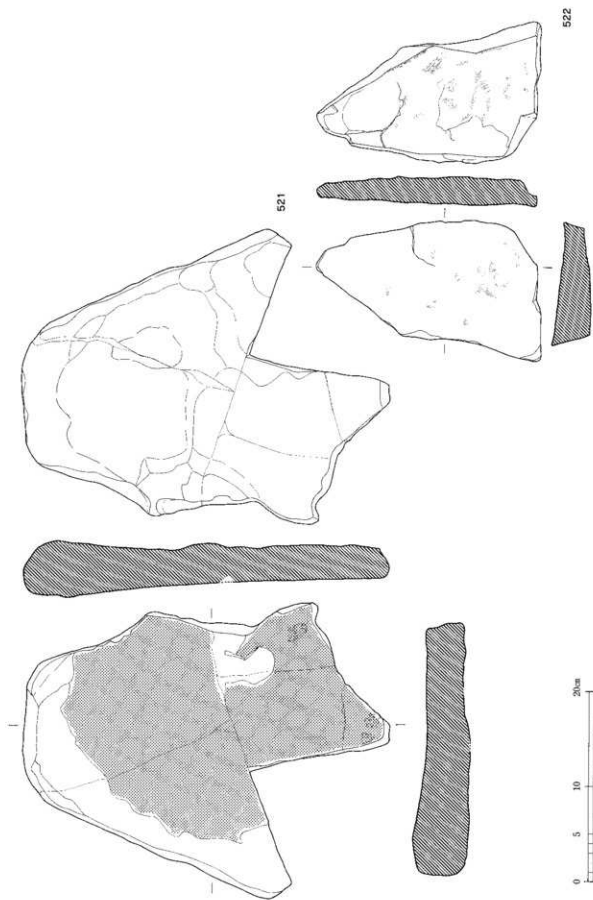
第129図 縄文時代早期の石器 (64)



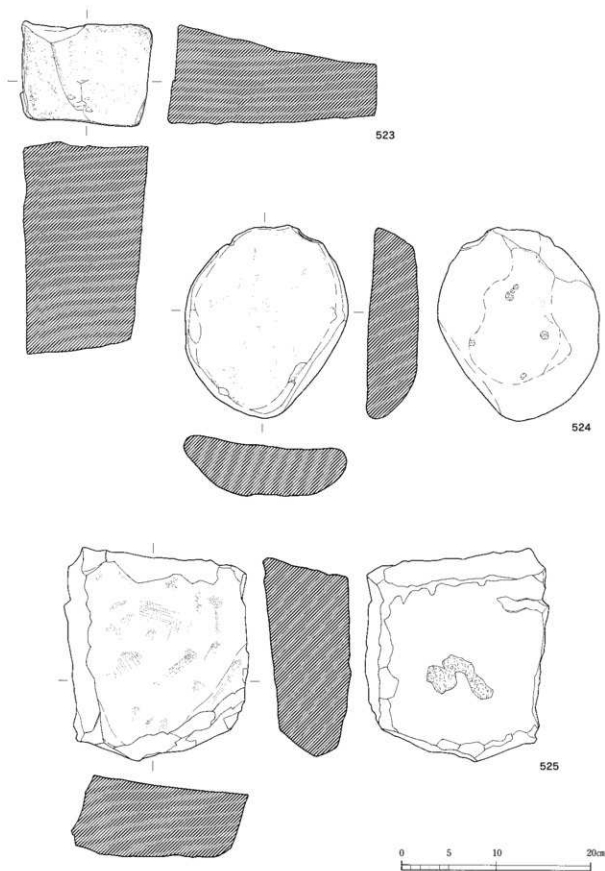
第130区 縄文時代早期の石器 (65)



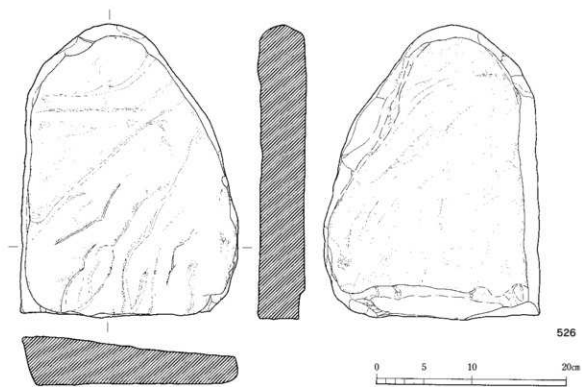
第131図 縄文時代早期の石器 (66)



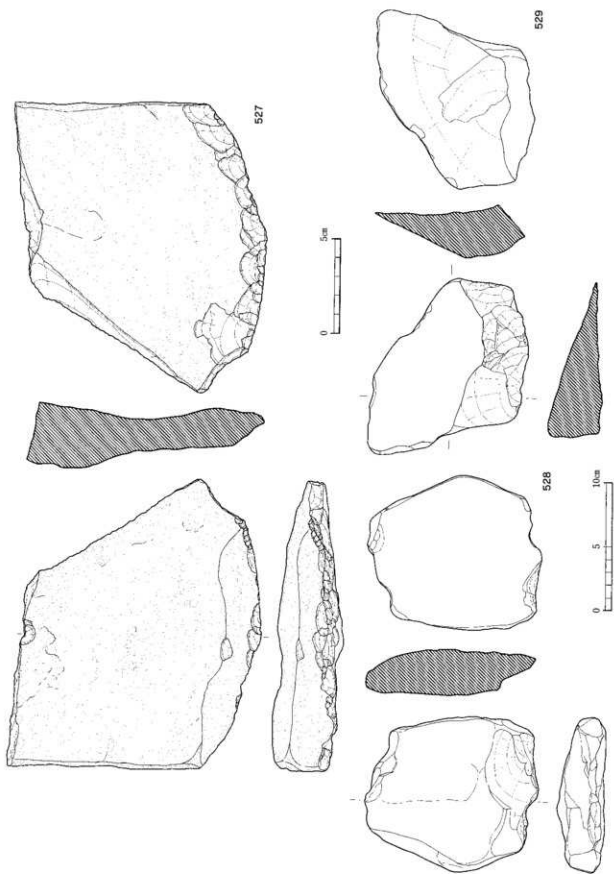
第132図 縄文時代早期の石器 (67)



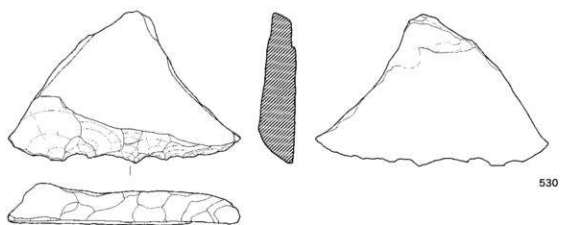
第133図 縄文時代早期の石器 (68)



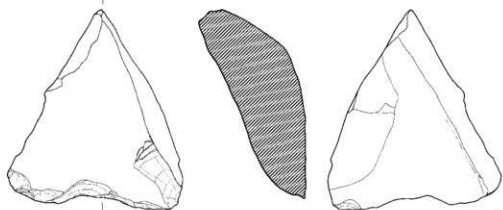
第134図 縄文時代早期の石器 (69)



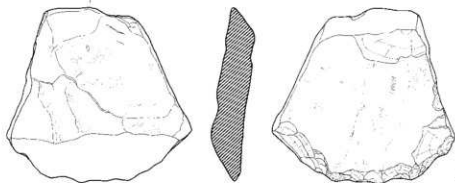
第135図 縄文時代早期の石器 (70)



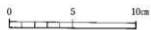
530



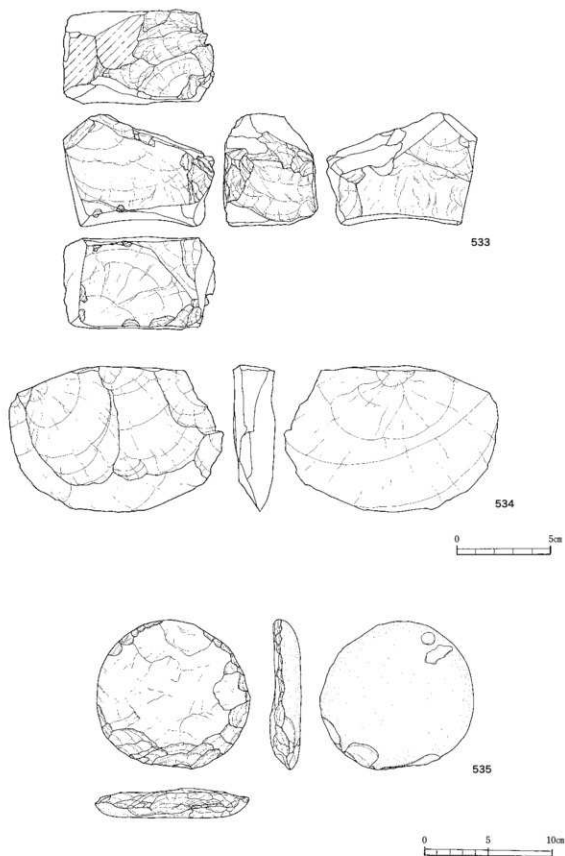
531



532



第136図 縄文時代早期の石器 (71)



第137図 縄文時代早期の石器 (72)

第6節 縄文前期

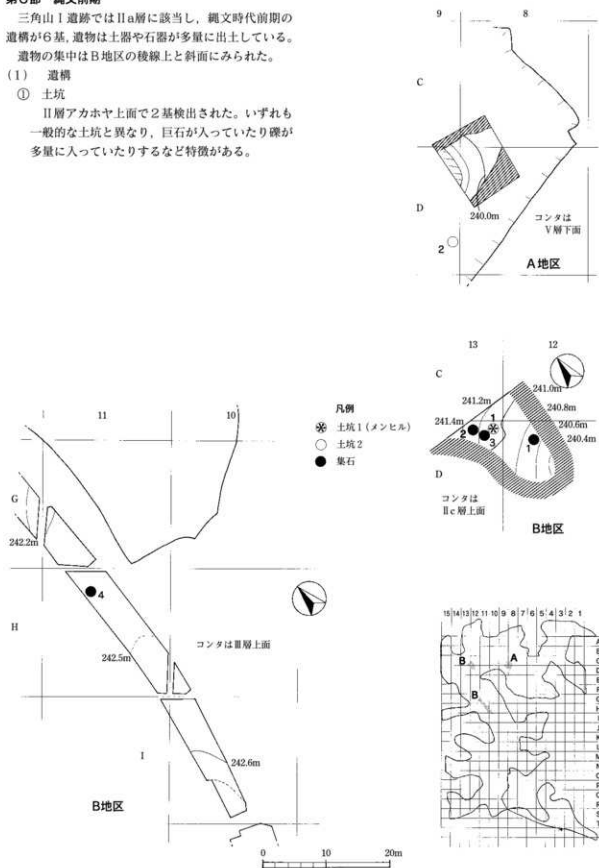
三角山1遺跡ではIIa層に該当し、縄文時代前期の遺構が6基、遺物は土器や石器が多量に出土している。

遺物の集中はB地区の稜線上と斜面にみられた。

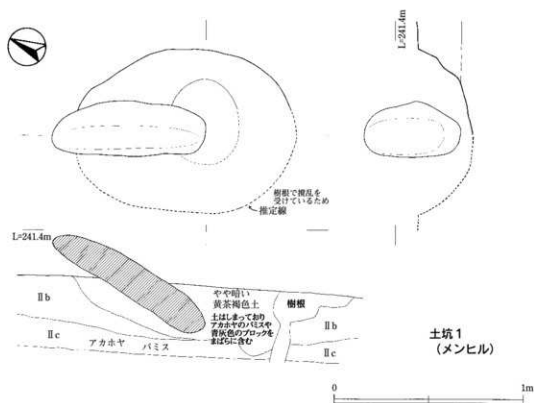
(1) 遺構

① 土坑

II層アカホヤ上面で2基検出された。いずれも一般的な土坑と異なり、巨石が入っていたり礫が多量に入っていたりするなど特徴がある。



第138図 縄文時代前期遺構配置図



第139図 土坑1・メンヒル?

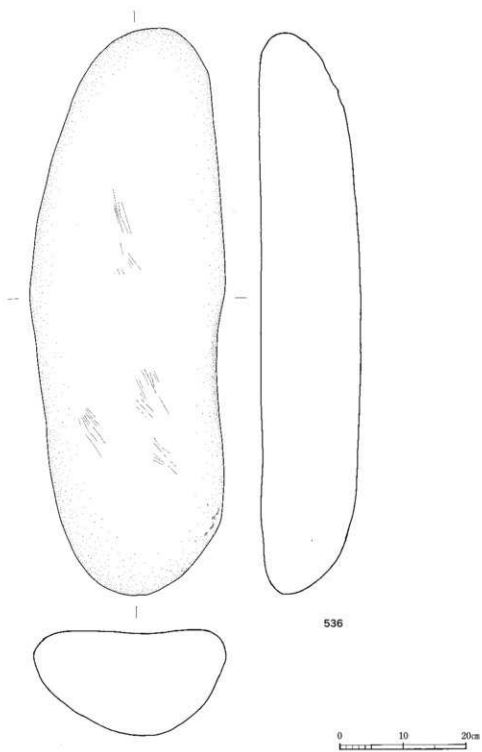
土坑1・メンヒル? (D-13区)

長径118cm・短径88cm・検出面からの深さ35cmで平面形は楕円形をしている。埋土はやや暗い茶褐色土でアカホヤのバミスや青灰色のブロックをまばらに含む。後述の巨石が出土し、周囲を精査したところ土坑が検出された。巨石は長楕円形で、土坑の中に斜めに入り込んでいた。土坑の中に一段低い掘り込みがあることから、当時は立っていたものと考えられ、メンヒルの可能性が高い。この場所は水場になる谷頭に当たり、周囲には同時期と考えられる集石も点在している。以上のことから、本遺構は祭祀との関連性が高いものと考えられる。

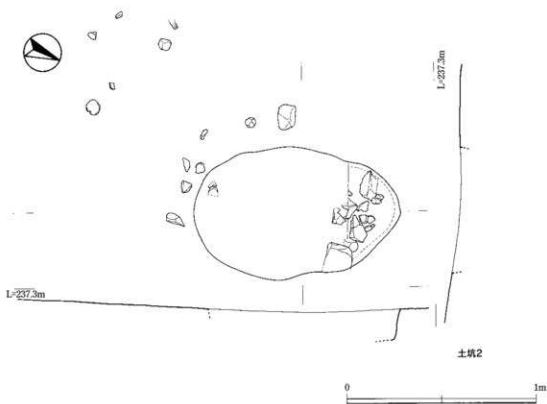
536は石皿である。長さ86cm重さ69.1kgの長楕円形砂岩で、あまりの大きさに「大石様」の愛称が付けられた。出土時は磨面のあるやや偏平面を下にした状態であった。形態や表面の状況から海岸部で採取され、ここまで運ばれたものと考えられる。

第13表 縄文時代前期の土坑観察表

挿図番号	番号	検出区	床面レベル(m)	大きさ(cm)	検出面からの深さ(cm)	備考(遺構内遺物)
139	1	D-13	240.74	118×88	35	メンヒルの可能性あり(長楕円形の巨大石皿)
141	2	D-9	237.02	109×70	16.6	埋土は炭化物が多い(多数の赤化した砂岩礫)



第140図 土坑1の遺構内遺物



第141図 土坑2

土坑2 (D-9区)

長径109cm・短径70cm・検出面からの深さ16.6cmで平面形はややゆがんだ楕円形をしている。周囲が黄褐色土であるのに対し、埋土は暗茶褐色土で炭化物を多く含む。半掘して、赤化した砂岩礫が多量に入っているのを確認したところで埋め戻した。後日再調査する予定だったが、諸般の事情により実行できなかったのは残念である。

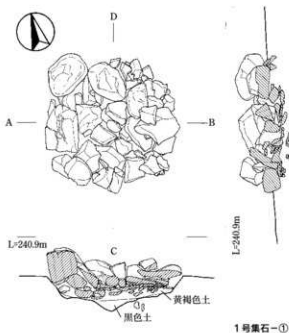
第14表 縄文時代前期の集石観察表

4以外は熱破砕や赤化した砂岩礫にて構成

挿図番号	分類	地区	検出区	礫数	床面レベル(m)	大きさ(cm)	掘り込み(cm)			備考(遺構内遺物)	
							有無	大きさ	深さ		
142	1	3	B	D-12	372	240.51	83×75	有	73×73	18	(磨石6)曾型式に伴う
	2			D-13	85	241.22	77×60	有	72×63	12	周囲は曾畑と礫B
145	3	3		D-13	44	241.11	68×47	有	102×(85)	19	礫B, ¹⁴ C補4600±70
	4			H-11	25	242.42	90×86	有	90×72	31	(礫片) ¹⁴ C補4660±40

第15表 縄文時代前期の遺構内石器観察表

挿図	地区	出土区	番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
140		D-13 土坑1	536	石皿	砂岩	91	31	16	69100	磨面1,メンヒルの可能性あり
			537	磨石	砂岩	11	9.3	5.8	840	磨面2,殿打痕2
143	B	D-12 1号集石	538	磨石	砂岩	11.7	10.7	5.1	830	磨面2,殿打痕1,やや赤化,一部剥離
			539	磨石	硬質砂岩	9	8	6.8	700	磨面2,殿打痕は全体に分布,一部剥離
144			540	磨石	硬質砂岩	15	9.8	5.7	870	磨面2,一部剥離
			541	磨石	砂岩	12.1	10.2	5.4	932	磨面2,一部剥離,炭化物付着
			542	磨石	砂岩	11.7	10.2	3.8	570	磨面1,殿打痕1,赤化し剥離が著しい



1号集石-①

② 集石

集石は4基、B区域で検出された。石材は砂岩が主である。タイプは集中密度の高いものがほとんどで、いずれも掘り込みを持つ3類である。

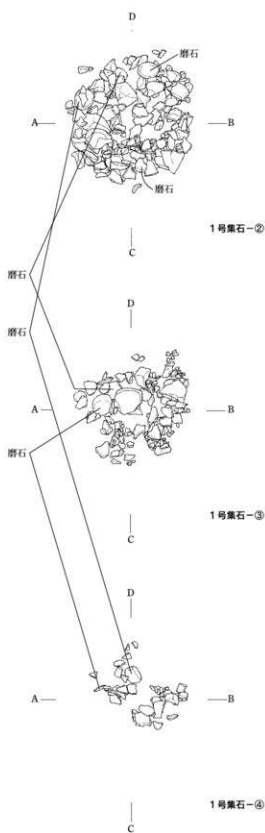
1号集石 (D-12区) 3類

やや傾斜した面を掘り込んで設置しており、掘り込みの中にびっしりと礫が詰め込まれている状態である。直径3～25cmの赤化し熱破砕した円礫や角礫で構成されており、炭化物が付着したものも見られる。また、下方には熱破砕した小礫が敷き詰められたようになっていたが、意図的なものかどうかは不明である。この点については、H-11区の縄文早期12号集石が類似している。なお、周囲の遺物出土状況から、本集石は曾畑式土器の時期に形成されたものと考えられる。

537・538・539・540・541・542は磨石である。

2号集石 (C-13区) 3類

ゆるい傾斜面をやや浅く掘り込んで設置しており、掘り込みの中に礫が詰め込まれている状態である。ただし、図右半分の土壤は現代の耕作により削平されている。直径2～25cmの赤化し熱破砕した角礫で構成されている。周囲の出土土器は曾畑式と轟B式が混在しており、どの時期に属するのかは判然としない。

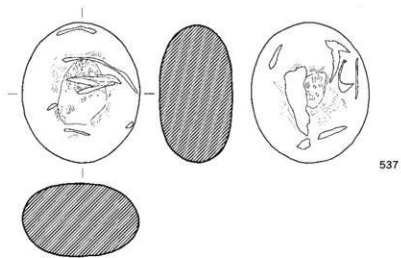


1号集石-②

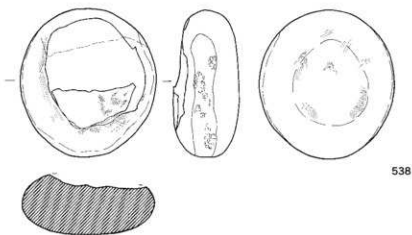
1号集石-③

1号集石-④

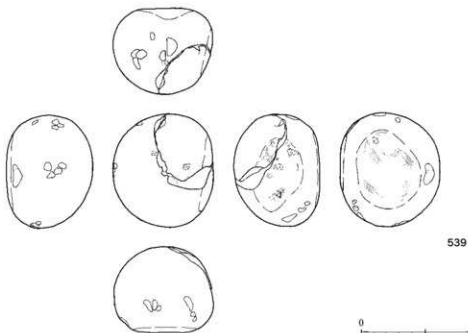
第142図 集石 (1)



537



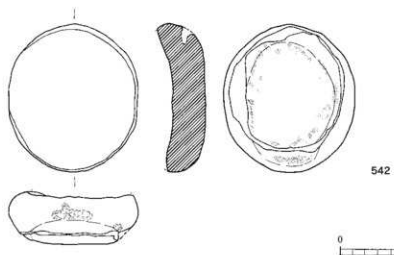
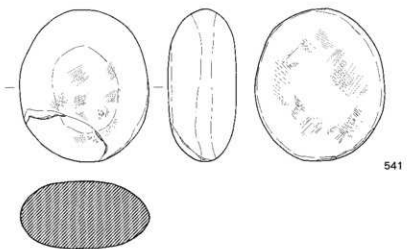
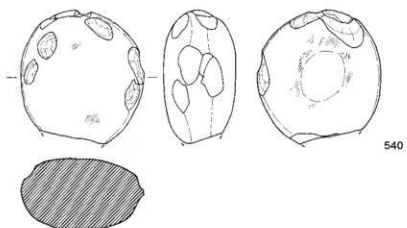
538



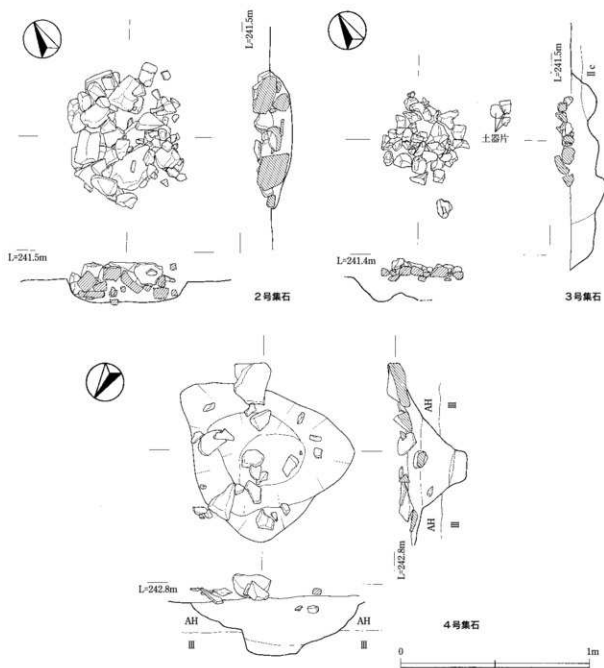
539



第143図 集石(2)遺構内遺物



第144図 集石（3）遺構内遺物



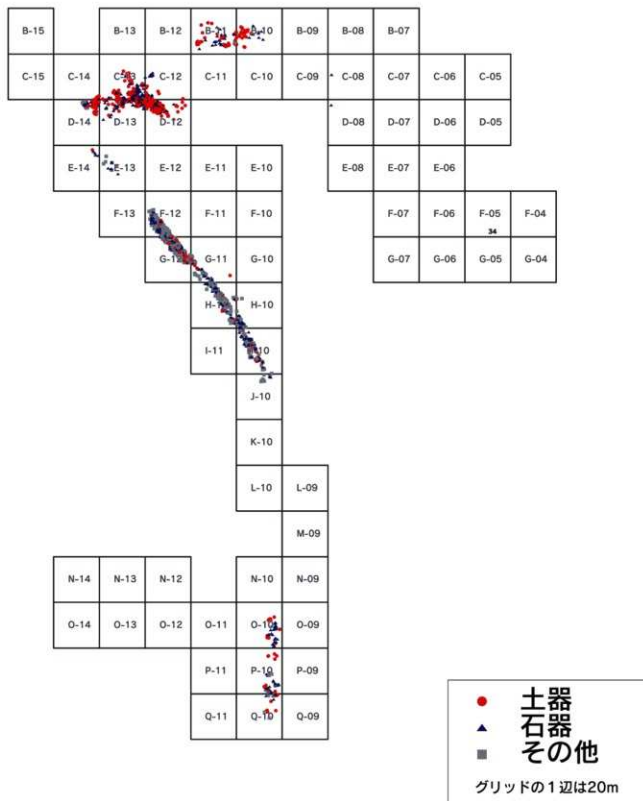
第145図 集石（4）

3号集石（D-13区）3類

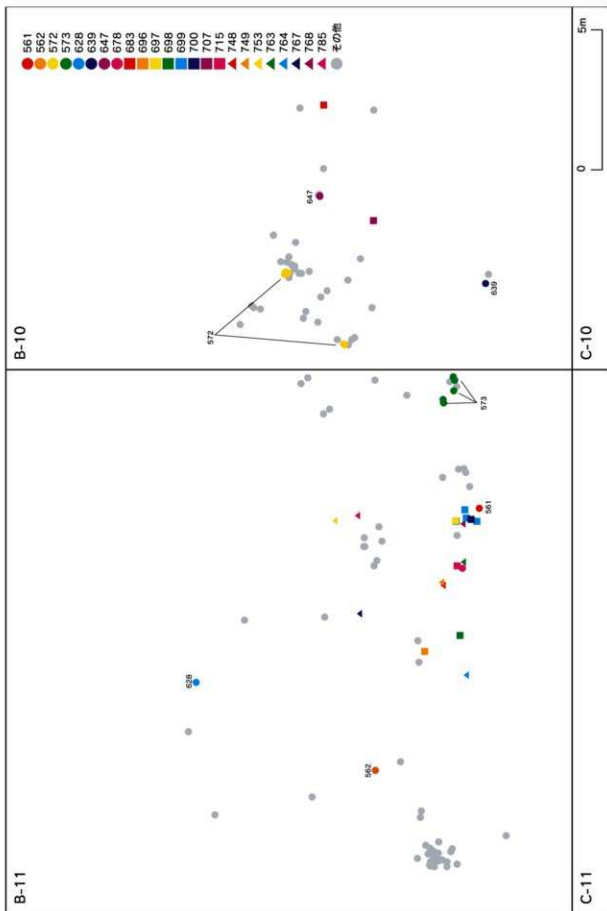
ゆるい傾斜面を広く掘り込んで設置しており、掘り込みの中心に礫が集められている状態である。埋土には炭化物が多く含まれ、周囲の土よりも黒色が強い。直径3～12cmの赤化し熱破砕した角礫で構成されているが、細片は少ない。すぐ近くにはほぼ同レベルで藤B式土器が出土しており、この集石も同時期に属するものと考えられる。なお、炭化物は ^{14}C 年代測定の結果 4600 ± 70 年BP（補正 ^{14}C 年代）ということが判明している。また、暦年代交点はBC3355の値を示している。

4号集石（H-11区）3類

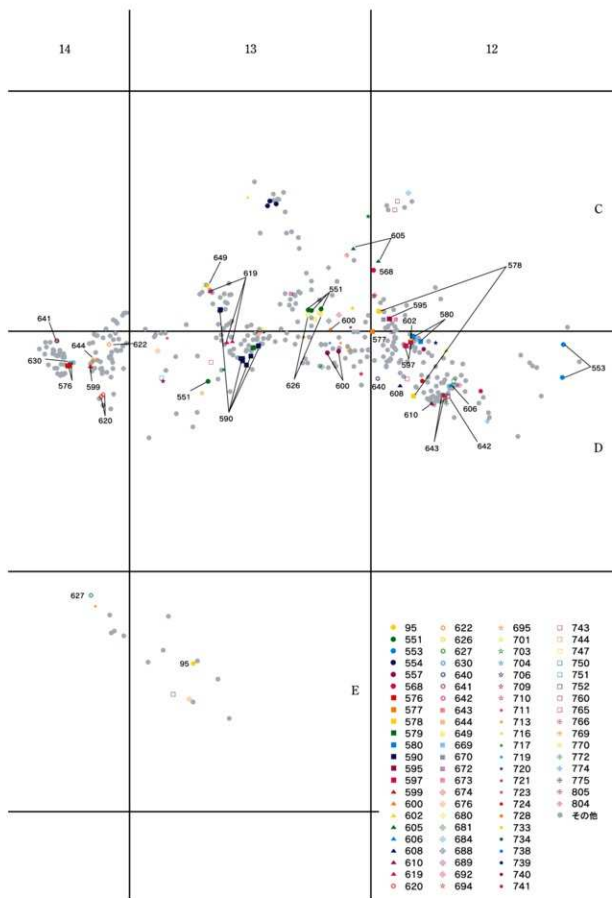
ほぼ平らな面を深く漏斗状に掘り込んで設置しており、掘り込みの上部に砂岩礫がバラツキ入っている状態である。この集石の礫は他の集石と違い赤化したり熱破砕したりしていない。粗い石器を作るために集めた石材を、何らかの理由で土坑を掘って埋めたようである。埋土はおおよそ2層に分層できた。なお、ほんのわずかだが、上層の中段に炭化物が見られた。炭化物は ^{14}C 年代測定の結果 4660 ± 40 年BP（補正 ^{14}C 年代）ということが判明している。また、暦年代交点はBC3500, 3460, 3380の値を示している。



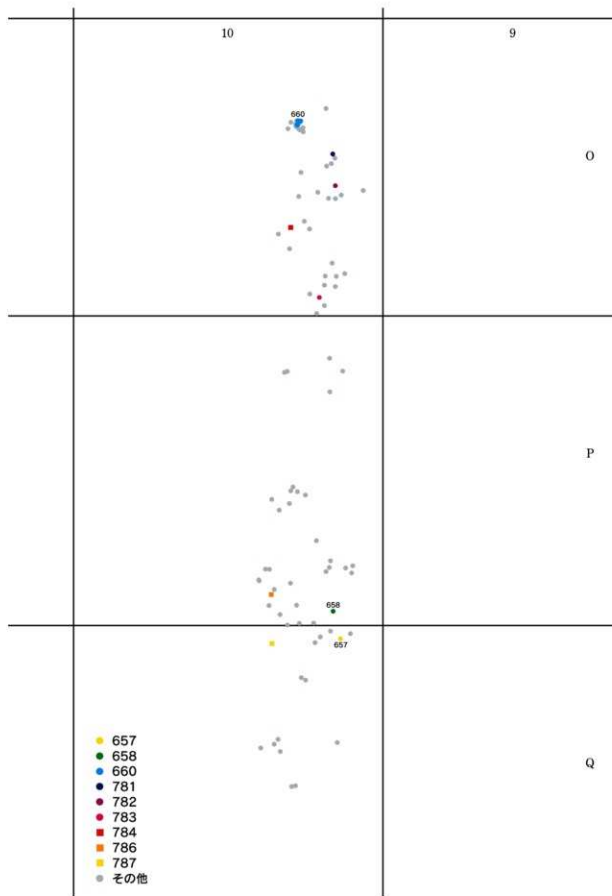
第146図 縄文時代前期（Ⅱa層）遺物出土状況全体図



第147図 縄文時代前期（Ⅱa層）遺物出土状況図（1）



第148図 縄文時代前期（Ⅱa層）遺物出土状況図（2）



第150図 縄文時代前期（Ⅱa層）遺物出土状況図（4）

(1) 遺物

① 土器・土製品

(はじめに)

早期の項で地区分けしたA地区では、II層が削平されほとんど残存していなかった。包含層の残存が良好なB地区を主に遺物の出土がみられた。

(分類)

1類 既存の土器型式では甌式土器に相当する。貝殻条痕を施すもの(a)と微隆起突帯を付けるもの(b)とがある。

2類 既存の土器型式では曾畑式土器に相当する。紋様は刺突連点と沈線によって施される。

3類 既存の土器型式では深溝式土器に相当する。

4類 南西諸島を主な分布とするものを一括して南島系土器とした。この中には、室川下層式土器や一渡土器などが含まれる。

その他 1~4類に当てはまらないものを一括する。

縄文時代前期に相当する遺物が多いが、わずかに後期に相当する遺物も出土している。

B地区で1~4類が出土し、C地区から1, 3, 4類その他が出土している。

(B地区)

1類 a (第151図543~553)

主にF・G-12, I-10区から出土した。内外ともに貝殻条痕を施すものである。

543~545は口縁部である。543は内湾気味に立ち上がり、端部はやや細くなる。544は開きながらまっすぐ立ち上がる。545は端部で外反し、口唇部に刻みをいれる。546~552は胴部である。546は上半部分で口縁部との境で屈曲する。547は下半部分で、底部との境で屈曲し、開き気味に立ち上がる。553は底部で弱い尖底となる。いずれも、胎土に角閃石と白い粒状のものを含む。

1類 b (第152図554~560)

口縁部に微隆起突帯を付けるものである。B-11, C-13, D-13, F-12, G-12区から出土した。

554は丸みを持ちながら立ち上がる。口縁外部から口唇部を越えて内面まで縦方向の微隆起突帯を付け、胴部には横方向の微隆起突帯をつける。貝殻条痕で調整するが、さらに部分的にナデ調整を施している。556も554と同様の施紋であるが、やや直線的に立ち上がる。557はやや内傾する口縁である。555は口縁部に縦方向の突帯をつけている。558は胴部上半であ

る。縦方向の条痕を地紋とし、口縁との境に突帯を巡らす。559, 560は胴部で、やや丸みをもつ。貝殻条痕で調整する。559には沈線がみられる。

2類 (第153~157図561~640, 644, 649)

561~567は胎土に滑石を含むものである。561, 562は口縁部で、外部に刺突連点紋を施す。561はほぼ直に立ち上がり、端部はとがっている。562は口唇部が平坦で刻みを施す。563は押し引き紋風に5条の刺突がみられ、口唇にも刻みがある。564は口縁~胴部で開きながら立ち上がる。内部にも刺突連点紋を施す。口唇は平坦で、平行に刺突連点紋を施す。外面は3条の刺突連点紋の下部に平行沈線紋を施す。565は胴部で、沈線で折帯紋と平行線紋を施す。566も胴部で、平行沈線を施している。567は底部で丸底である。底部まで平行沈線紋を施す。B-11, F-12, G-12区から出土している。

568~572は口縁部に刺突連点紋を施すものである。

568は口縁端部で、やや内傾する。内面に1条、外面に3条の刺突連点紋を施す。口唇は平坦で刺突連点紋が施される。569, 571は外反するもので、内面は無紋で、外面に3条の刺突連点紋が施される。569は口唇を細くし、その外反した上面にも連点紋を施している。570, 572も外反する口縁で内外面及び口唇部にも刺突連点紋を施す。570は内面の連点下に平行沈線紋を施す。B・C-10, C-12, G-12区から出土している。

573は大きな胴部片である。外面に沈線を斜方向や平行に施し、区画や折帯紋などを施している。内面は無紋で、貝殻条痕で調整する。B-11区から出土した。

574~589は口縁外部に平行沈線紋を施すものである。

590は口縁~胴部である。開き気味に立ち上がり、口縁は外反する。外面の紋様は口縁から胴部にかけて縦方向の沈線紋を巡らす。やや不明瞭である。胴部上半には横方向の沈線紋帯がある。口縁の内面には連点紋帯が巡る。

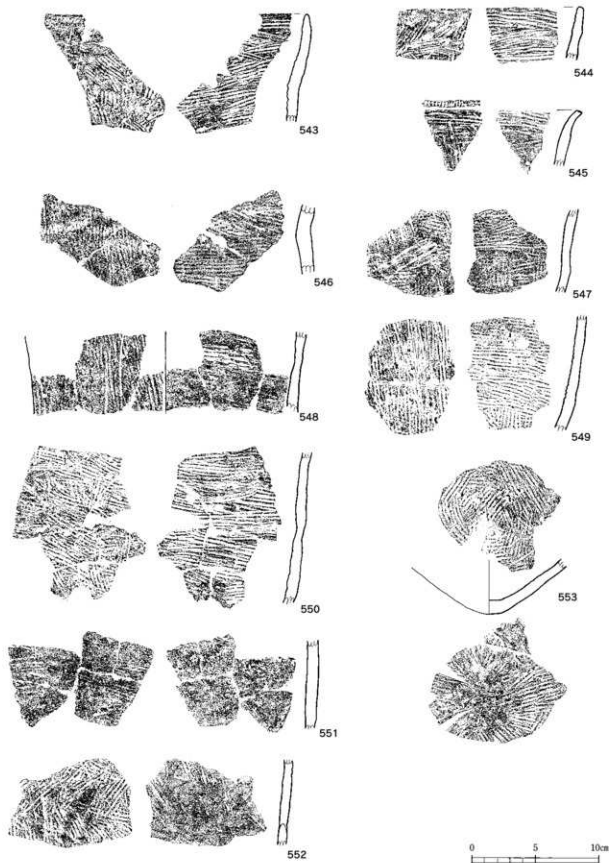
591~593は胴部上半に沈線で四角を重ねて描くものである。口縁はわずかに外反する。口縁部の紋様は連点紋である。口縁端部内側にも刺突紋が巡る。

594は口縁部で、やや薄いものである。横方向の沈線紋が施される。

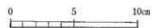
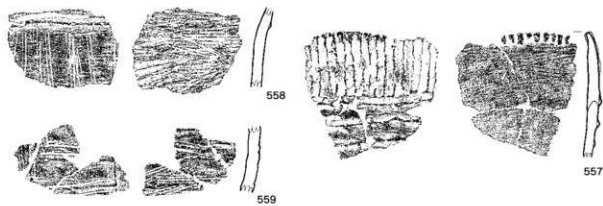
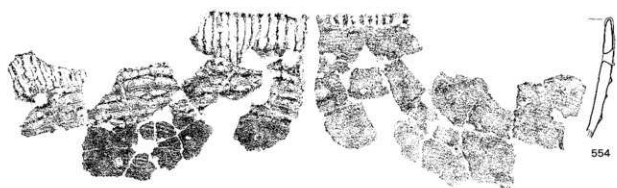
595は口縁部で外反気味のものである。鏡形状の沈線紋が施される。

596は口縁部で内湾する。斜沈線で菱形もしくは折帯紋を描く。ややラフな施紋である。

598, 599は口縁部で、端部で大きく外反する。口



第151図 縄文時代前期の土器（1）



第152図 縄文時代前期の土器（2）

唇には刺突連点紋が施され、外面には横方向の沈線に斜沈線を山形に重ねている。599の内面には横方向の短沈線を連続させる。

597、600～605、607は胴部である。597は外反気味に開くが、それ以外は丸みをもつ。斜方向の沈線で折帯紋を施すが、ややラフな施紋である。

606、608～611も胴部である。中ほどに連点紋帯をもち、横方向の沈線で区画するものと、区画せず斜方向または横方向の沈線で紋様を描くものである。608は明瞭に屈曲している。

612は胴部であるが、沈線がラフに施されている。

613～630は底部で、丸底を呈する。613～627は底面まで施紋されているもので、縦方向の沈線、横方向の沈線、横方向の沈線でくもの巣状になるもの、曲線を組み合わせるもの627などがある。620は浅い沈線で格子状を呈するものである。やや厚い器壁である。626は小形の深鉢である。縦方向の沈線が底面まで施され、胴部に横方向の波状沈線が巡る。628～630は無紋である。

631は1-10区から出土した胴部片である。縦方向、斜方向及び曲線の沈線を組み合わせる。

632はC-14区から出土した。縦方向と曲線の沈線を組み合わせる。

633～635はF-12区から出土した。633は胴部下半で丸みをもつ。縦方向と斜方向の沈線を組み合わせ、横方向の沈線で区画するものと思われる。634の紋様は横方向の沈線である。635の紋様は斜方向の沈線である。

636はF-11区、637はF-12区から出土した。丸みをもつ胴部で、縦と斜方向の沈線を組み合わせる。

638もF-12区から出土しているが、やや細い沈線を縦方向に施すものである。また、639はB-10区、640はD-12区から出土し、横方向の細い沈線紋を施すものである。

644はD-14区から出土した。口縁部で外反し、口唇は外向きになる。口唇には斜方向の刻みを巡らす。外面と内面に横方向の沈線紋が施される。

649はC-13区から出土した。胴部で器壁が比較的薄い。横方向の沈線に、斜方向の沈線を交差させている。

3類 (第157図650～654)

F-12、G-10・12区から出土または表採品である。いずれも胴部破片で丸みもち、底部は丸底になるものと思われる。

650～652はG-10区から出土、または表採である。650、651は胴部下半で、横方向の刻みのある微隆突帯の間に沈線が施されるものである。652は粒状貼付紋と細い沈線が施される。

653はF-12区から出土した。外面に縦方向の微隆突帯の間に縦方向の沈線が施される。内面は貝殻朱痕である。

654はH-11区から出土した。縦方向の沈線に斜方向の沈線を組み合わせ、その間に縦方向の連点紋を施す。

4類 (第157図641～643)

D-12・14区から出土している。胴部片である。鋭い沈線紋を施すものである。

その他 (第157図645～648、655、656)

645はC-13区から出土した。胴部片で横方向の突帯に竹管紋を施す。

646はE-12区の表採品である。小石で押圧したような突帯や竹管紋が施される。

647はB-10区から出土した。口縁部で口唇は平端である。外面に突帯を曲線状に貼り付け、連点を刻む。

648はH-11区から出土した胴部片である。撚糸状のものを押している。

655はG-12区から出土した。細い隆線状の突帯と沈線を縦方向に施すものである。

656はF-12区から出土した。無紋の胴部である。

(C地区)

1, 3, 4類その他が出土している。O・P・Q-10区から出土している。

1類 (第158図657)

657は口縁付近の胴部上半で、Q-10区から出土した。外面に条痕紋がかすかに残っている。

3類 (第158図660)

660はO-10区から出土した。胴部下半で縦方向の沈線と条痕が施される。

4類 (第158図658,659,662)

658はP-10区から出土した。口縁部付近のもので、外反するものである。縦方向の短沈線を横位に施すものである。縄文時代前期相当の室川下層式と思われる。

659, 662はO-10区から出土した。659は口縁で爪形紋を綾杉状に巡らす。縄文時代後期の一湊式と思われる。662は鋭い沈線紋を施すものである。

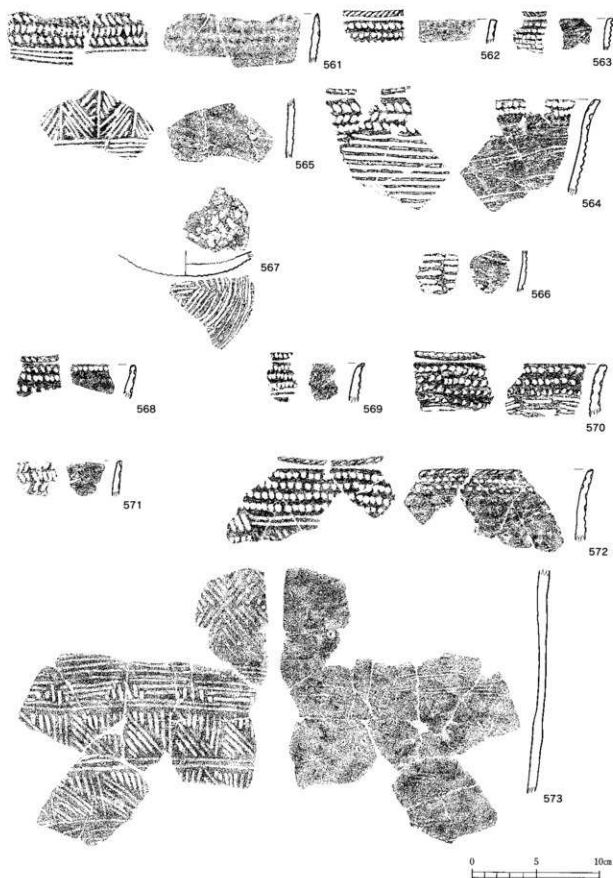
その他 (第158図661)

661はO-10区で出土した。胴部片で、貝殻腹縁を鋸歯状に巡らすものである。

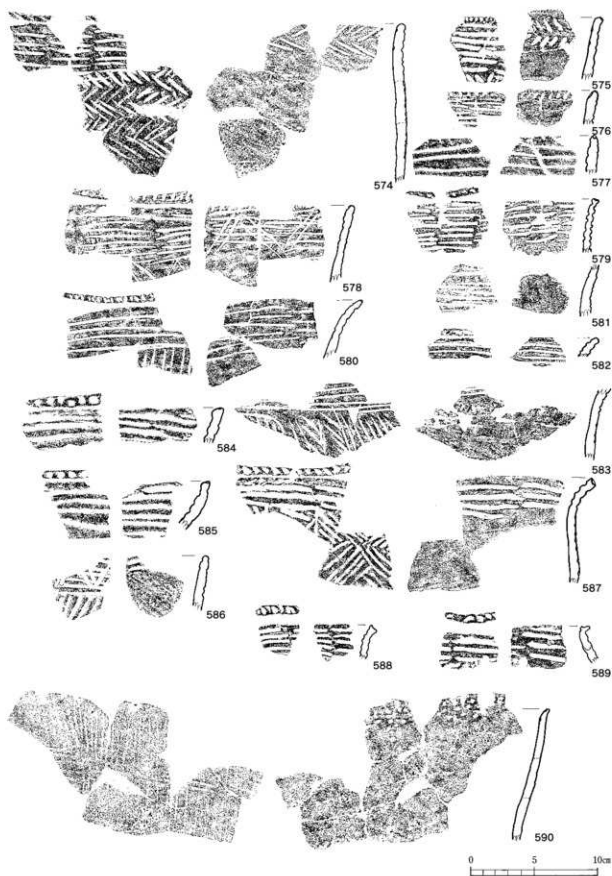
(土製品)

円盤形土製品 (第158図663)

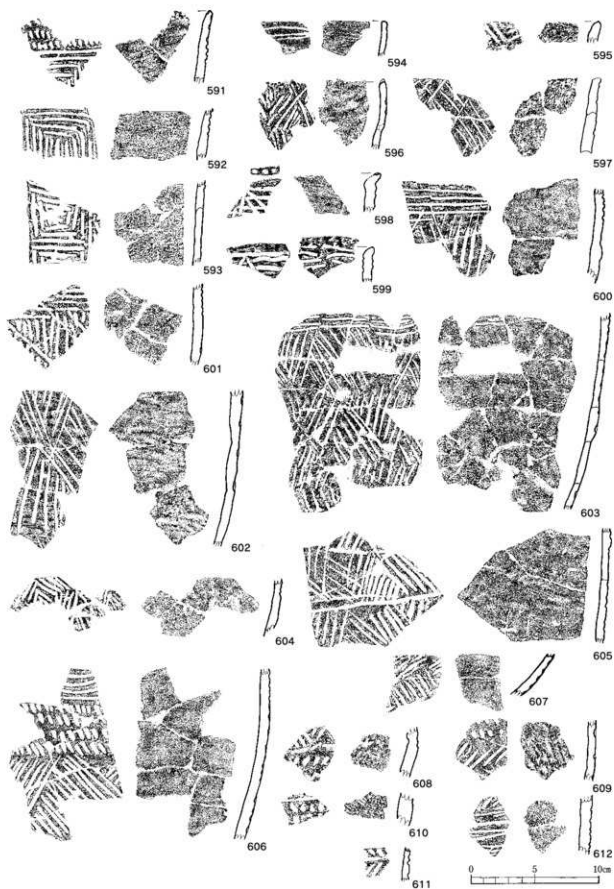
D-14区(B地区)IIa層から1点だけ出土している。土器片の割れ口を擦って径約7cmの円盤状に加工したものである。元の土器はナデ調整で、紋様は不明である。外面は赤褐色、内面は黒褐色を呈し、胎土には石英・長石・雲母・貝殻片を含む。



第153図 縄文時代前期の土器（3）



第154図 縄文時代前期の土器（4）



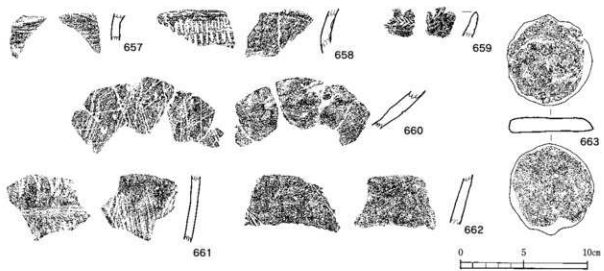
第155図 縄文時代前期の土器（5）



第156図 縄文時代前期の土器（6）



第157図 縄文時代前期の土器（7）



第158図 縄文時代前期以降の土器・土製品

② 石器

(はじめに)

A地区からは1層がほとんど残存していないこともあり、B地区寄りの地点からわずかに石器が出土している。また、B地区では多様な出土品がある。C地区では少量である。なお、石器については縄文時代前期以降の遺物を一括せざるをえなかった。

(A地区)

A地区からはB地区寄りの地点からわずかに石器が出土している。

打製石鏃 (第159図664)

C-8区から出土したもので、針尾産の黒曜石を素材とする。大きな剥離により、側辺がやや波打っている。長さ2.7cm、長幅比1.23で基部がやや鋭く作られている。

磨石・敲石 (第159図665)

D-8区から出土した砂岩製の、長さ11cmで、長幅比1.31でわずかに縦長である。片面中央と側縁部に敲打痕がみられる。

(B地区)

B地区からは打製石鏃、石錐、石匙、楔形石器、スクレイパー、磨製石斧、打製石斧、二次加工剥片、石錐、剥片、石核、磨石・敲石、礫器、砥石、軽石加工品、石皿、石楯状石器が出土した。

集中域はB-11区、C・D-12・13区、F・G-12区、I-10区の4区域に細分できる。

打製石鏃 (第160図666, 667)

G-11・12区から出土している。素材は黒曜石と安山岩で異なる。

666は長さ1.7cm、長幅比1.89である。側辺はやや丸みをもち、逆刺は鋭く、基部もやや深く入り込んでいる。

667は長さ2.5cm、長幅比1.25である。側辺は僅かに反り気味で逆刺も鋭く、基部も深く鋭く入り込んでいる。

石錐 (第160図668)

668はI-10区から出土したもので、ホルンフェルス製である。自然面もしくは節理面が残る。錐部の断面は三角形である。

石匙 (第160図669~671)

C・D-12、G-11区から出土した。素材は姫島産黒曜石、針尾産黒曜石、砂岩とバラバラである。

668は縦長で、つまみ部の抉りと、刃部付近のみ調

整している。

670は横長で、ほぼ全側縁に調整を施している。

671は横長であるが、自然面を残し、刃部付近の調整は細かい。

楔形石器 (第160図673)

673はC-12区から出土した。黒曜石製である。

スクレイパー (第160図672, 674, 675)

672はC-13区から出土した。片側面に剥離がみられる。674はD-13区から出土した。下面と片側面に剥離がみられる。675はG-12区から出土した。両側に剥離がみられる。

磨製石斧 (第161図676)

676はE-13区から出土した。ホルンフェルス製である。成形時の剥離は石材が脆いため不明瞭である。刃部の両側に磨痕が残る。

打製石斧 (第161図677)

677はG-12区から出土した。片面に自然面を残す。側面を剥離し、楕円形を呈する。安山岩製である。

石錐 (第161図679)

679はG-12区から出土した。平面形が長方形の板石でその長側面の上下を打ち欠く。

剥片 (第161図678, 第162図680~684, 第176図754, 755, 第177図756)

678はB-11区から出土した二次加工剥片である。自然面を残し、その側の片側面に剥離が施されている。

680, 681はD-13区から出土したもので、砂岩である。682も砂岩製であるが、H-11区から出土した。どちらも横長である。

683, 684はホルンフェルス製である。円礫を母岩としているものと思われる。B-10, C-12区から出土している。

754~756は砂岩の剥片の端部に剥離を施すものである。754の裏面には磨痕が残る。755は石核の最終段階かもしれないが、両側と下端に剥離がある。756も両側と下端に剥離がある。

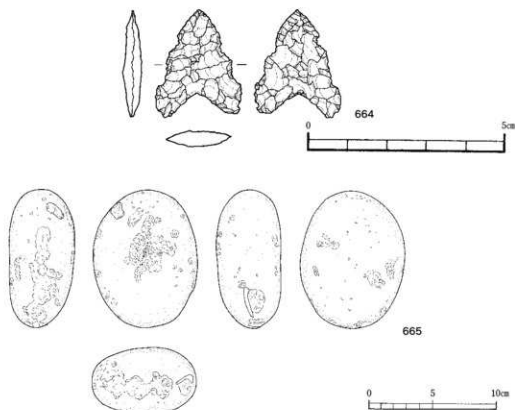
石核 (第162図685)

685はI-10区から出土したもので、黒曜石製である。背面に自然面を残す。細かく縦長の剥片をとった後、横方向から剥離を施している。

磨石・敲石 (第163~175図686~751)

686, 687はF-12区から出土した。686はやや大きく縦長の砂岩礫で、下端に敲打痕が残る。687はやや丸みのある面をもつもので片面に磨痕があり、側面に敲打痕がある。

688~692は不整形な砂岩礫を使用したものである。大きさが7~12cm、重さが500~900g程度のものである。C-13, D-12, F-12, G-12区から出土している。



第159図 縄文時代前期の石器（1）

693～727は円礫を使用したものである。長さ7.9～14.5cm、幅7.4～10.7cm、厚さ2.5～6.3cm、重さ330～1,180gで長幅比は1.00～1.55である。石材は砂岩が最も多く、花崗岩が2点（707, 708）、安山岩が1点（693）である。725, 726は断面形が長方形を呈するものである。B-11区、D-13区に集中している。

728～748は小形のものである。729が方形を呈するほかは円礫を利用するものである。長さ4.3～7.8cm、幅4.0～6.5cm、厚さ1.8～4.8cm、重さ40～250gで、長幅比が0.69～1.74である。

729は長さ5.3cmで側面に敲打痕が残る。I-10区出土である。

734は裏面が平坦で磨痕を残すものである。739は扁平な礫を使っている。740, 748は角張っており、敲打痕のみが残る。

749～751は縦長のものである。749, 750はやや角張り, 751は丸みをもつ。749は両端に敲打痕がある。

750は断面四角形で2面と下面に磨痕が残る。また、下面には敲打痕が残る。751は両端に敲打痕が残る。

円盤形石器（第175図752）

752はE-13区から出土した。板石状の扁平な砂岩の縁辺を打ち欠き、円盤状に仕上げている。

礫器（第176図753, 第177図757, 第182図771）

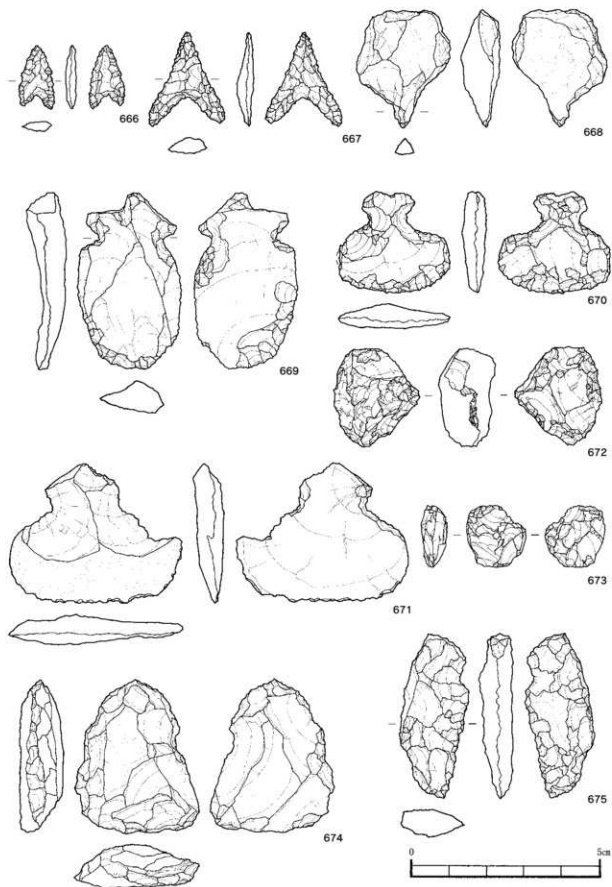
いずれも砂岩である。753は両側面から打ち欠いている。端部はつぶれている。

757は横長の円礫であるが、裏面はやや窪んでいる。下端に剥離があり、端部はつぶれている。また、表面と左側面に敲打痕があり、さらに裏面には磨痕がみられる。

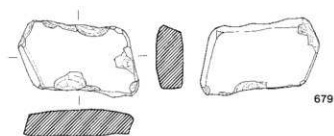
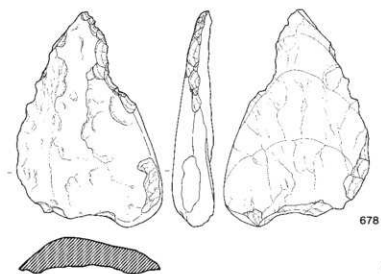
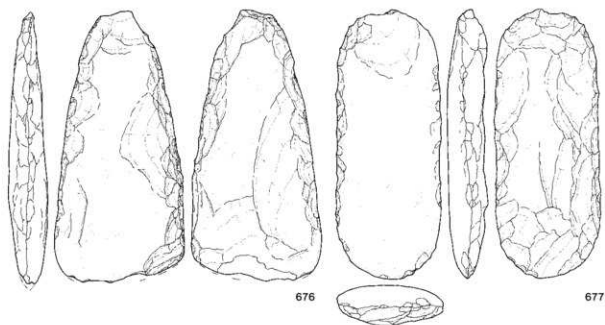
771はH-10区から出土したもので、小さくて薄いものである。表面に磨痕があり、側面打ち欠いており、その端部はつぶれている。

砥石（第178図758～761）

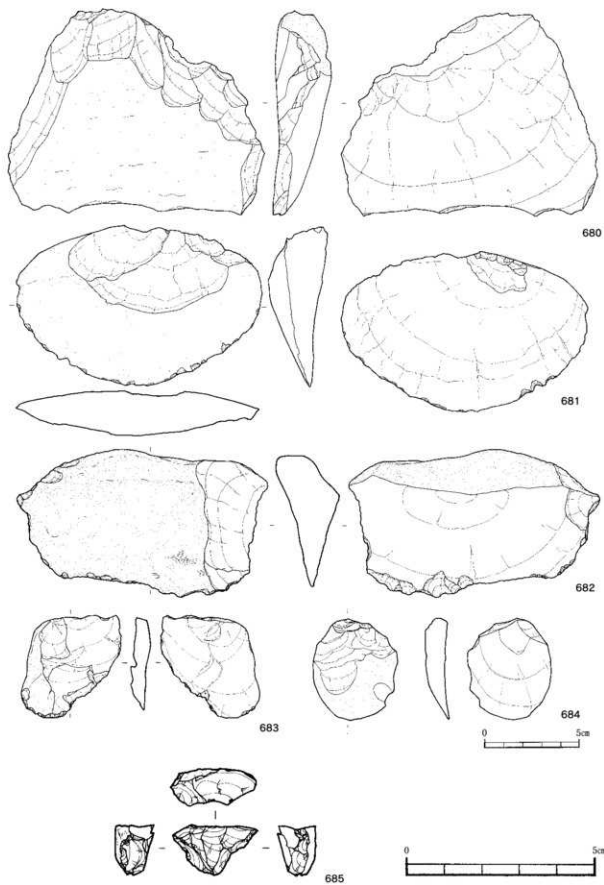
758は砂岩製で平面・断面形が三角形のものである。両面に磨痕があり、側面に敲打痕がみられる。



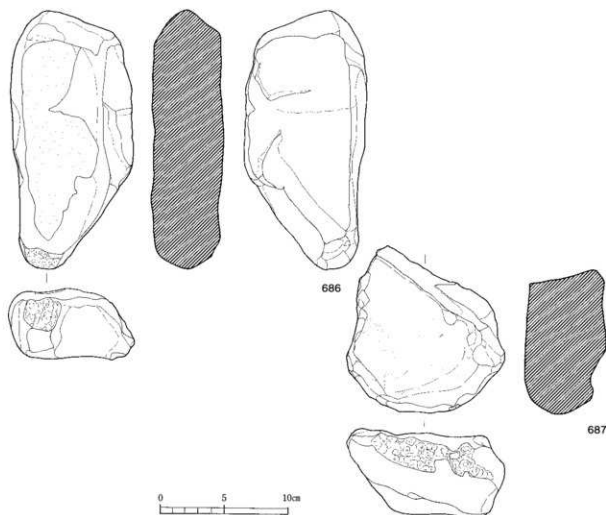
第160図 縄文時代前期の石器（2）



第161図 縄文時代前期の石器（3）



第162図 縄文時代前期の石器（4）



第163図 縄文時代前期の石器（5）

759も砂岩製である。縦長の形状で、断面は方形である。表面の擦痕が著しい。裏面は剥離しているものと思われる。

760は粘板岩製の扁平なものである。761はホルンフェルス製である。

軽石加工品（第178図762）

762は長さ10.2cm、幅7.9cm、厚さ4.8cm、重さ68.44gの軽石で、不明瞭であるが稜線がみえる。裏面には擦痕がのこる。

石皿（第179～187図763～770、772～780）

776が安山岩である以外はすべて砂岩製である。扁平な板石を使用する例が多く、磨面もほとんど平坦である。B-11区、C-13区で多く、D-12・13区、F・G-12区、H-10区からも出土している。

763、764、767、768はB-11区から出土した。

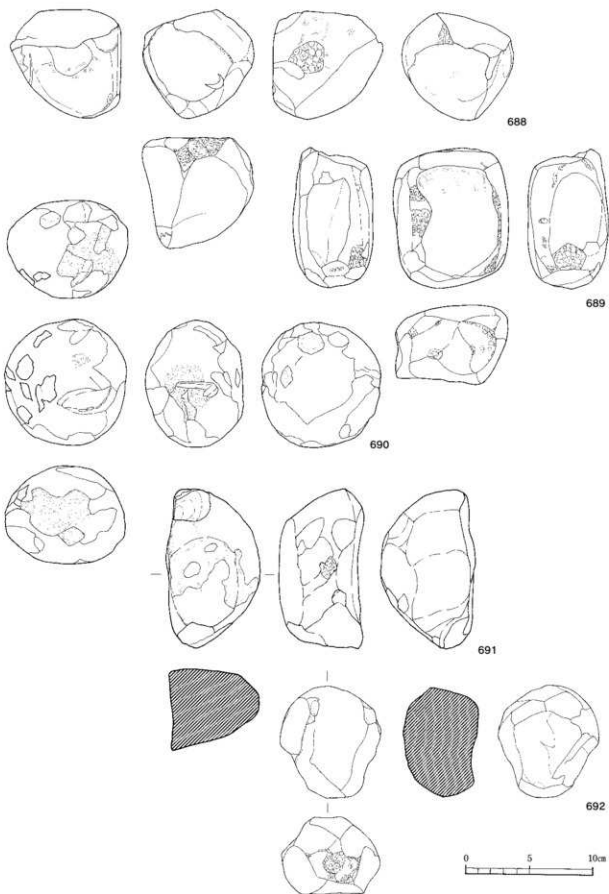
767は2つに割れているが、表面がわずかに窪んでいる。

766、770、773、775はC-13区から出土した。766は自然に丸みを帯びた板石で、表面はまだらに、裏面は全面的に磨痕がみられる。770も自然に丸みをもつが、縦断面が三角形状を呈する。773は表面が大きく窪んでおり、その中央部全面に顕著な磨痕がある。775は反りのある断面で、両面に磨痕が顕著に残る。

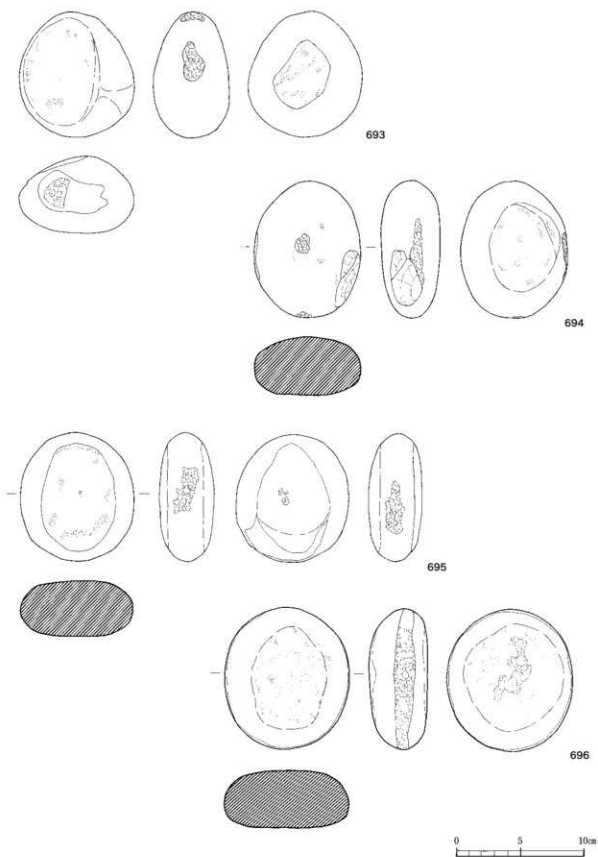
765、769はD-13区から出土した。765は両面に磨痕が残る。769は小さいもので、半円形状である。両面に磨痕があり、側面に敲打痕が残る。

772、774はD-12区から出土した。772は表面が窪んでおり、その中央部に磨痕が顕著である。774は皿状の断面で、その窪んだ面に部分的に磨痕が残る。

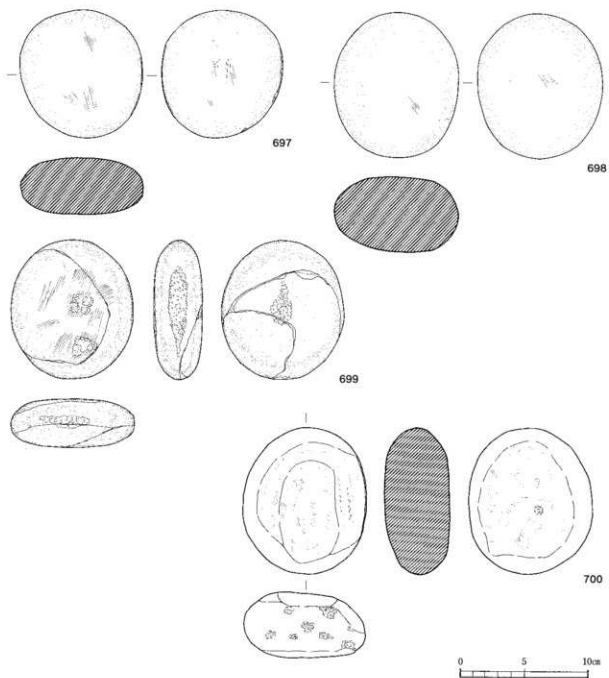
777、779はF-12区から出土した。779は欠損品で両面に磨痕が残る。



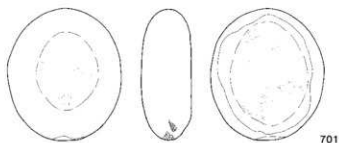
第164図 縄文時代前期の石器（6）



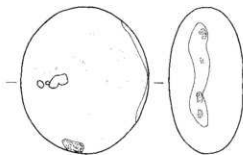
第165図 縄文時代前期の石器（7）



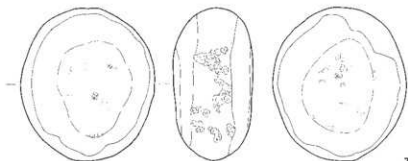
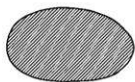
第166図 縄文時代前期の石器（8）



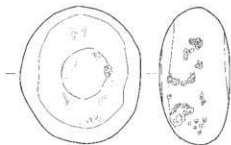
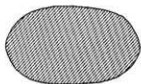
701



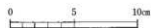
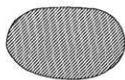
702



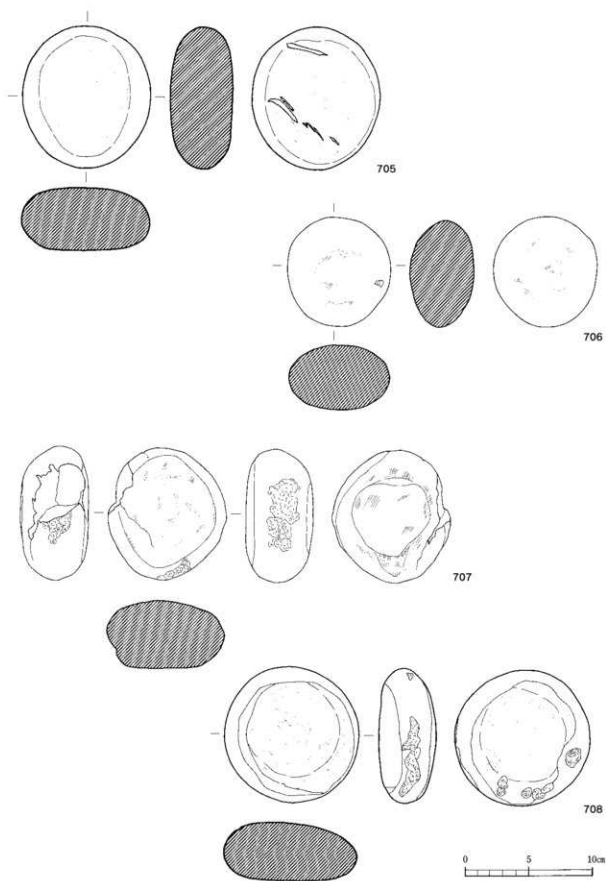
703



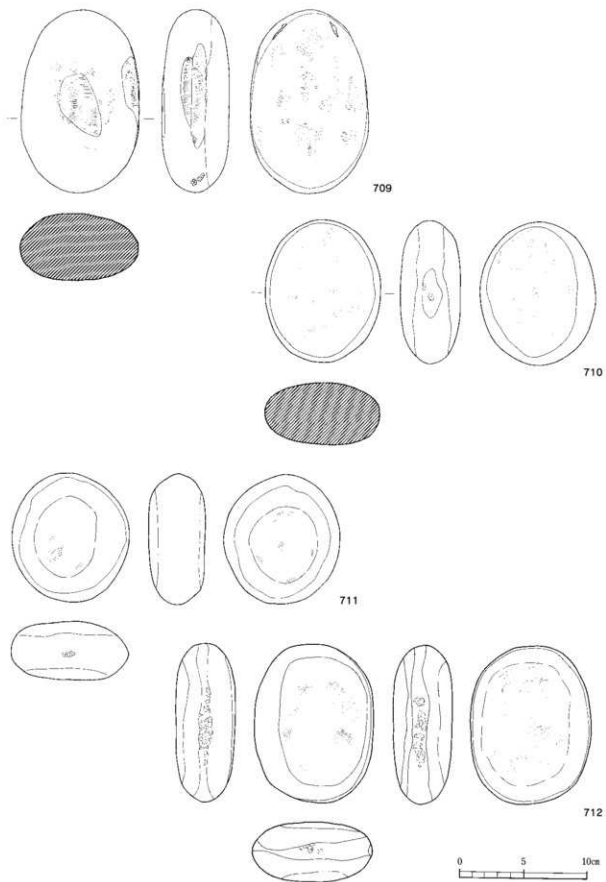
704



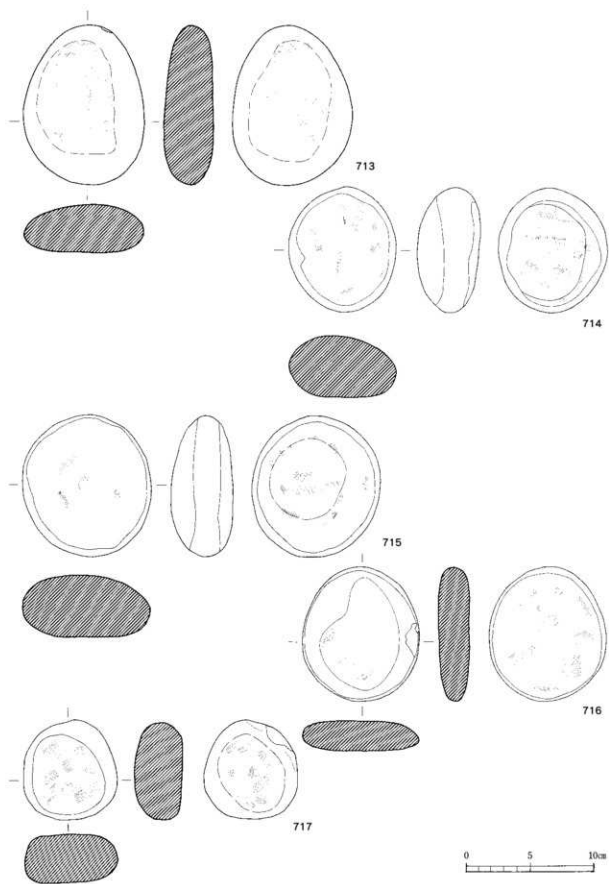
第167図 縄文時代前期の石器（9）



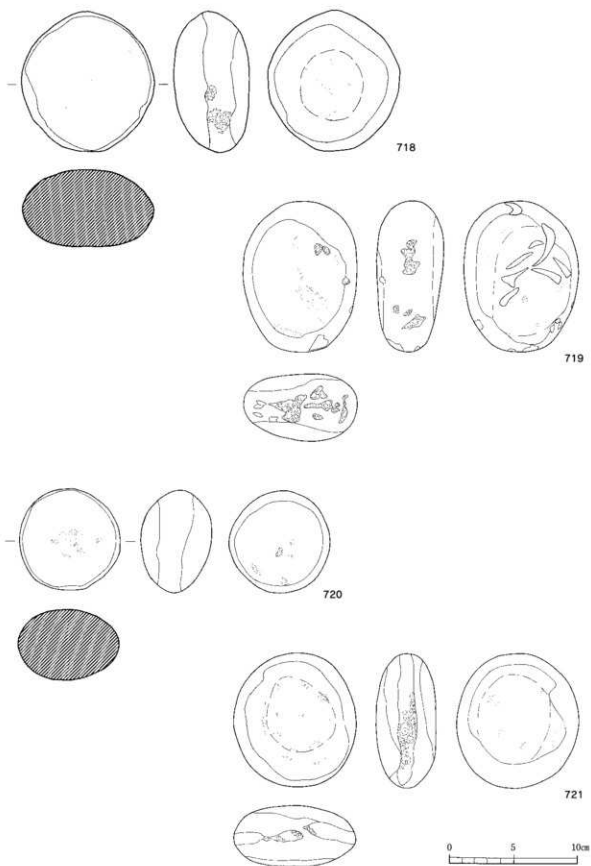
第168図 縄文時代前期の石器 (10)



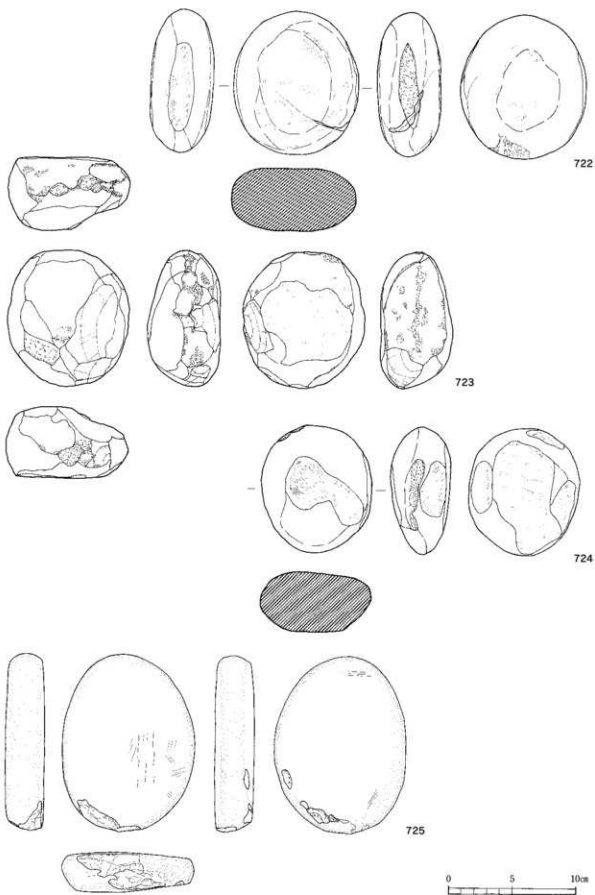
第169図 縄文時代前期の石器（11）



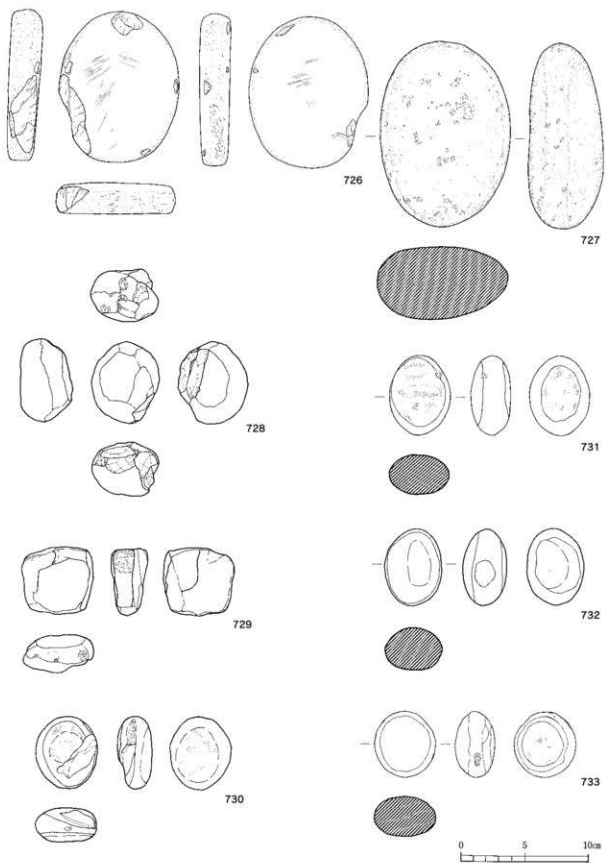
第170図 縄文時代前期の石器 (12)



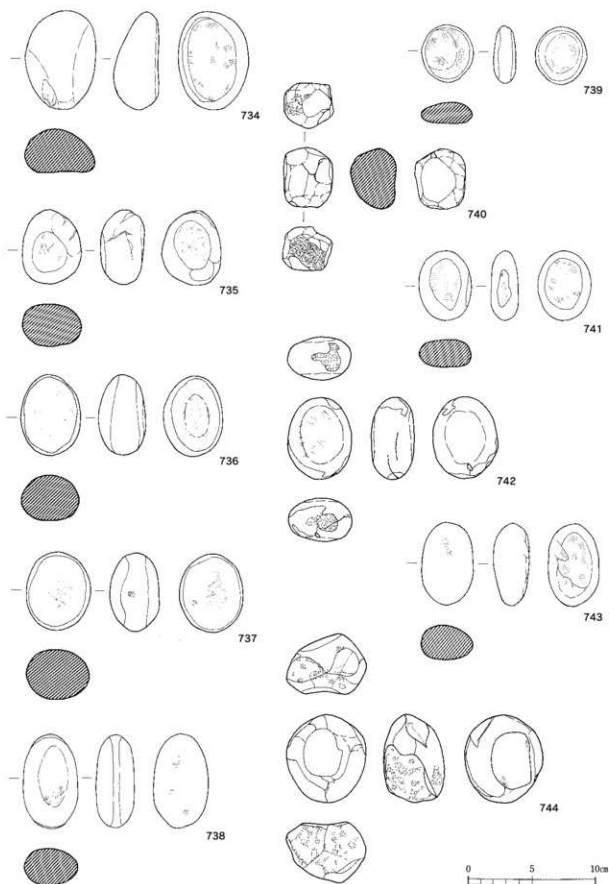
第171図 縄文時代前期の石器 (13)



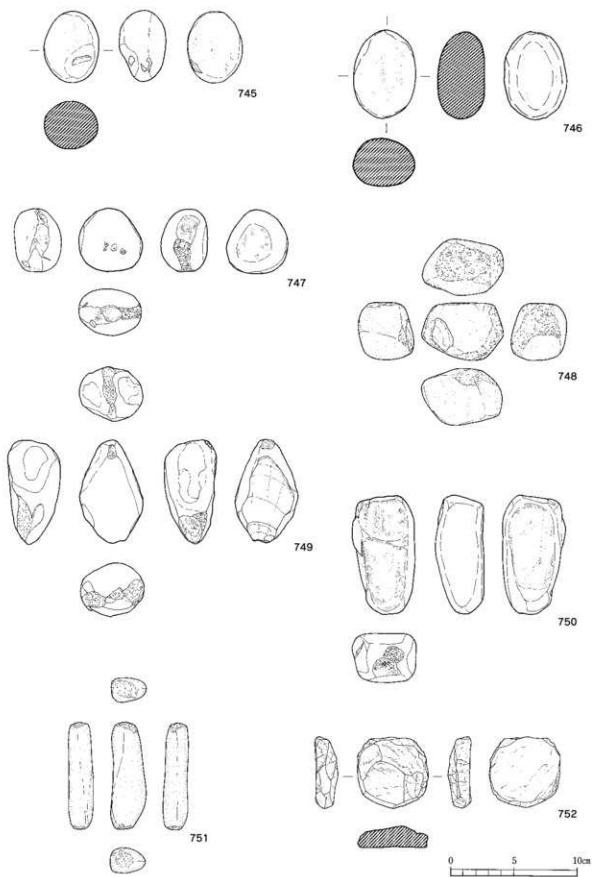
第172図 縄文時代前期の石器 (14)



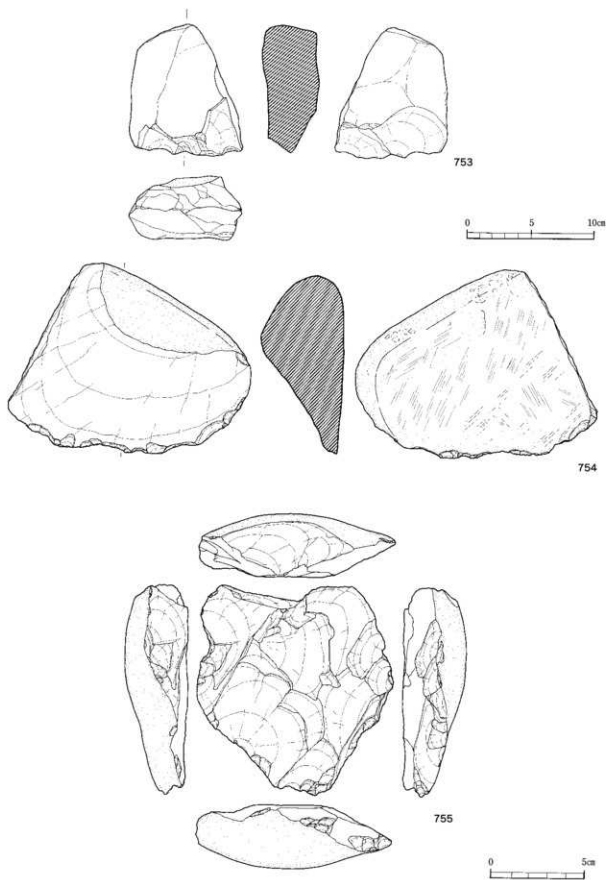
第173図 縄文時代前期の石器 (15)



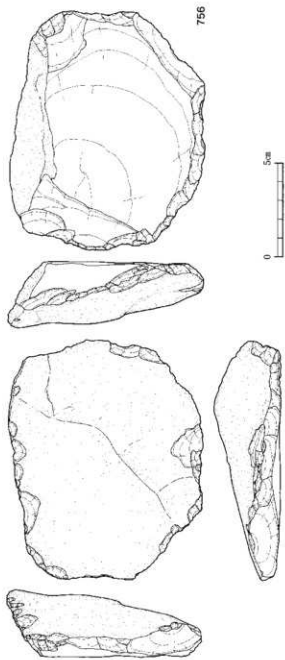
第174図 縄文時代前期の石器 (16)



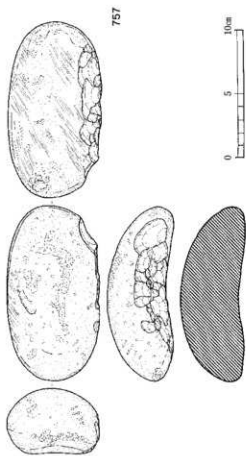
第175図 縄文時代前期の石器 (17)



第176図 縄文時代前期の石器 (18)



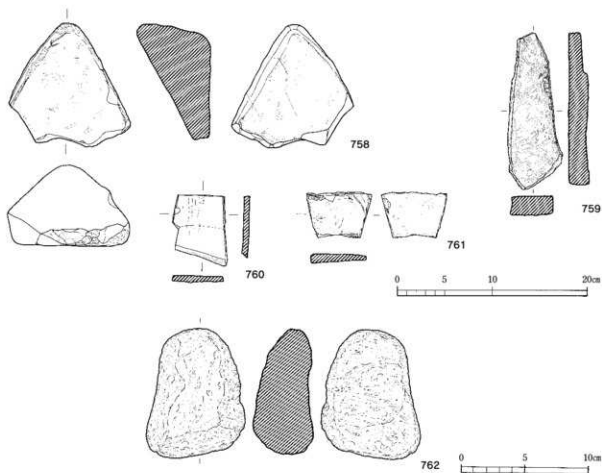
756



757



第177図 縄文時代前期の石器 (19)



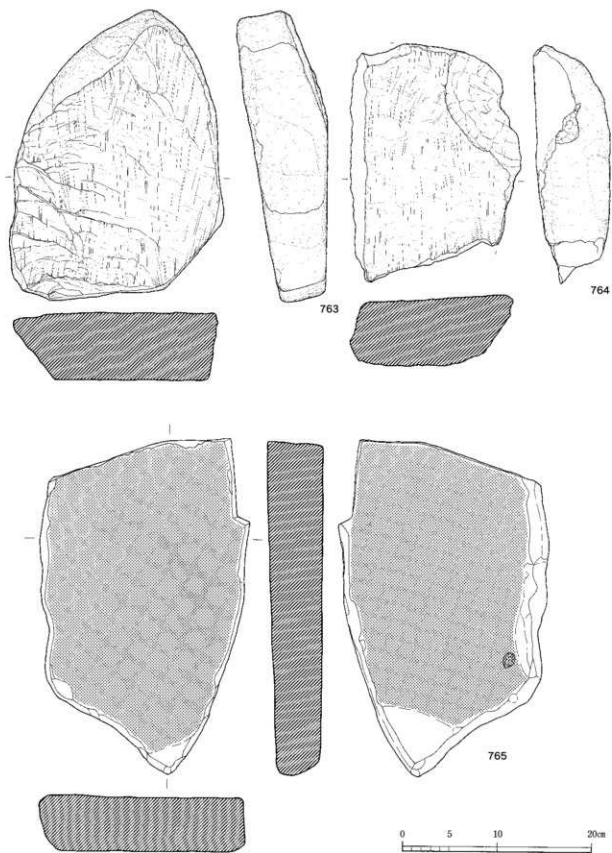
第178図 縄文時代前期の石器 (20)

778, 780はG-12区から出土した。778は表面に一部、敲打痕が残り、裏面の磨痕も部分的である。780は欠損品であるが、両面に磨痕が残る。

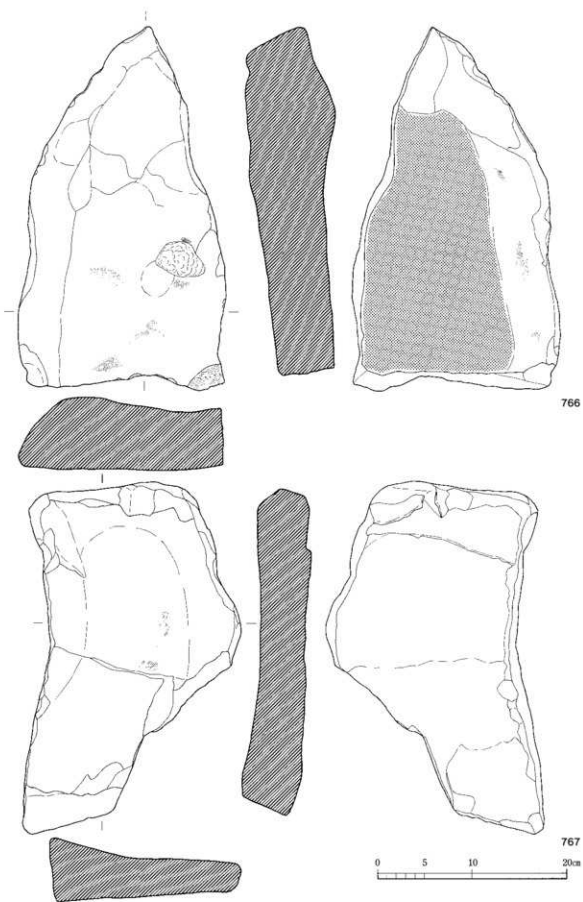
776は出土グリッド不明である。表面が山形で、裏面が平坦である。両面とも部分的に磨痕が残る。

石楯状石器 (第188図785)

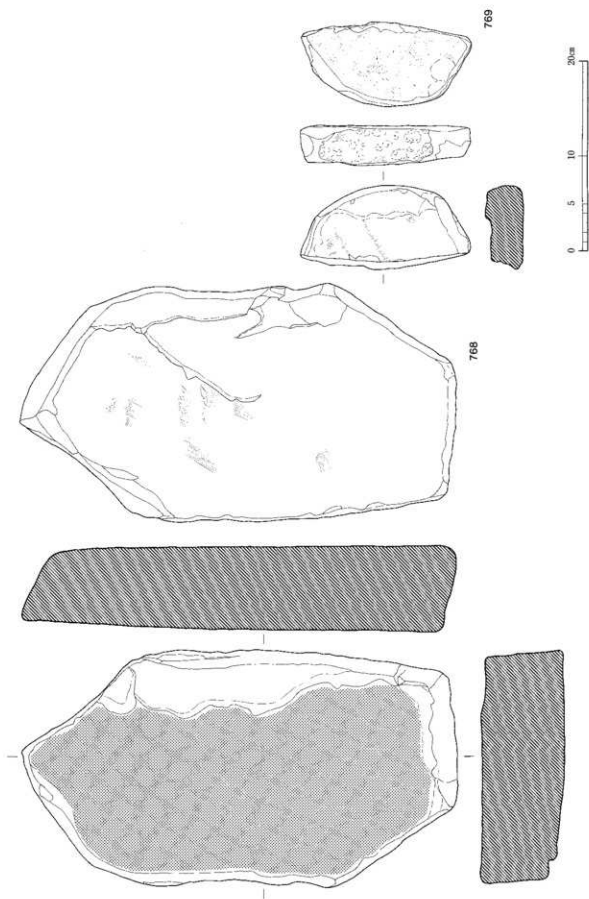
785はB-11区から出土したもので、三角形の剥片の側辺を剥離している。粘板岩質である。



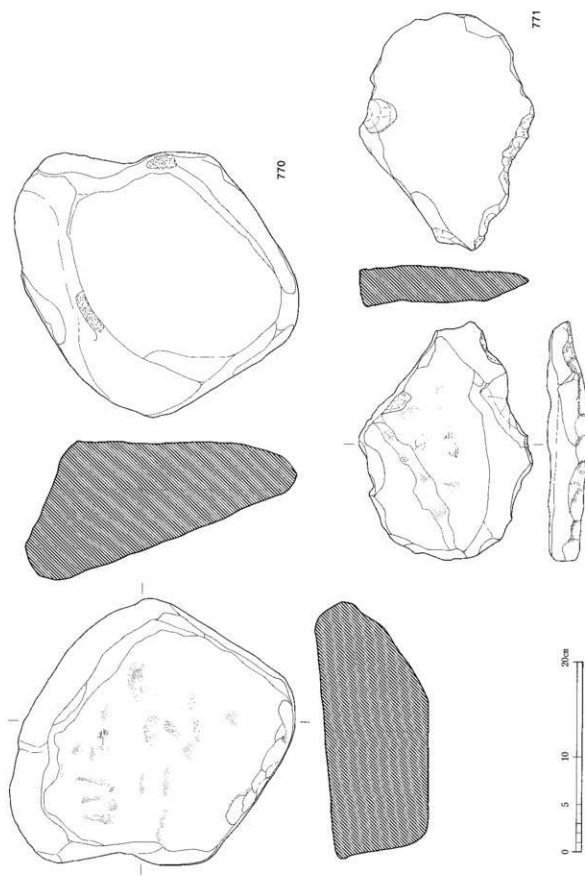
第179図 縄文時代前期の石器 (21)



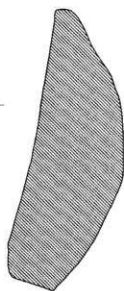
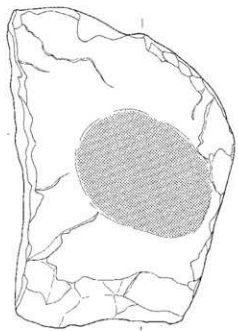
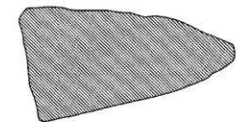
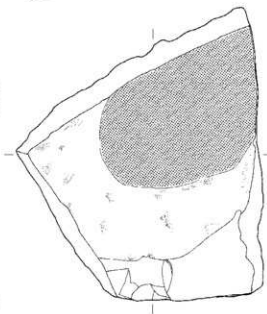
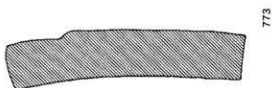
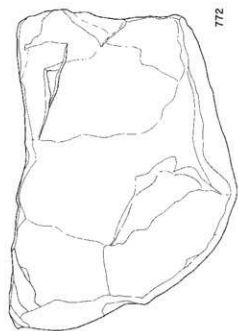
第180図 縄文時代前期の石器 (22)



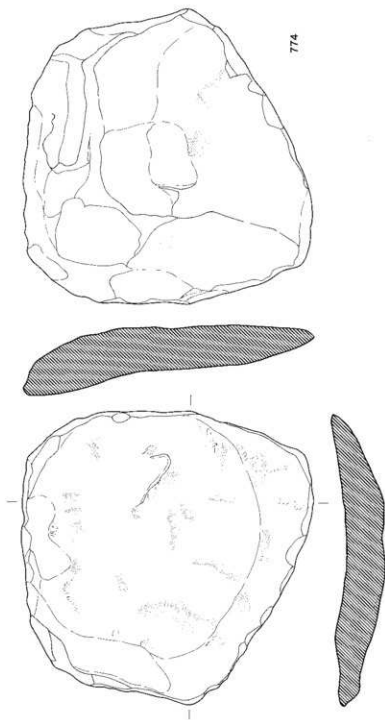
第181図 縄文時代前期の石器 (23)



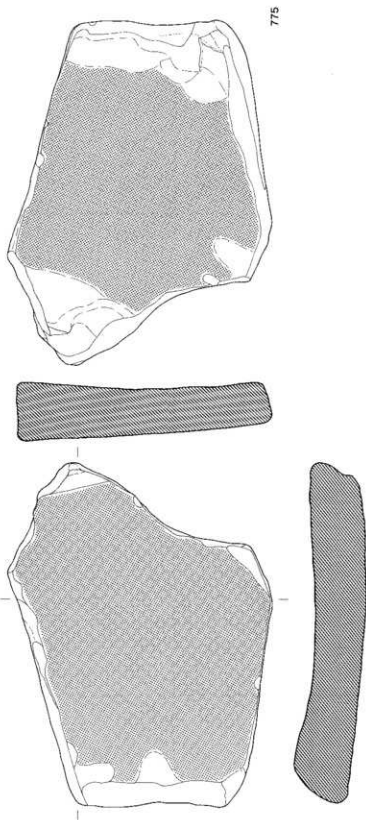
第182図 縄文時代前期の石器 (24)



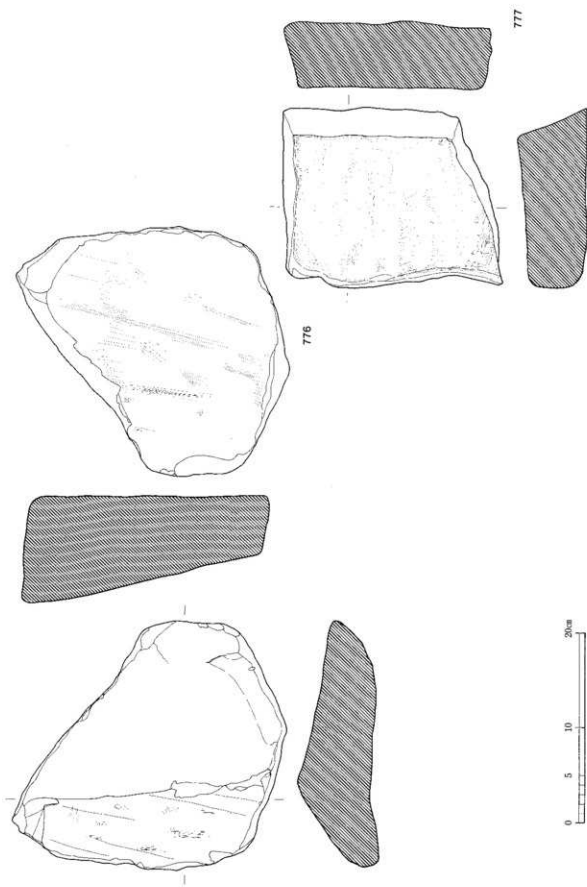
第183区 縄文時代前期の石器 (25)



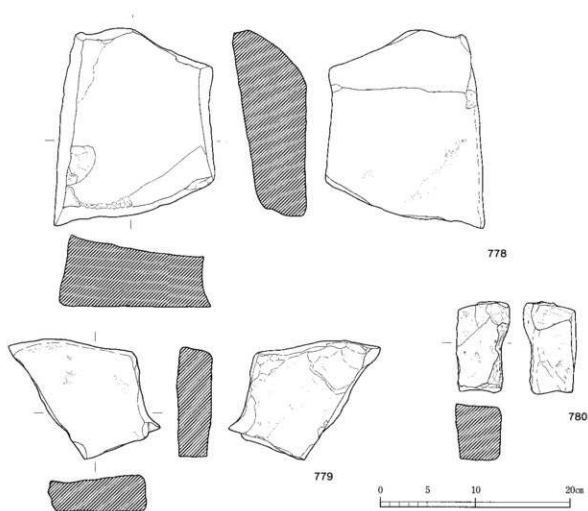
第184図 縄文時代前期の石器 (26)



第185図 縄文時代前期の石器 (27)



第186図 縄文時代前期の石器 (28)



第187図 縄文時代前期の石器 (29)

(C地区)

C地区からは打製石鏃、石匙、磨石・敲石が出土した。O～Q-10区に集中する。

打製石鏃 (第188図781～783)

いずれもO-10区から出土した。素材は安山岩と砂岩である。

781は長さ1.8cmで、側辺は直線的で、基部の挟りは三角形で深い。782は砂岩製である。長さ2.2cm、側辺は逆刺付近で少し窪ませる。基部は三角形で深い挟りである。783は長さ3.4cmでやや長い。先端は細く、逆刺付近で屈曲し、逆刺が垢がる。基部の挟りは大きなU字状を呈する。

石匙 (第188図784)

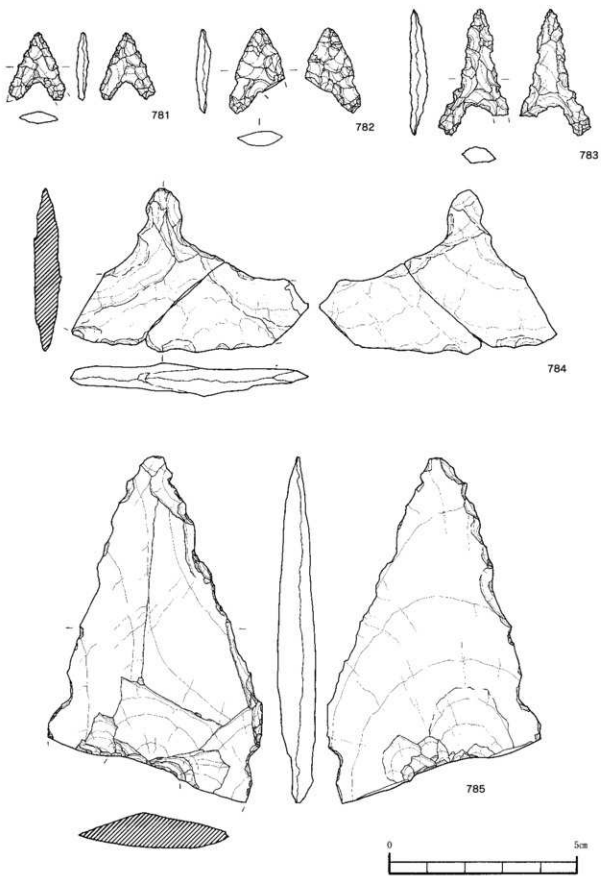
784は頁岩もしくはホルンフェルス製である。欠損品

で刃部の剥離も不明瞭である。O-10区で出土した。

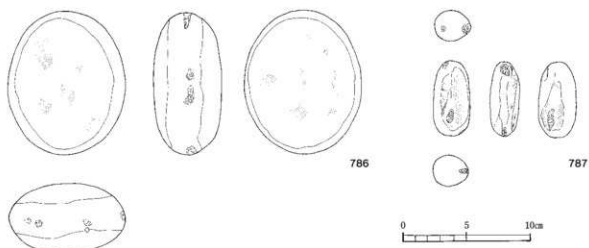
磨石・敲石 (第189図786, 787)

786はP-10区で出土したもので、砂岩の円礫を使う。両面に磨痕、側面に部分的に敲打痕がある。

787はQ-10で出土した。小形のもので、やや縦長である。両面と片側面に磨痕があり、端部には敲打痕がある。



第188図 縄文時代前期の石器 (30)



第189図 縄文時代前期の石器 (31)

(表採資料)

出土位置が曖昧なものはすべて表採扱いとした。

打製石鏃 (第190図788~794)

石材にはチャート、頁岩、ホルンフェルスがある。

石匙 (第190図795~798)

795、796は横長のものでチャートと頁岩製である。

797、798は縦長のものである。どちらも頁岩製である。798は「魚型」を呈しており、特徴的である。

磨製石斧 (第191図799、800)

799は刃部が丁寧に磨かれているもので、頁岩製である。800は欠損品で、全容はよくわからない。

石核 (第191図801)

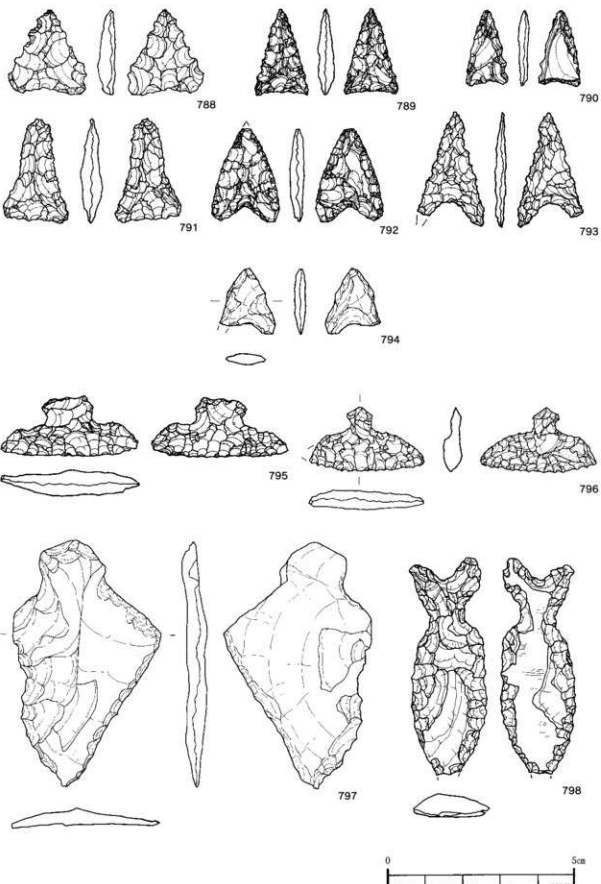
801は砂岩を打ち欠いたものである。打面は自然面を残す。打面と正面との境付近がつぶれている。

石製垂飾品 (第191図802)

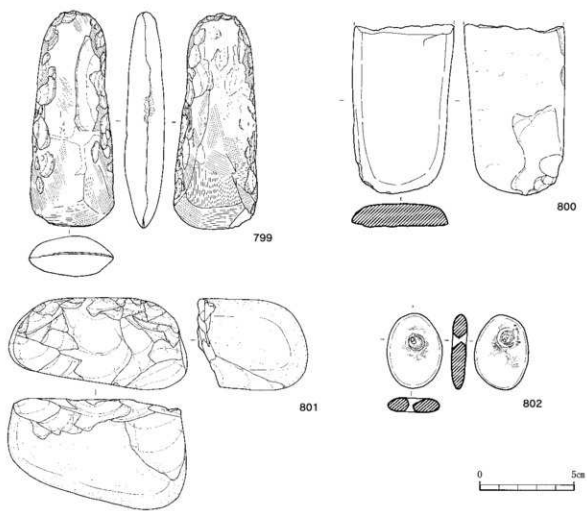
802は扁平な頁岩の円環に穿孔のあるものである。両面を磨っている。穿孔はやや上に偏った部分にあり、両面から逆円錐状にあげている。

剥片 (第192図803)

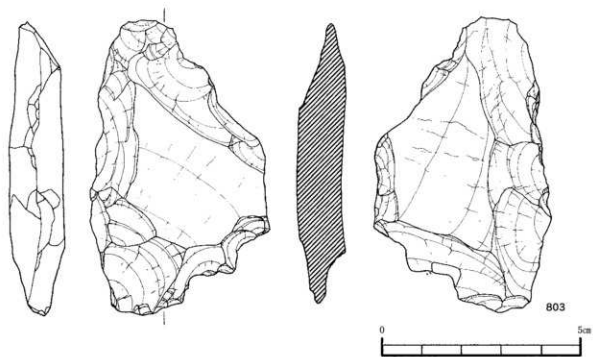
803は剥片の側縁に剥離を施したものである。



第190図 表採資料(1)



第191図 表採資料(2)



第192図 表採資料(3)

第7節 古墳時代以降

三角山1遺跡では明確な層がないが、かろうじてI層下部に該当する。時期が明確でないが遺構として土坑が5基、遺物は土師器が1点のみである。

遺物の集中はB地区の稜線上と斜面にみられた。

(1) 遺構

① 土坑

5基検出されたが、いずれも明確な時期を示す遺物が無いため、アカホヤ火山灰降下後に形成された遺構としか分からない。

土坑1 (N-12区)

Ⅲ層掘り下げ中に明確なプランを確認した。それまでは、ぼんやりしていて明白ではなかった。長径178cm・短径69cm・検出面からの深さ50~70cmの長方形形状の土坑である。埋土は茶褐色土で分層できず、アカホヤ火山灰のブロックが入っている。埋土中から土器1点が出土したが、小片のため時期や用途は不明である。埋土の状況から、この土器片は土坑を掘る際に包含層中に入ったものが流れ込んだものと思われる。

土坑2 (N-13区)

N-13・14区境ベルト土層断面を精査中に検出された。IIc層以上が崩落ぎみであるが、埋土の大部分がⅢ層の腐植土で占められていることから、少なくともⅢ層上面から掘り込まれているようだ。長径は不明だが短径は上面99cm・深さは約150cmである。土坑1と同じような長方形形状の土坑であるかもしれない。埋土は2層に分層できるが、大部分が濃い橙色から淡茶褐色土の同一層である。諸般の事情により、全体の把握が出来なかったのは残念である。

土坑3 (D-13区)

IIb層上面を精査中に検出された。埋土はIIa層である。諸般の事情により、Ⅲ層上面コンタ図と写真から図を作成した。長径111cm・短径43cm・検出面からの深さ40cmの長方形形状の土坑である。

土坑4 (C・D-12区)

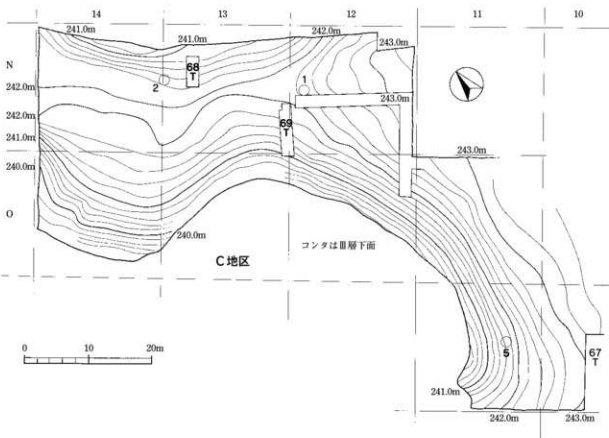
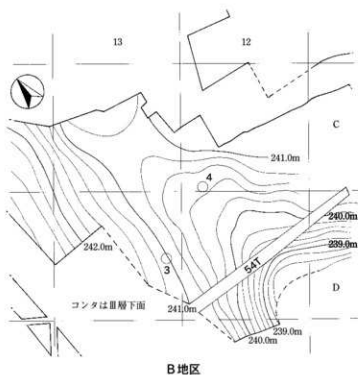
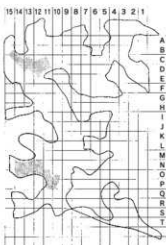
土坑3と同様、IIb層上面を精査中に検出された。埋土はIIa層である。これも諸般の事情により、Ⅲ層上面コンタ図と写真から図を作成した。長径120cm・短径37cm・検出面からの深さ50cmの長楕円形の土坑である。

土坑5 (P-11区)

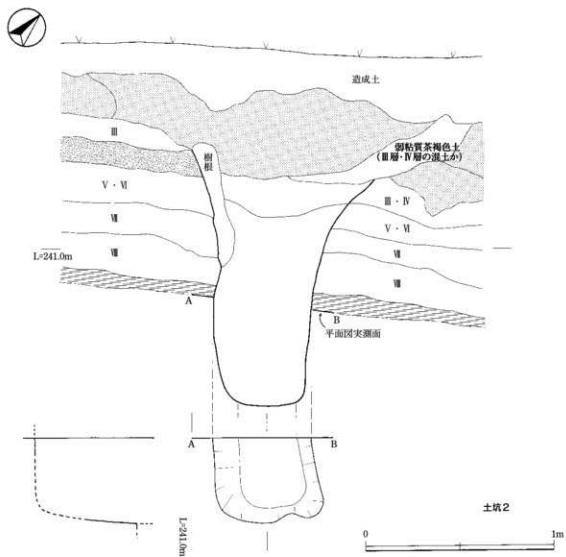
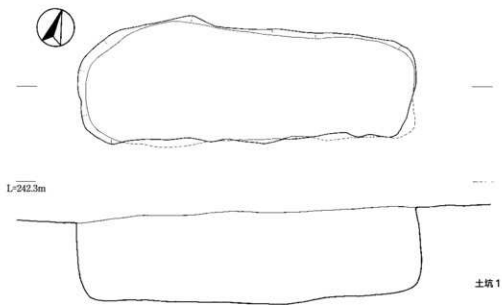
IIc層アカホヤ火山灰の残存状態が悪く、Ⅲ層上面まで重機で剥ぎ取った後、その精査中に検出された。

埋土は3層に分層でき、アカホヤ火山灰のブロックや炭化物が混じる。長径98cm・短径69cm・検出面からの深さ48cmの、やや崩れた楕円形の土坑である。

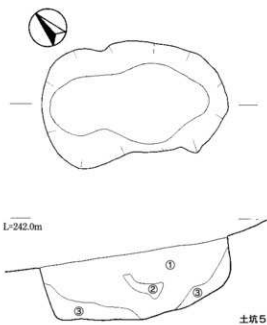
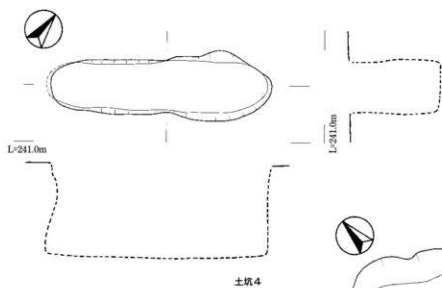
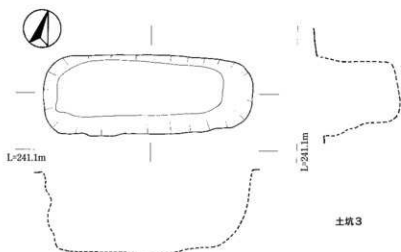
凡例
○ 土坑



第193図 古墳時代以降の遺構配置図



第194図 土坑(1)

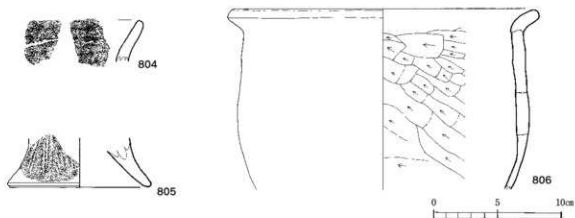


凡例

- ① 炭化物・アカホヤ・田層のブロックのまじる土
- ② 特にアカホヤブロックを含む土
- ③ アカホヤがにごった感じの土で、ブロック等は見られない



第195図 土坑（2）



第196図 古墳時代と古代の土器

(2) 遺物

① 土器

古墳時代相当のもの（第195図804, 805）と古代相当のもの（第195図806）の数が出土している。

804, 805は西之表市能野貝塚を標識とする能野式土器と思われる。甕形土器の口縁部（804）と脚部（805）と思われる。

806は土師器甕である。底部は不明である。口縁は短く外反し、端部は丸い。胴部は余り張らず、ほぼ真っ直ぐである。外面はナデ調整で、内面は、口縁はヨコナデであるが、胴部は斜方向のヘラケズリである。